

青年

森 鷗外



新潮文庫

作家を志して上京した青年小泉純一は、有名な作家を訪ねたり、医科大学生大村に啓発されたりして日々を過す一方、劇場で知りあった謎の目をもつ坂井未亡人とも交渉を重ねる。しかし、夫人を追ってきた箱根で、夫人が美しい肉の塊にすぎないと感じた時純一は、今こそ何か書けそうな気がしてくるのだった。——青春の事件を通して、一人の青年の内面の成長過程を追求した長編。



昭和二十三年十二月十五日 発行
昭和四十三年三月三十日 三十二刷改版
昭和五十五年三月五日 五十四刷

著者 森鷗外

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六〇五一
編集部(〇三)二六六〇五四二一
振替東京四一八〇八番

・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



印刷・錦明印刷株式会社
© Shinchōsha 1948

製本・錦明印刷株式会社
Printed in Japan

新潮文庫

青 年

森 鷗 外 著



潮 社 版

青

年

巷

小泉純一は芝日蔭町の宿屋を出て、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上野行の電車に乗った。目まぐるしい須田町の乗換も無事に済んだ。さて本郷三丁目まで電車を降りて、追分から高等学校に附いて右に曲がって、根津権現の表坂上にある袖浦館という下宿屋の前に到着したのは、十月二十何日かの午前八時であった。

此処は道が丁字路になっている。権現前から登って来る道が、自分の迎って来た道を鉛直に切る処に袖浦館はある。木材にペンキを塗った、マッチの箱のような擬西洋造である。入口の鴨居の上に、木札が沢山並べて嵌めてある。それに下宿人の姓名が書いてある。

純一は立ち留まって名前を読んで見た。自分の捜す大石狷太郎という名は上から二三人目に書いてあるので、すぐに見附かった。赤い襷を十文字に掛けて、上り口の板縁に雑巾を掛けている十五六の女中が、雑巾の手を留めて、「どなたの所へいらっしゃるの」と問うた。

「大石さんにお目に掛りたいのだが」

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞を使うのである。丁度不慣な外国語を使うように、一語一語考えて見て口に出すのである。そしてこの返事の無難に出来たのが、心中で嬉しかった。

雑巾を掴んで突っ立った、ませた、おちゃっぴいな小女の目に映じたのは、色の白い、卵から解ったばかりの雛のような目をしている青年である。薩摩紵の袴に小倉の袴を穿いて、同じ紵の袴羽織を着ている。被物は柔かい茶褐の帽子で、足には紺足袋に薩摩下駄を引掛けている。当前の書生の風俗ではあるが、何から何まで新しい。これで昨夕始めて新橋に着いた田舎者とは誰にも見えない。小女は親しげに純一を見て、こう云った。

「大石さんの所へいらっしったの。あなた今時分いらっしったって駄目よ。あの方は十時にならなくっちゃあ起きていらっしやらないのですもの。ですから、いつでも御飯は朝とお午とが一日よになるの。お帰りが二時になったり、三時になったりして、それからお休みになると、一日寐ていらっしってよ」

「それじゃあ、少し散歩をしてから、又来るよ」

「ええ。それが好うございます」

純一は権現前の坂の方へ向いて歩き出した。二三歩すると袂から方眼図の小さく折ったのを出して、見ながら歩くのである。自分の来た道では、官員らしい、洋服の男や、角帽の学生や、白い二本筋の帽を被った高等学校の生徒や、小学校へ出る子供や、女学生なんぞが、ぞろぞろと本校の通の方へ出るのに擦れ違ったが、今坂の方へ曲って見ると、まるで往來がない。右は高等学校の外圍、左は角が出来たばかりの会堂で、その傍の小屋のような家から車夫が声を掛けて車を勧めた処を通り過ぎると、土塀や生垣を繞らした屋敷ばかりで、その間に綺麗な道が、ひろびろと附いている。

広い道を歩くものが自分ひとりになると共に、この頃の朝の空気の、毛髪の根を緊縮させるような渋みを感じた。そして今小女に聞いた大石の日常の生活を思った。国から態々逢いに出来た大石という男を、純一は頭の中で、臆気でない想像図にえがいているが、今聞いた話はこの図の輪廓を少しも傷けはしない。傷けないばかりではない、一層明確にしたように感ぜられる。大石というものに対する、純一が景仰と畏怖との或る混合の感じが明確になったのである。

坂の上に出た。地図では知れないが、割合に幅の広いこの坂はSの字をぞんざいに書いたように屈曲して附いている。純一は坂の上で足を留めて向うを見た。

灰色の薄曇をしている空の下に、同じ灰色に見えて、しかも透き徹った空気に浸されて、向うの上野の山と自分の立っている向うが岡との間の人家の群が見える。ここで目に映ずるだけの人家でも、故郷の町程の大きはあるように思われるのである。純一は暫く眺めていて、深い呼吸をした。

坂を降りて左側の鳥居を這入る。花崗石を敷いてある道を根津神社の方へ行く。下駄の磬のよりに鳴るのが、好い心持である。剥げた木像の据えてある隨身門から内を、古風な瑞籬で囲んである。故郷の家で、お祖母様のお部屋に、錦絵の屏風があった。その絵に、どこの神社であったか知らぬが、こんな瑞垣があったと思う。社殿の縁には、ねんねこ絆纏の中へ赤ん坊を負って、手拭の鉢巻をした小娘が腰を掛けて、寒そうに体を凍めている。純一は拜む気にもなれぬので、小さい門を左の方へ出ると、溝のような池があって、向うの小高い処には常磐木の間葉の黄ばんだ木の雑った木立がある。濁ってきたない池の水の、所々に泡の浮いているのを見ると、厭に

なつたので、急いで裏門を出た。

敷下の狭い道に這入る。多くは格子戸の嵌まっている小さい家が、一列に並んでいる前に、売物の荷車が止めてあるので、体を横にして通る。右側は崩れ掛って住まわれなくなった古長屋に戸が締めてある。九尺二間というのがこれだなど思つて通り過ぎる。その隣に冠木門のあるのを見ると、色川国士別邸と不恰好な木札に書いて釘附にしてある。妙な姓名なので、新聞を読むうちに記憶していた、どこかの議員だつたなど思つて通る。それから先きは余り綺麗でない別荘らしい家と植木屋のような家とが続いている。左側の丘陵のような処には、大分大きい木が立っているのを、ひどく乱暴に刈り込んである。手入の悪い大きい屋敷の裏手だなど思つて通り過ぎる。

爪先上がりの道を、平になる処まで登ると、又右側が崖になつていて、上野の山までの間の人家の屋根が見える。ふいと左側の籠塀のある家を見ると、毛利某という門札が目につく。純一は、おや、これが鷗村の家だなど思つて、一寸立って胸寄の中を覗いて見た。

干からびた老人の癖に、みずみずしい青年の中にはいつてまごついている人、そして愚痴と厭味とを言っている人、竿と紐尺とを持って測地師が土地を測るような小説や脚本を書いている人の事だから、今時分は苦虫を咬み潰したような顔をして起きて出て、台所で炭薪の小言でも言っているだらうと思つて、純一は身願をして門前を立ち去つた。

四辻を右へ坂を降りると右も左も菊細工の小屋である。国の芝居の木戸番のように、高い台の上に胡坐をかいた、人買か巾着切りのような男が、どの小屋の前にもいて、手に手に絵番附のよ

うなものを持っているのを、往来の人に押し附けるようにして、うるさく見物を勧める。まだ朝早いので、通る人が少い処へ、純一が通り掛かったのだから、道の両側から純一人を的にして勧めるのである。外から見えるようにしてある人形を見ようと思つても、純一は足を留めて見ることが出来ない。そこで覚えず足を早めて通り抜けて、右手の広い町へ曲つた。

時計を出して見れば、まだ八時三十分にはかならない。まだなかなか大石の目の醒める時刻にはならないので、好い加減な横町を、上野の山の方へ曲つた。狭い町の両側は穢ない長屋で、塩煎餅を焼いている店や、小さい荒物屋がある。物置にしてある小屋の開戸が半分開いているために、身を横にして通らねばならない処さえある。勾配のない溝に、芥が落ちて水が淀んでいる。血色の悪い、瘡せこけた子供がうろろしているのを見ると、いたずらをする元気もないように思われる。純一は国なんぞにはこんな哀なところはないと思つた。

曲りくねって行くうちに、小川に掛けた板橋を渡つて、田圃が半分町になり掛かつて、掛流しの折のような新しい家の疎に立っている辺に出た。一軒の家の横側に、ペンキの大字で楽器製造所と書いてある。成程、こんな物のあるのも国と違ふところだと、純一は驚いて見て通つた。

ふいと墓地の横手を谷中の方から降りる、田舎道のような坂の下に出た。灰色の雲のある処から、ない処へ日が廻つて、黄いろい、寂しい暖みのある光がさつと差して来た。坂を上つて上野の一部を見ようか、それでは余り遅くなるかも知れないと、危ぶみながら佇立している。

さつきから坂を降りて来るのが、純一が視野のはずれの方に映っていた、書生風の男がじき傍まで来たので、覚えず顔を見合せた。

「小泉じゃあないか」

先方から声を掛けた。

「瀬戸か。出し抜けに逢ったから、僕はびっくりした」

「君より僕の方が余っ程驚かなくちゃあならないのだ。何時出て来たい」

「ゆうべ着いたのだ。やっぱり君は美術学校にいるのかね」

「うむ。今学校から来たのだ。モデルが病氣だと云って出て来ないから、駒込の友達の処へでも行こうと思って出掛けたところだ」

「そんな自由な事が出来るのかね」

「中学とは違うよ」

純一は一本参ったと思った。瀬戸速人とはY市の中学で同級にいたのである。

「どこがどんな処だか、分からないから為方がない」

純一は厭味気なしに折れて出た。瀬戸も実は受持教授が展覧会事務所に往っていないのを幸に、腹が痛いか何とか云って、ごまかして学校を出て来たのだから、今度は自分の方で気の毒なような心持になった。そして理想主義の看板のような、純一の黒く澄んだ瞳で、自分の顔の表情を見られるのが、頗る不愉快であった。

この時十七八の、不断着で買物にでも行くというような、廂髪の一吋愛敬のある娘が、袖が障るように二人の傍を通して、純一の顔を、気に入った心持を隠さずに現したような見方で見て行った。瀬戸はその娘の肉附の好い体をじっと見て、慌てたように純一の顔に視線を移した。

「君はどこへ行くのだい」

「路花に逢おうと思つて行つたところが、十時でなけりゃあ起きないということだから、この辺をさっきからぶらぶらしている」

「大石路花か。なんでもひどく無愛想な奴だということだ。やっぱり君は小説家志願でいるのだね」

「どうなるか知ればしないよ」

「君は財産家だから、なんでも好きな事を遣るが好いさ。紹介でもあるのかい」

「うむ。君が東京へ出てから中学へ来た田中という先生があるのだ。校友会で心易くなつて、僕の処へ遊びに来たのだ。その先生が大石の同窓だもんだから、紹介状を書いて貰つた」

「そんなら好かろう。随分話のしにくい男だというから、ふいと行つたつて駄目だらうと思つたのだ。もうそろそろ十時になるだらう。そこいらまで一しよに行こう」

二人は又狭い横町を抜けて、幅の広い寂しい通を横切つて、純一の一度渡つた、小川に掛けた生木の橋を渡つて、千駄木下の大通に出た。菊見に行くらしい車が、大分続いて藍染橋の方から来る。瀬戸が先へ立つて、ペンキ塗の杵にゐで井病院と仮名違に書いて立ててある、西側の横町へ這入るので、純一は附いて行く。瀬戸が思い出したように問うた。

「どこにいるのだい」

「まだ日蔭町の宿屋にいる」

「それじゃあ居所が極まつたら知らせしてくれ給えよ」

瀬戸は名刺を出して、動坂の下宿の番地を鉛筆で書いて渡した。

「僕はここにいる。君は路花の処へ入門するのかね。盛んな事を遣って盛んな事を書いていると
いうじゃないか」

「君は読まないか」

「小説はめつたに読まないよ」

二人は藪下へ出た。瀬戸が立ち留まった。

「僕はここで失敬するが、道は分かるかね」

「ここはさっき通った処だ」

「それじゃあ、いずれその内」

「左様なら」

瀬戸は団子坂の方へ、純一は根津権現の方へ、ここで袂を分かった。

式

二階の八畳である。東に向いている、西洋風の硝子窓二つから、形紙を張った向側の壁まで一
ぱいに日が差している。この袖浦館という下宿は、支那学生なんぞを目当にして建てたものらし
い。この部屋は近頃まで印度学生が二人住まって、籐の長椅子の上にごろごろしていたのであ
る。その時廉い羅氈の敷いてあった床に、今は畳が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子

が置いてある。

テエブルの足を切ったような大机が、東側の二つの窓の間の処に、少し壁から離して無造作に据えてある。何故窓の前に置かないのだと、友達がこの部屋の主人に問うたら、窓掛を引けば日が這入らない、引かなければ目ぶしいと云った。窓掛の白木綿で主人が濡手を拭いたのを、女中が見て亭主に告口をしたことがある。亭主が苦情を言いに来たところが、もう洗濯をしても好い頃だと、あべこべに叱って恐れ入らせたそうだ。この部屋の主人は大石狷太郎である。

大石は今顔を洗って帰って来て、更紗の座布団の上に胡坐をかいて、小さい薬罐の湯気を立てている火鉢を引き寄せて、敷島を吹かしている。そこへ女中が膳を持って来る。その膳の汁椀の側に、名刺が一枚載せてある。大石はちよいと手に取って名前を読んで、黙って女中の顔を見た。女中はこう云った。

「御飯を上がるのだと申しましたら、それでは待っていると仰しゃって、下にいらっしやいます」

大石は黙って頷いて飯を食い始めた。食いながら座布団の傍にある東京新聞を拵げて、一面の小説を読む。これは自分が書いているのである。社に出ているうちに校正は自分でして置いて、これだけは毎朝一字残さずに読む。それが非常に早い。それからやはり自分の担当している附録にざっと目を通す。附録は文学欄で填めていて、記者は四五人の外に出でない。書くことは、第一流と云われる二三人の作の批評だけであって、その他の事には殆ど全く容喙しないことになっている。大石自身はその二三人の中の一人なのである。飯が済むと、女中は片手に膳、片手に土

瓶を持って起ちながら、こう云った。

「お客様をお通し申しましょるか」

「うむ、来ても好い」

返事はしても、女中の方を見もしない。随分そっけなくして、笑談一つ言わないのに、女中は飽くまで丁寧にしている。それは大石が外の客の倍も附届をするからである。窓掛一件の時亭主が閉口して引っ込んだのも、同じわけで、大石は下宿料をきちんと払う。時々は面倒だから来月分も取って置いてくれいなんと云うことさえある。袖浦館の上から下まで、大石の金力に刃向うものはない。それでいて、着物なんぞは随分質素にしている。今着ている銘撰の綿入と、締めている白縮緬のへこ帯とは、相応に新しくはあるが、寝る時もこのまま寝て、洋服に着換えない時には、このままでどこへでも出掛けるのである。

大石が東京新聞を見てしまつて、傍に疊ねて置いてある、外の新聞二三枚の文学欄だけを拾読をするところへ、さっきの名刺の客が這入つて来た。二十二三の書生風の男である。縞の綿入に小倉袴を穿いて、羽織は着ていない。名刺には新思潮記者とあつたが、實際この頃の真面目な記者には、こういう風なのが多いのである。

「近藤時雄です」

鋭い目の窪んだ、鼻の尖つた顔に、無造作な愛敬を湛えて、記者は名告つた。

「僕が大石です」

目を挙げて客の顔を見ただけで、新聞は手から置かない。用があるなら、早く言つてしまつて

帰れとでも云いそうな心持が見える。それでも、近藤の顔に初め見えていた微笑は消えない。主人が新聞を手から置くことを予期しないと見える。そしてあらゆる新聞雑誌に肖像の載せてある大石が、自分で名を名告ったのは、全く無用な事であって、その無用な事をしたのは、特に恩恵を施してくれたのだ位に思っているのかも知れない。

「先生。何かお話は願われますまいか」

「何の話ですか」

新聞がやっと手を離れた。

「現代思想というようなお話が伺われると好いのですが」

「別に何も考えてはいません」

「しかし先生のお作に出ている主人公や何ぞの心持ですな。あれをみんなが色々に論じています。が、先生はどう思っている主人公や何ぞの心持です。そういう事をお話なすって下さると我々青年は為合せなのですが。ほんの片端で宜しいのです。手掛りを与えて下されば宜しいのです」

近藤は頻りに迫っている。女中が又名刺を持って来た。紹介状が添えてある。大石は紹介状の田中亮という署名と、小泉純一持参と書いてある処とを見た切りで、封を切らずに下に置いて、女中に言った。

「好いからお通なさいと云っておくれ」

近藤は肉薄した。

「どうでしょう、先生、願われますまいか」

梯子はしごの下まで来て待つていた純一は、すぐに上がって来た。そして来客のあるのを見て、少し隔った処から大石に辞儀をして控えている。急いで歩いて来たので、少し赤みを帯びている顔から、曇のない黒い瞳が、珍らしい外の世界を覗いている。大石はこの瞳の光を自分の顔に注がれたとき、自分の顔の覚えす齷はねやかになるのを感じた。そして熱心に自分の顔を見詰めている近藤にこう云った。

「僕の書く人物に就いて言われるだけの事は、僕は小説で言っている。その外に何があるもんかね。僕はこの頃長い論文なんかは面倒だから読まないが、一体僕の書く人物がどうだと云っているかね」

始めて少し内容のあるような事を言った。それに批評家が何と云っていると云うことを、向うに話させれば、勢いきおいその通だとか、そうではないとか云わなくてはならなくなる。今来た少年の、無垢むくの自然をそのままのような目附を見て、ふいと韁たづなが緩ゆるんだなど、大石は気が附いたが、既に遅かった。

「批評家は大体こう云うのです。先生のお書になるものは真の告白だ。ああ云う告白をなさる厳肅な態度に服する。Aurelius Augustinusオオレリアス オオガストゥスだとか、Jean Jaques Rousseauジャンジャック ルソだとか云うような、昔の人の取った態度のようだと云うのです」

「難有ありがたいわけだね。僕は今の先生方の論文も面倒だから読まないが、昔の人の書いたものも面倒だから読まない。しかし聖 Augustinusオオガストゥスは若い時に乱行を遣やつて、基督教に這入こってから、態度を一変してしまつて、fanaticファンナチックな坊さんになつて懺悔ざんげをしたのださうだ。Rousseauルソは妻と名の附か

ない女と一しょにいて、子が出来たところで、育て方に困って、孤児院へ入れたりなんぞしたことを懺悔したが、生れつき馬鹿に堅い男で、伊太利の公使館にいた時、すばらしい別品の処へ連れて行かれたのに、顛え上ってどうもすることが出来なかつたというじゃあないか。僕の書いている人物はだらしない事を遣っている。地獄を買っている。あれがそんなにえらいと云うのかね」

「ええ。それがえらいと云うのです。地獄はみんなが買います。地獄を買っていて、己は地獄を買っていると自省する態度が、厳肅だと云うのです」

「それじゃあ地獄を買わない奴は、厳肅な態度は取れないと云うのかね」

「そりゃあ地獄を買うことの出来ないような偏屈な奴もありましょう。買っても、矯飾して知らない振をしている奴もありましょう。そういう奴は内生活が貧弱です。そんな奴には芸術の趣味なんかは分かりません。小説なんぞは書けません。懺悔の為様が、告白をする内容がない。厳肅な態度の取りようがないと云うのです」

「ふん。それじゃあ偏屈でもなくって、矯飾もしないで、芸術の趣味の分かる、製作の出来る人間はいないと云うのかね」

「そりゃあ、そんな神のようなものが有るとも無いとも、誰も断言はしていません。しかし批評の対象は神のようなものではありません。人間です」

「人間は皆地獄を買うのかね」

「先生。僕を冷かしては行けません」

「冷かしなんぞほししない」大石は睫毛をも動かさずに、ゆったり胡坐をかいている。

帳場のぼんぼん時計が、前触に鍋に物の焦げ附くような音をさせて、大業に打ち出した。留所もなく打っている。十二時である。

近藤は氣の附いたような様子をして云った。

「お邪魔をいたしました。又伺います」

「さようなら。こっちのお客が待たせてあるから、お見送りはしませんよ」

「どう致しまして」近藤は席を立った。

大石は暫くじっと純一の顔を見て、氣色を柔けて詞を掛けた。

「君ひどく待たせたねえ。飯前じゃないか」

「まだ食べたくありません」

「何時に朝飯を食ったのだい」

「六時半です」

「なんだ。君のような壮んな青年が六時半に朝飯を食って、午が来たのに食べたくないということがあるものか。嘘だろう」

語氣が頗る鋭い。純一は一寸不意に出られてまごついたが、主人の顔を仰いでいる目は逸さなかつた。純一の心の中では、こういう人の前で世間並の空辭儀をしたのは悪かつたと思う悔やら、その位な事をしたからと云って、行きなり叱ってくれなくても好きさうなものだと思ふ不平やらが籠み合つて、それでまごついたのである。

「僕が悪うございました。食べたかないと云ったのは嘘です」

「はははは。君は素直で好い。ここの内の飯は旨くはないが、御馳走しよう。その代り一人で食うのだよ。僕はまだ朝飯から二時間立たないのだから」

詠あぢらえた飯は直ぐに來た。純一が初に懲りて、遠慮なしに食うのを、大石は面白そうに見て、煙草を呑んでゐる。純一は食いながらこんな事を思うのである。大石という人は變つてゐるだらうとは思つたが、随分勝手の違いようがひどい。さっきの客が帰つた迹あとで、黙つていてくれれば、こつちから用事を言い出すのであつた。飯を食わせる程なら、何の用事があつて來たかと問うても好きそうなものだに黙つていられるから、言い出す機会がない。持つて來た紹介状も、さつきから見れば、封が切らずにある。紹介状も見ず、用事も問わずに、知らない人に行きなり飯を食わせるというような事は、話にも聞いたことがない。ひどい勝手の違いようだと思つてゐるのである。ところが、大石の考は頗る単純である。純一が自分を崇拜してゐる青年の一人だということとは、顔の表情で知れてゐる。田中が紹介状を書いたのを見ると、何処どこから來たということも知れてゐる。Y県出身の崇拜者。目前で大飯を食つてゐる純一の attributeアトリビュートはこれで尽きてゐる。多言を須もちいなく思つてゐるのである。

飯が済んで、女中が膳を持つて降りた。その時大石はついと立って、戸棚とだなから羽織を出して着ながらこう云つた。

「僕は今から新聞社に行くから、又遊びに來給え。夜は行けないよ」

机の上の書類を取つて懐ふところに入れる。長押ながしから中折れの帽を取つて被る。転瞬てんしゆん倏忽しゆくの間に梯子段

を降りるのである。純一は呆れて帽を擽んで後に続いた。

参

初めて大石を尋ねた翌日の事である。純一は居所を極めようと思って宿屋を出た。

袖浦館を見てから、下宿屋というものが厭になつていたので、どこか静かな処で小さい家を借りようと思うのである。前日には大石に袖浦館の前で別れて、上野へ行つて文部省の展覧会を見て帰つた。その時上野がなんとなく気に入つたので、きょうは新橋から真直に上野へ来た。

博物館の門に突き当つて、根岸の方へ行こうか、きのう通つた谷中の方へ行こうかと暫く考えたが、大石を尋ねるに便利な処をと思つているので、足が自然に谷中の方へ向いた。美術学校の角を曲つて、桜木町から天王寺の墓地へ出た。

今日も風のない好い天気である。銀杏の落葉の散らばつてゐる敷石を踏んで、大小種々な墓石に掘つてある、知らぬ人の名を読みながら、ぶらぶらと初音町に出た。

人通りの少い広々とした町に、生垣を結び繞らした小さい家の並んでゐる処がある。その中の一軒の、自然木の門柱に取り附けた柴折戸に、貸家の札が張つてあるのが目に附いた。

純一がその門の前に立ち留まつて、垣の内を覗いてみると、隣の植木鉢を沢山入口に並べてある家から、白髪の婆あさんが出て来て話をし掛けた。聞けば貸家になつてゐる家は、この婆あさんの亭主で、植木屋をしていた爺いさんが、倅に廻を取つて家を譲るとき、新しく立てて這入つ

た隠居所なのである。爺いさんは四年前に、倅が戦争に行っている留守に、七十幾つとかで亡くなった。それから貸家にして、油画をかく人に借していたが、先月その人が京都へ越して行って、明家あきやになったというのである。画家は一人ものであった。食事は植木屋から運んだ。総てこの家から上がる銭は婆あさんのものになるので、若し一人ものお客が附いたら、やはり前通りすべに食事の世話をして好いと云っている。

婆あさんの質樸しつぱくで、身綺麗しんけいにしているのが、純一にはひどく気に入った。婆あさんの方でも、純一の大人おとなしそうな、品の好いのが、一目見て気に入ったので、「お友達があつて、御一しょにお住まいになるなら、それでも宜よろしゅうございますが、出来ることならあなたのようなお方に、お一人で住まうて戴いたきたいのでございます」と云った。

「まあ、とにかく御覧なすつて下さい」と云つて、婆あさんは柴折戸を開けた。純一は国のお祖母あ様の腰が曲つて耳の遠いのを思い出して、こんな嚴げん乗じやうな年寄もあるものかと思ひながら、一しょに這入つて見た。婆あさんは建ててから十年になると云うが、住み荒したと云うような処は少しもない。この家に手入をして綺麗にするのを、婆あさんは為事しごとにしてると云つてゐるが、いかにもそうらしく思われる。一番好い部屋は四疊半で、飛石の曲り角に躑つくばいの手水鉢てみづばちが据えてある。茶道口ちやどうぐちのような西側の戸の外は、鏡のように拭き入れた廊下で、六疊の間に続けてある。それに勝手が附いている。

純一はこれまで、茶室というと陰気な、厭な感じが伴うように思つていた。国の家には、旧藩時代に殿様がお出いでになつたという茶席がある。寒くなつてからも蚊がいて、氣の詰まるような処

であった。それにこの家は茶掛ちやがかつた拵こしらえでありながら、いかにも晴晴はるはるしている。縁口えりぐちのような戸口が南向みなみむかひになつていて、東の窓の外は狭い庭を隔へて、直ぐに広い往来わらいになつてゐるからであらう。

話はいつ極まるともなく極まつたという工合である。一巡ひとまわりして来て、縁口えりぐちに据たえてある、大きい鞍馬石くらまいしの上に立ち留とどまつて、純一が「午ひるから越こして来ても好いのですか」と云うと、躑つひの傍そばの苔こけにまじつてゐる、小さい草を撮つまんで抜ひいていた婆あさんが、「宜よろしいどころじゃあございません、この通りいつでもお住まいになるように、毎日掃除そうじをしていますから」と云つた。

隣の植木屋うゑ木屋との間は、低い竹垣たけがきになつていて、丁度純一の立たつてゐる向うの処ところに、花の散ちつてしまつた萩はぎがまん円まに繁しげつてゐる。その傍そばに二度咲にどざきのダアリアの赤あかに黄きの雜まじつた花はなが十ばかり、高く首くびを擡もたげて咲さいてゐる。その花の上に青み掛かかつた日の光ひかりが一いぱいに差さしてゐるのを、純一が見るともなしに見みてゐると、萩はぎの茂もみを離はなれて、ダアリアの花の間へ、幅ひろの広いクリム色のリボンリボンを掛かけた束髪たつかみの娘むすめの頭あたまがひょいと出でた。大きい目で純一をじいっと見みてゐるので、純一もじいっと見みてゐる。

婆あさんは純一の視線しせんを辿たどつて娘の首くびを見み着きけて、「おやおや」と云つた。

「お客さま」

答こたを待まちたない問との調子てうしで娘は云いつて、にっこり笑わらつた。そして萩はぎの茂もみに隠かくれてしまつた。

純一は午後越ごして来る約束やくそくをして、忙いそがしそうにこの家の門かどを出でた。植木屋うゑ木屋の前まえを通とほるとき、ダアリアの咲さいてゐるあたりを見みたが、四枚並よっぺべて敷しいてある御蔭石みかげいしが、萩はぎの植うゑわつてゐる処ところか

ら右に折れ曲つていて、それより奥は見えなかった。

四

初音町に引き越してから、一週間目が天長節であった。

瀬戸の処へは、越した晩に葉書を出して、近い事だから直ぐにも来るかと思つたが、まだ来ない。大石の処へは、二度目に尋ねて行つて、詩人になりたい、小説が書いて見たいと云う志願を話して見た。詩人は生れるもので、己がなろうと企てたつてなられるものではないなどと云つて叱られるすまいかと、心中危ぶみながら打ち出して見たが、大石は好いとも悪いとも云わない。稽古のしようもない。修行のしようもない。只書いて見るだけの事だ。文章なんぞというものは、擬古文でも書こうというには、稽古の必要もあろうが、そんな事は大石自身にも出来ない。自身の書いているものにも、仮名遣なんぞは沢山あるだろう。そんな事には頓着しないで遣つてゐる。要するに頭次第だと云つた。それから、とにかく余り生産的な為事ではないが、その方はどう思つているかと問われたので、純一が資産のある家の一人息子に生れて、パンの爲めに働くには及ばない身の上だと話すと、大石は笑つて、それでは生活難と闘わないでも済むから、一廉の労力の節減は出来るが、その代り刺戟を受けることが少いから、うっかりすると成功の道を踏みはずすだろうと云つた。純一は何の擱まえどころもない話だと思つて稍や失望したが、帰つてから考えて見れば、大石の言つたより外に、別に何物があるうと思つたのが間違で、そんな物

はありようがないのだと悟った。そしてなんとなく寂しいような、心細いような心持がした。一度は、家主の植長がどこからか買い集めて来てくれた家具の一つの唐机に向って、その書いて見るといふことに着手しようとして見たが、頭次第だと云う頭が、どうも空虚で、何を書いて好いか分らない。東京に出てからの感じも、何物かが有るようで無いようで、その有るようなものは雑然としていて、どこを押えて見ようという処がない。馬鹿らしくなって、一旦持った筆を置いた。

天長節の朝であった。目が醒めて見ると、四疊半の東窓の戸の隙から、オレンジ色の日が枕の処まで差し込んで、細かい塵が活潑に跳っている。枕元に置いて寝た時計を取って見れば、六時である。

純一は国にいるとき、学校へ御真影を拝みに行つたことを思い出した。そしてふいと青山の練兵場へ行つて見ようかと思つたが、すぐに又自分で自分を打ち消した。兵隊の沢山並んで歩くのを見たつてつまらないと思つたのである。

そのうち婆あさんが朝飯を運んで来たので、純一が食べていると、「お婆あさん」と優しい声で呼ぶのが聞えた。純一の目は婆あさんの目と一しよに、その声の方角を迎つて、南側の戸口の処から外へ、ダリアの花のあたりまで行くと、この家を借りた日に見た少女の頭が、同じ処に見えている。リボンはやはりクリム色で、容赦なく睨いた大きい目は、純一が宮島へ詣つたとき見た鹿の目を思い出させた。純一は先の日にちらと見たばかりで、その後この娘の事を一度も思い出さずにいたが、今又ふいとその顔を見て、いつの間にか余程親しくなっているような心持

がした。意識の闕しきいの下を、この娘の影が往来していたのかも知れない。婆あさんはこう云った。「おや、いらっしやいまし。安は団子坂まで買物に参りましたが、もう直じきに帰かへって参りましよ。まあ一寸ちよつとこちらへいらっしやいまし」

「往いっても好よくって」

「ええええ。あちらから廻まわっていらっしやいまし」

少女の頭は萩の茂みの蔭に隠れた。婆あさんは純一に、少女が中沢という銀行頭取の娘で、近所の別荘に居いるということ、姫の安がもと別荘で小間使まがをしていて娘と仲好だということを話した。

その隙ひまに植木屋の勝手の方へ廻まわったお雪さんは、飛石伝いに離れの前に来た。中沢の娘はお雪さんというのである。

婆あさんが、「この方かたが今度越していらっしやった小泉さんという方でございます」というと、お雪さんは黙もくってお辞儀をして、純一の顔をじいっと見て立たっている。着物も羽織もくすんだ色の銘撰であるが、長い袖の八口やぐちから緋縮緬ひぢゆもんの襦袢じゆばんの袖が翻ひれ出でている。

飲み掛けた茶を下したに置いて、これも黙もくってお辞儀をした純一の顔は赤あかくなったが、お雪さんの方は却かえって平気である。そして稍々ちよちよ身を反そらせて居いるかと思おもわれる位に、真直まぢに立たっている。純一はそれを見て、何だか人に逼せまるような、戦いくさを挑いどむような態度だと感じたのである。

純一は何とか云わなくてはならないと思おもったが、どうも詞ことばが見付みからなかつた。そして茶碗を取り上げて、茶を一口に飲んだ。婆あさんが詞ことばを挟はさんだ。

「お嬢様は好く画を見にいらっしやいましたが、小泉さんは御本をお読みなさるのですから、折いらっしやって御本のお話をお聞きなさいますと宜しゅうございます。御本のお話はお好きでございましょう」

「ええ」

純一は、「僕は本は余り読みません」と云った。言つて了うと自分で、まあ、何と云う馬鹿氣た事を言ったものだらうと思つた。そしてお雪さんの感情を害しはしなかつたかと思つて、氣色を伺つた。しかしお雪さんは相変らず口元に微笑を湛たたえているのである。

その微笑が又純一には氣になつた。それはどうも自分を見下している微笑のように思われて、その見下されるのが自分の当然受くべき罰のように思われたからである。

純一はどうにかして名譽を恢復かいくしなくてはならないような感じがした。そして余程勇氣を振り起して云つた。

「どうです。少しお掛なすつては」

「難あがりがとう」

右の草履が礮ひきょうの飛石を一つ踏んで、左の草履が麻の葉のような皴しゆんのある鞍馬くらまの沓くつ脱だつに上あがる。お雪さんの体がしなやかに一振り振られて、長い書生羽織に包まれた腰こしが膝口ひざぐちに卸された。諺ことわざにもいう天長節日和びよりの冬の日がぱつと差して来たので、お雪さんは目映まぶしそうな顔をして、横に純一の方に向いた。純一が国にいるとき取り寄せた近代美術史に、ナナという題のマネエの画があつて、大きな眉刷毛まゆばけを持って、鏡の前に立つて、一寸横に振り向いた娘がかいてあつた。

その稍^{すこ}や規則正し過ぎるかと思われような、細面^{ほそおもて}な顔に、お雪さんが好く似ていると思うのは、額を右から左へ斜に掠^かめている、小指の大きさ程ずつに固まった、柔かい前髪の為めもある。その前髪の下の大い目^まが、日に目映^めしがっても、少しも純一には目映^めしがらない。

「あなたお国からいらっした方^{かた}のようじゃあないわ」

純一は笑いながら顔を赤くした。そして顔の赤くなるのを意識して、ひどく忌々^{いまいま}しがった。それに出し抜けに、美中に刺^さありともいふべき批評の詞を浴^ゆせ掛けるとは、怪^けしからん事だと思つた。

婆あさんはお鉢^{はち}を持って、起^たって行^いった。二人は暫^{しばら}く無言^{むごん}でいた。純一は急に空気が重くろしくなつたように感じた。

垣の外を、毛皮の衿^{えり}の附いた外套^{がいとう}を着た客を載せた車が一つ、田端^{たばた}の方へ走って行^いった。

とうとう婆あさんが膳^{だん}を下^{くだ}げに来るまで、純一は何の詞^{ことば}をも見出^{みい}だすことを得^えなかつた。婆あさんは膳^{だん}と土瓶^{どびん}とを両手に持^もって、二人の顔を見競^{みくら}べて、「まあ、大相^{たいそう}お静^{しず}でございますね」と云^いつて、勝手^{たて}へ行^いつた。

蹲^{つくばい}の向うの山茶花^{さざんか}の枝^{えだ}から、雀^{すずめ}が一羽^{ひと}飛び下^{くだ}りて、蹲^{つくばい}の水を飲^のむ。この不思議な雀^{すずめ}が純一の結^{むす}ばれた舌^{した}を解^{ほど}いた。

「雀^{すずめ}が水を飲んでいますね」

「黙^{もく}っていらっしやいよ」

純一は起^たって閩際^{しんがい}まで出^でた。雀^{すずめ}はついと飛^とんで行^いった。お雪さんは純一の顔を仰^あいで見た。

「あら、とうとう逃がしておしまいなすってね」
「なに、僕が来なくたって逃げたのです」大分遠慮は無くなったが、下手な役者が台詞を言うような心持である。

「そうじゃないわ」詞遣は急劇に親密の度を加えて来る。少し間を置いて、「わたし又来てよ」と云うかと思うと、大きい目の閃を跡に残して、千代田草履は飛石の上をばたばたと踏んで去った。

五

純一は机の上にある仏蘭西の雑誌を取り上げた。中学にいるときの外国語は英語であったが、聖公会の宣教師の所へ毎晩通って、仏語を学んだ。初は暁星学校の教科書を読むのも辛かったが、一年程通っているうちに、ふいと楽に読めるようになった。そこで教師のベルタンさんに頼んで、巴里の書店に紹介して貰った。それから書目を送ってくれるので、新刊書を直接に取寄せている。雑誌もその書店が取り次いで送ってくれるのである。

開けた処には、セガンチニの死ぬるところが書いてある。氷山を隣に持った小屋のような田舎屋である。ろくな煖炉もない。そこで画家は死に瀕している。体のうちの臓器はもう運転を停めようとしているのに、画家は窓を開けさせて、氷の山の巔に棚引く雲を眺めている。

純一は巻を捲うて考えた。芸術はこうしたものであろう。自分の画がくべきアルプの山は現社

会である。国にいたとき夢みていた大都會の渦巻は今自分を漂わせているのである。いや、漂わせているのなら好い。漂わせていなくてはならないのに、自分は岸の蔦蘿つたかづらにかじり附いているのではあるまいか。正しい意味で生活していかないのではあるまいか。セガンチニが一度も窓を開けず、戸の外へ出なかつたら、どうだろう。そうしたら、山の上に住まっている甲斐かみはあるまい。

今東京で社会の表面に立っている人に、国の人は沢山ある。世はY県の世である。国を立つとき某元老に紹介して遣ろう、某大臣に紹介して遣ろうと云った人があつたのを皆ことわつた。それはそういう人達がどんなに偉大であろうが、どんなに権勢であろうが、そんな事は自分の目の中に置いていなかつたからである。それから又こんな事を思った。人の遭遇そくごうというものは、紹介状や何ぞで得られるものではない。紹介状や何ぞで得られるような遭遇は、別に或物あるものが土台を造っていたのである。紹介状は偶然そこへ出くわしたのである。開いている扉とらがあつたら足を容れよう。扉が閉じられていたら通り過ぎよう。こう思って、田中さんの紹介状一本の外ほかは、皆貰わずに置いたのである。

自分は東京に来てゐるには違ひない。しかしこんなにしていて、東京が分かるだろうか。こうしてゐては国の書齋しよさいにいるのも同じ事ではあるまいか。同じ事なら、まだ好い。国で中学を済ませた時、高等学校の試験を受けに東京へ出て、今では大学にはいつているものもある。瀬戸のように美術学校にはいつているものもある。直ぐに社会に出て、職業を求めたものもある。自分が優等の成績を以て卒業しながら、仏蘭西語の研究を続けて、暫く国に留とどまっていたのは、自信があり抱負があつたの事であつた。学士や博士になることは余り希望しない。世間にこれぞと云つ

て、為て見たい職業もない。家には今のように支配人任せにしても、一族が楽に暮らして行かれるだけの財産がある。そこで親類の異議のうるさいのを排して作家になりたいと決心したのであった。

そう思い立ってから語学を教えて貰っている教師のベルタンさんに色々な事を問うて見たが、この人は巴里の空気を呼吸していた人の癖に、そんな方面の消息は少しも知らない。本業で読んでいる筈の新旧約全書でも、それを偉大なる文学として観察するといふ事はない。何かその中の話を問うて見るのに、暫に文学として観ていなければならぬ、楽しんで読んでいるといふ事さえないようである。只寺院の側から観た煩瑣な註釈を加えた大冊の書物を、深く究めようとせぬに、貯蔵しているばかりである。そして日々の為事には、国から来た新聞を読む。新聞では列国の均勢とか、どこかで偶々起っている外交問題とかいふような事に氣を付けている。そんなら何か秘密な政治上のミッションでも持っているかと云うに、そうでもないらしい。恐らくは、欧米人の謂う珈琲卓の政治家の一人なのである。その外には東洋へ立つ前に買つて来たといふ医書を少し持つていて、それを読んで自分の体だけの治療をする。殊にこの人の褐色の長い髪に掩われてゐる頭には、持病の頭痛があつて、古びたタラアルのような黒い衣で包んでゐる腰のあたりにも、厭な病氣があるのを、いつも手前療治で繕つてゐるらしい。そんな人柄なので少し話を文学や美術の事に向けようとすると、顧みて他を言うのである。ようようの思でこの人に為て貰つた事は巴里の書肆へ紹介して貰つただけである。

こんな事を思つている内に、故郷の町はずれの、田圃の中に、じめじめした処へ土を盛つて、

不恰好に造ったペンキ塗の会堂が目には浮ぶ。聖公会と書いた、古びた木札の掛けてある、赤く塗った門を這入ると、瓦で築き上げた花壇が二つある。その一つには百合が植えてある。今一つの方にはコスモスが植えてある。どちらも春から芽を出しながら、百合は秋の初、コスモスは秋の季に覚束なげな花が咲くまで、いじけたままに育つのである。中にもコスモスは、胡蘿蔔のような葉がちぢれて、瘠せた幹がひよろひよろして立っているのである。

その奥の、搏風だけゴチック賽に造った、ペンキ塗のがらくた普請が会堂で、仏蘭西語を習いに行く、少数の青年の外には、いつまで立っても、この中へ這入ってくる人はない。ベルタンさんは老いぼれた料理人兼小使を一人使って、がらんとした、稍大きい家に住んでいるのだから、どこも彼処も埃だらけで、白昼に鼠が馳け廻っている。

ベルタンさんは長崎から買って来たという大きいデスクに、千八百五十年などという年号の書いてある、クロオスの色の赤だか黒だか分からなくなった書物を、乱雑に積み上げて置いてある。その側には食い掛けた腸詰や乾酪を載せた皿が、不精にも勝手に下げずに、国から来たの反古を被せて置いてある。虎斑の猫が一匹積み上げた書物の上に飛び上がって、そこで香箱を作って、腸詰の匂を嗅いでいる。

その向うに、茶褐色の長い髪を、白い広い額から、背後へ掻き上げて、例のタラアルまがいの黒い服を着て、お祖父さん椅子に、誰やらに貰ったという、北海道の狐の皮を掛けて、ベルタンさんが据わっている。夏も冬も同じ事である。冬は部屋の間、鉄砲煖炉に松真木が燻っているだけである。

或日稽古の時間より三十分ばかり早く行ったので、ベルタンさんといろいろな話をした。その時教師がお前は何になる積りかと問うたので、正直に *Romancier* になると云った。ベルタンさんは二三度問い返して、妙な顔をして黙ってしまった。この人は小説家というものに就いては、これまで少しも考えて見た事がないので、何と云って好いか分からなかったらしい。殆どわたくしは火星へ移住しますとでも云ったのと同じ位に呆れたらしい。

純一は読み掛けた雑誌も読まずにこんな回想に耽っていたが、ふと今朝婆あさんの起して置いてくれた火鉢の火が、真白い灰を被って小さくなってしまったのに気が附いて、慌てて炭をついで、頬を膨らせて頻りに吹き始めた。

六

天長節の日の午前はこんな風で立ってしまった。婆あさんの運んで来た昼食を食べた。そこへぶらりと瀬戸速人が来た。

婆あさんが倅の長次郎に白げさせて持て来た、小さい木札に、純一が名を書いて、門の柱に掛けさせて置いたので、瀬戸はすぐに尋ね当てて這入って来たのである。日当りの好い小部屋で、向き合って据わって見ると、瀬戸の顔は半分故郷にいた時とは違っている。谷中の坂の下で逢ったときには、向うから声を掛けたのと顔の形よりは顔の表情を見たのとで、さ程には思わなかったが、瀬戸の昔油ぎっていた顔が、今は干からびて、目尻や口の周囲に、何か言うと皺が出来

る。家主の婆あさんなんぞは婆あさんでも最少し艶々しているように思われるのである。瀬戸はこう云った。

「ひどくしゃれた内を見附けたもんだなあ」

「そうかねえ」

「そうかねえもないもんだ。一体君は人に無邪気な青年だと云われる癖に、食えない人だよ。田舎から飛び出して来て、大抵の人間ならまごついているんだが、誰の所をでも一人で訪問する。家を一人で探して借りる。まるで百年も東京にいる人のようじゃないか」

「君、東京は百年前にはなかったよ」

「それだ。君のそう云う方面は馬鹿な奴には分からないのだ。君はずるいよ」

瀬戸は頻りにずるいよを振り廻して、純一の知己を以て自ら任じているという風である。それからこんな事を言った。今日の午後は暇なので、純一がどこか行きたい処でもあるなら、一しよに行っても好い。上野の展覧会へ行っても好い。浅草公園へ散歩に行っても好い。今一つは自分の折々行く青年倶楽部のようなものがある。会員は多くは未来の文士というような連中で、それに美術家が二三人加わっている。極真面目な会で、名家を頼んで話をして貰う事になっている。今日は附石が来る。路花なんぞとは流派が違うが、なんにしる大家の事だから、いつもより盛んだらうと思うというのである。

純一は画なんぞを見るには、分かっても分からなくても、人と一しよに見るのが嫌である。浅草公園の昨今の様子は、ちょいちょい新聞に出る出来事から推し測って見ても、わざわざ往って

見る気にはなられない。拊石という人は流行に遅れたようではあるが、とにかく小説家中で一番学問があるそうだ。どんな人か顔を見て置こうと思った。そこで倶楽部へ連れて行って貰うことにした。

二人は初音町を出て、上野の山をぶらぶら通り抜けた。博物館の前にも、展覧会の前にも、馬車が幾つも停めてある。精養軒の東照宮の方に近い入口の前には、立派な自動車が一台ある。瀬戸が云った。

「汽車はタアナアがかいたので画になったが、まだ自動車の名画というものは聞かないね」

「そうかねえ。文章にはもう大分あるようだが」

「旨く書いた奴があるかね」

「小説にも脚本にも沢山書いてあるのだが、只使つてあるというだけのようだ。旨く書いたのはやっぱりマアテルリンクの小品位のものだろう」

「ふん。一体自動車というものは幾ら位するだろう」

「五六千円から、少し好いのは一万円以上だというじゃあないか」

「それじゃあ、僕なんぞは一生画をかいても、自動車は買えそうもない」

瀬戸は火の消えた朝日を、人のぞろぞろ歩いている足元へ無遠慮に投げて、苦笑をした。笑うとひどく醜くなる顔である。

広小路に出た。国旗をぶっちがえにして立てた電車が幾台も来るが、皆満員である。瀬戸が無理に人を押し分けて乗るので、純一も為方なしに附いて乗った。

須田町で乗り換えて、錦町で降りた。横町へ曲って、赤煉瓦の神田区役所の向いの処に来ると、瀬戸が立ち留まった。

この辺には木造のけちな家ばかり並んでいる。その一軒の庇に、好く本屋の店先に立ててあるような、木の枠に紙を張り附けた看板が立て掛けてある。上の方へ横に羅馬字で DIDASKALIA と書いて、下には豎に十一月例会と書いてある。

「ここだよ。二階へ上がるのだ」

瀬戸は下駄や半靴の乱雑に脱ぎ散らしてある中へ、薩摩下駄を跳ね飛ばして、正面の梯子を登って行く。純一は附いて上がりながら、店を横目で見ると、帳場の格子の背後には、二十ばかりの色の蒼い五分刈頭の男がすわっていて、勝手に続いているらしい三尺の口に立っている赧顔の大女と話をしている。女は禪がけて、裾をまくって、膝の少し下まである、鼠色になった禪を出している。その女が「いらっしやい」と大声で云って、一寸こつちを見ただけで、嚮虫の鳴くような声で、話をし続けているのである。

二階は広くてきたない。一方の壁の前に、卓と椅子とが置いてあって、卓の上には花瓶に南天が生けてあるが、いつ生けたものか葉がところどころ泣堇の所謂乾反葉になっている。その側に水を入れた瓶とコップとがある。

十四五人ばかりの客が、二つ三つの火鉢を中心にして、よごれた座布団の上にすわっている。間々にばら蒔いてある座布団は跡から来る客を待っているのである。

客は大抵紺飛白の羽織に小倉袴という風で、それに学校の制服を着たのが交っている。中には

大学や高等学校の服もある。

会話は大分盛んである。

丁度純一が上がって来たとき、上り口に近い一群の中で、誰やらが声高こゝろだかにこう云うのが聞えた。

「とにかく、君、ライフとアアトが別々になつてゐる奴は駄目だよ」

純一は知れ切つた事を、仰山おやうざんらしく云つてゐるものだと思ひながら、瀬戸が人にでも引き合せてくれるのかと、少し躊躇ちゅうちよしていたが、瀬戸は誰やら心安い間らしい人を見附けて、座敷のずっと奥の方へずんずん行って、その人と小声で忙まわしそうに話し出したので、純一は上り口に近い群の片端に、座布団を引き寄せて寂しく据わつた。

この群では、識しらない純一の来たのを、氣にもしない様子で、会話を続けている。

話題に上つてゐるのは、今夜演説に来る拊石である。老成らしい一人が云う。あれはとにかく芸術家として成功してゐる。成功といつても一時世間を動かしたという側では無い。文芸史上の意義でいうのである。それに学殖がある。短篇集なんぞの中には、西洋の事を書いて、西洋人が書いたときや思われなようなものがあると云う。そうすると、さつき声高に話していた男が、こう云う。学問や特別知識は何の価値もない。芸術家として成功してゐるとは、旨く人形を列べて、踊らせてゐるようなところを言うのではあるまいか。その成功が嫌だ。纏まとまつてゐるのが嫌だ。人形を勝手に踊らせていて、エゴイストらしい自己が物蔭に隠れて、見物の面白がるのを冷笑してゐるように思われる。それをライフとアアトが別々になつてゐるといふのだと云

う。こう云っている男は近眼目がねを掛けた瘦男で、柄にない大きな声を出すのである。傍から遠慮げに喙を容れた男がある。

「それでも教員を罷めたのなんぞは、生活を芸術に一致させようとしたのではなかるうか」

「分かるもんか」

目金の男は一言で排斥した。

今まで黙っている一人の伶俐らしい男が、遠慮げな男を顧みて、こう云った。

「しかし教員を罷めただけでも、鷗村なんぞのように、役人をしているのに比べて見ると、余程芸術家らしいかも知れないね」

話題は拊石から鷗村に移った。

純一は拊石の物などは、多少興味を持って読んだことがあるが、鷗村の物では、アンデルセンの翻譯だけを見て、こんなつまらない作を、よくも暇潰しに訳したものだと思っただけ、この人に対して何の興味をも持っていないから、会話に耳を傾けないで、独りで勝手な事を思っていた。会話はいよいよ榮えて、笑声が雑って来る。

「厭味だと云われるのが気になると見えて、自分で厭味だと書いて、その書いたのを厭味だと云われているなんぞは、随分みじめだね」と、伶俐らしい男が云って、外の人と一しよになつて笑ったのだけが、偶然純一の耳に止まった。

純一はそれが耳に止まったので、それまで独で思っていた事の端緒を失って、ふいところ思った。自分の世間から受けた評に就いてかれこれ云えば、馬鹿にせられるか、厭味と思われるかに

極まっている。そんな事を敢てする人はおめでたいかも知れない。厭味なのかも知れない。それとも実際無頓着に自己を客観しているのかも知れない。それを心理的に判断することは、性格を知らないでは出来ない筈だと思つた。

瀬戸が座敷の奥の方から、「小泉君」と呼んだ。純一がその方を見ると、瀬戸はもう初めの所にはいない。隅の方に、子供の手習机を据えて、その上に書類を散らかしている男と、火鉢を隔てて、向き合っているのである。

席を起つてそこへ行つて見れば、机の上には一円札やら小さい銀貨やらが、書類の側に置いてある。純一はそこで七十銭の会費を払つた。

「席料と弁当代だよ」瀬戸は純一にこう云つて聞せながら、机を構えている男に、「今日は菓子を出ないのかい」と云つた。

まだ返辞をしないうちに、例の赭顔の女中が大きい盆に一人前ずつに包んだ餅菓子を山盛にして持つて来て銘々に配り始めた。

配つてしまうと、大きい土瓶に番茶を入れたのを、所々に置いて行く。

純一が受け取つた菓子を手持つたまま、会計をしている人の机の傍にいと、「おい、瀬戸」と呼び掛けられて、瀬戸は忙がしそうに立つて行つた。呼んだのは、初め這入ったとき瀬戸が話をしてきた男である。髪を長く伸ばした、色の蒼い男である。又何か小声で熱心に話し出した。

人が次第に殖えて来て、それが必ずこの机の傍に来るので、純一は元の席に帰つた。余り上り口に近いので、自分の敷いていた座布団だけはまだ人に占領せられずにあつたのである。そこで

据わろうと思うと半分ばかり飲みさしてあった茶碗をひっくり返した。純一は少し慌てて、「これは失敬しました」と云って袂からハンカチーフを出して拭いた。

「畳が驚くでしょう」

こう云って茶碗の主は、純一が銀座のどこやらの店で、ふいと一番善いのをと云って買った、フランドルのバチストで拵えたハンカチーフに目を注いでいる。この男は最初から柱に倚り掛かって、黙って人の話を聞きながら、折々純一の顔を見ていたのである。大学の制服の、襟にMの字の附いたのを着た、体格の立派な男である。

一寸調子の変った返事なので、畳よりは純一の方が驚いて顔を見てみると、「君も画家ですか」と云った。「いえ。そうではありません。まだ田舎から出たばかりで、なんにも遣っていないのです」

純一はこう云って、名刺を学生にわたした。学生は、「名刺があったか知らん」とつぶやきながら隠しを探って、小さい名刺を出して純一にくれた。大村莊之助としてある。大村はこう云った。

「僕は医者になるのだが、文学好だもんだから、折々出掛けて来ますよ。君は外国語は何を遣っています」

「フランスを少しばかり習いました」

「何を読んでいます」

「フロオベル、モオパッサン、それから、ブウルジェエ、ベルジックのマアテルリンクなんぞを

些ばかり読みました」

「らくに読めますか」

「ええ。マアテルリンクなんぞは、脚本は分りますが、論文はむつかしくて困ります」

「どうむつかしいのです」

「なんだか要点が掴まえにくいようで」

「そうでしょう」

大村の顔を、微かな微笑が掠めて過ぎた。嘲の分子なんぞは少しも含まない、温い微笑である。感激し易い青年の心は、何故ともなくこの人を頼もしく思った。作品を読んで慕って来た大石に逢ったときは、その人が自分の想像に画いていた人と違ってはいないのに、どうも険しい巖の前に立ったような心持がしてならなかった。大村という人は何をしている人だか知らない。医科の学生なら、独逸は出来るだろう。それにフランスも出来るらしい。只これだけの推察が、咄嗟の間に出来たばかりであるのに、なんだか力になって貰われそうな気がする。ニイチェという人は、「己は流の岸の欄干だ」と云ったそうだが、どうもこの大村が自分の手で掴えることの出来る欄干ではあるまいかと思われてならない。そして純一のこう思う心はその大きい瞳を透して大村の心にも通じた。

この時梯子の下で、「諸君、平田先生が見えました」と呼ぶ声があった。平田というのは拈石の氏なのである。

幹事らしい男に案内せられて、梯子を登って来る、拈石という人を、どんな人かと思つて、純一は見ていた。

少し古びた黒の羅紗服らしやを着ている。背丈は中位ちゆうぐわいである。顔の色は蒼いが、アイロニー(二二)を帯びた快活な表情である。世間では鷗村と同じように、継子根性ままごこんじやうのねじくれた人物だと云っているが、どうもそうは見えない。少し赤み掛かった、たっぷりある八字髭はちじひげが、油気なしに上向に振じ上げである。純一は、髭というものは白くなる前に、四十代で赤み掛かつて来る、その頃でなくては、日本人では立派にはならないものだと思つた。

拈石は上り口で大村を見て、「何か書けますか」と声を掛けた。

「どうも持つて行つて見て戴くようなものは出来ません」

「ちつと無遠慮に世間へ出して見給え。活字は自由になる世の中だ」

「余り自由になり過ぎて困ります」

「活字は自由でも、思想は自由でないからね」

緩かな調子で、人に強い印象を与える詞附ことばづまである。強い印象を与えるのは、常に思想が靈活に動いていて、それをびつたり適応した言語で表現するからであるらしい。

拈石は会計掛の机の側へ案内せられて、座布団の上へ胡坐あぐらをかいて、小さい紙巻の煙草たばこを出し

て呑んでいると、幹事が卓の向うへ行つて、紹介の挨拶をした。

拊石は不精らしく体を卓の向うへ運んだ。方々の話声の鎮まるのを、暫く待っていて、ゆっくり口を開く。不断の会話のような調子である。

「諸君からイブセンの話をして貰いたいという事でありました。わたくしもイブセンに就いて、別に深く考えたことはない。イブセンに就いてのわたくしの智識は、諸君の既に有しておられる智識以上に何物もあるまいと思う。しかし知らない事を聞くのは骨が折れる。知っていることを聞くの気楽なるに如かずである。お菓子が出ているようだから、どうぞお菓子を食べながら気楽に聞いて下さい」

こんな調子である。声色を励ますというようなところは少しもない。それかと云つて、評判に聞いている雪嶺の演説のように訥弁の能弁だというでもない。平板極まる中にどうかすると非常に奇警な詞が、不用意にして出て来るだけは、雪嶺の演説を速記で読んだときと同じようである。

大分話が進んで来てから、こんな事を言った。「イブセンは初め諾威の小さいイブセンであつて、それが社会劇に手を着けてから、大きな欧羅巴のイブセンになったというが、それが日本に伝わつて来て、又ずっと小さいイブセンになりました。なんでも日本へ持つて来ると小さくなる。ニイチエも小さくなる。トルストイも小さくなる。ニイチエの詞を思い出す。地球はその時小さくなった。そしてその上に何物をも小さくする、最後の人類がひよこひよこ跳つているのである。我等は幸福を発見したと、最後の人類は云つて、目をしばだたくのである。日本人は色々

な主義、色々なイスムを輸入して来て、それを弄もてあそんで目をしばだたいしている。何もかも日本人の手に入っては小さいおもちゃになるのであるから、元が恐ろしい物であったからと云って、剛こわがるには当たらない。何も山鹿素行やまかそこうや四十七士や、水戸浪士を地下に起して、その小さくなったイブセンやトルストイに対抗させるには及ばないのです」まあ、こんな調子である。

それから新しい事でもなんでもないが、純一がこれまで蓄えて持っている思想の中心を動かされたのは拊石ふしが諷刺的な語調から、忽然いつぜん真面目まじめになって、イブセンの個人主義に両面があるということを語り出したところであった。拊石は先ず、次第にあらゆる習慣の縛とめを脱して、個人を個人として生活させようとする思想が、イブセンの生涯の作の上に、所謂赤い糸いわねになって一貫していることを言った。「種々の別離を己おれは閲くした」という様な心持である。これを聞いている間は、純一もこれまで自分が舟に棹さかさして下って行く順流を、演説者も同舟の人になって下って行くように感じていた。ところが、拊石は話頭を一転して、「これがイブセンの自己の一面です、Peer Gynt に詩人的に發揮している自己の一面です、世間的自己です」と結んで置いて、別にイブセンには最初から他の一面の自己があるということを言った。「若しこの一面がなかったら、イブセンは放縦を説くに過ぎない。イブセンはそんな人物ではない。イブセンには別に出世間的自己があつて、始終向上して行こうとする。それが Brand に於いて發揮せられている。イブセンは何の爲めに習慣の朽ちたる索つなを引きちぎって棄てるか。ここに自由を得て、身を泥土に委ゆたねようとするのではない。強い翼に風を切つて、高く遠く飛ぼうとするのである」純一はこれを聞いていて、その語気が少しも莊重に聞かせようとしない様子でなく、依然として平坦な会話の調子を

維持しているにも拘らず、無理に自分の乗っている船の舳先を旋らして逆に急流を溯らせられるような感じがして、それから暫くの間は、独りで深い思量に耽った。

譬えば長い間集めた物を、一々心覚えをして箱に入れて置いていたのを、人に上を下へと掻き交ぜられたような物である。それを元の通りにするのはむずかしい。いや、元の通りにしようなんぞとは思わない。元の通りでなく、どうにか整頓しようと思う。そしてそれが出来ないのである。出来ないのは無理もない。そんな整頓は固より一朝一夕に出来る筈の整頓ではないのである。純一の耳には拊石の詞が遠い遠い物音のように、意味のない雑音になって聞えている。

純一はこの雑音を聞いているうちに、ふと聴衆の動揺を感じて、殆ど無意識に耳を敬てると、丁度拊石がこう云っていた。

「ゾラの Claude は芸術を求める。イブセンのブランドは理想を求める。その求めるもののために、妻をも子をも犠牲にして顧みない。そして自分も滅びる。そこを藪腕に睨んで、ブランドを諷刺だとさえ云ったものがある。実はイブセンは大真面目である。大真面目で向上の一路を示している。悉皆か絶無か。この理想はブランドという主人公の理想であるが、それが自己より出でたるもの、自己の意志より出でたるものだといいるところに、イブセンの求めるものの内容が限られていて、とにかく道は自己の行くために、自己の開く道である。倫理は自己の遵奉するのために、自己の構成する倫理である。宗教は自己の信仰するのために、自己の建立する宗教である。一言で云えば、Autonomie である。それを公式に見せることは、イブセンにも出来なただである。とにかくイブセンは求める人であり、現代人であり、新しい人であり、新しき人である。」

拊石はこう云ってしまつて、聴衆が結論だかなんだか分らずにいるうちに、ぶらりとテーブルを離れて前に据わつていた座布団の上に戻つた。

あちこちに拍手するものがあつたが、はたが応ぜないので、すぐに止んでしまつた。多数は演説が止んでもじつと考へている。一座は非常に静かである。

幹事が閉会を告げた。

下女が鰻飯うなぎいしの井いどんぢを運び出す。方々で話声はちらほら聞えて来るが、その話もしめやかである。自分自分で考へることを考へているらしい。縛しばがまだ解けないのである。

幹事が拊石を送り出すを相図に、会員はそろそろ帰り始めた。

八

純一が梯子段の処に立っていると、瀬戸が忙しそうに傍そばへ来て問うのである。

「君、もうすぐに帰るか」

「帰る」

「それじゃあ、僕は寄つて行く処があるから、失敬するよ」

門口で別れて、瀬戸は神田の方へ行く。倶楽部クラブへ来たときから、一しよに話していた男が、跡から足を早めて追っ駆けて行った。

純一が小川町の方へ一人で歩き出すと、背後うしろを大股おおもたに靴くつで歩いて来る人のあるのに気が附い

た。振り返って見れば、さっき大村という名刺をくれた医科の学生であった。並ぶともなしに、純一の右側を歩きながら、こう云った。

「君はどっちへ帰るのです」

「谷中にいます」

「瀬戸は君の親友ですか」

「いいえ。親友というわけではないのですが、国で中学を一しょに遣ったものですから」

なんだか言いわけらしい返事である。血色の好い、巖乗な大村は、純一と歩度を合せる為めに、余程加減をして歩くらしいのである。小川町の通を須田町の方へ、二人は暫く無言で歩いている。

両側の店にはもう明りが附いている。少し風が出て、土埃を捲き上げる。看板ががたがた鳴る。天下堂の前の人道を歩きながら、大村が「電車ですか」と問うた。

「僕は少し歩こうと思ひます」

「元氣だねえ。それじゃあ、僕も不精をしないで歩くとしようか。しかし君は本郷へ廻っては損でしょう」

「いいえ。大した違いはありません」

又暫く詞が絶えた。大村が歩度を加減しているらしいので、純一はなるたけ大股に歩こうとしている。しかし純一は、大村が無理をして縮める歩度は整っているのに、自分の強いて伸べようとする歩度は乱れ勝になるように感ずるのである。そしてそれが歩度ばかりではない。只なんと

なく大村という男の全体は平衡を保っているのに、自分は動揺しているように感ずるのである。この動揺の性質を純一は分析して見ようとしている。ところが、それがひどくむずかしい。先頃大石に逢った時を顧みれば、彼を大きく思つて、自分を小さく思つたに違いない。しかし彼が何物をか有しているとは思わない。自分も相応に因襲や前極めを破壊している積りでいたのに、大石に逢つて見れば、彼の破壊は自分なんぞより周到であるらしい。自分も今一洗濯したら、あんな態度になられるだろうと思つた。然るに今日拊石の演説を聞いているうちに、彼が何物をか有しているのが、髻鬚として認められた様である。その何物かが氣になる。自分の動揺は、その何物かに与えられた波動である。純一は突然こう云つた。

「一体新人というのは、どんな人を指して言うのでしょうか」

大村は純一の顔をちよいと見た。そして目と口との周囲に微笑の影が閃いた。

「さつき拊石さんがイブセンを新しい人だと云つたから、そう云うのですね。拊石さんは妙な人ですよ。新人というのが嫌いで、わざわざ新しい人と云つて居るのです。僕がいつか新人と云うと、新人とは漢語で花姫の事だと云つて、僕を冷かしたのです」

話が横道へ逸れるのを、純一はじれつたく思つて、又出直して見た。

「なる程旧人と新人ということは、女の事にばかり云つてあるようですね。そんなら僕も新しい人と云いましょう。新しい人はつまり道徳や宗教の理想なんぞに捕われていない人なんのでしょうか。それとも何か別の物を有している人なんでしょうか」

微笑が又閃く。

「消極的新人と積極的新人と、どっちが本当の新人かと云うことになりますね」

「ええ。まあ、そうですね。その積極的新人というものがあるでしょうか」

微笑が又閃く。

「そうですね。有るか無いか知らないが、有る筈には相違ないでしょう。破壊してしまえば、又建設する。石を崩しては、又積むのでしようよ。君は哲学を読みましたか」

「哲学に就いては、少し読んで見ました。哲学その物はなんにも読みません」正直に、躊躇せず
に答えたのである。

「そうですね」

夕の昌平橋は雑沓する。内神田の咽喉を扼している、この狭隘に、おりおり捲き起される冷たい埃を浴びて、影のような群集が忙しげに摩れ違っている。暫くは話も出来ないもので、影と一しよに急ぎながら空を見れば、仁丹の広告燈が青くなったり、赤くなったりしている。純一は暫く考えて見て云った。

「哲学が幾度建設せられても、その度毎に破壊せられるように、新人も積極的になって、何物かを建設したら、又その何物かに捕われるのではないでしょうか」

「捕われるのですとも。繩が新しくなると、当分当りどころが違うから、縛を感じないのだからと、僕は思っているのです」

「そんなら寧ろ消極のまままで、懷疑に安住していたらどうでしょう」

「懷疑が安住でしょうか」

純一は一寸窮ちよつとした。「安住と云ったのは、矛盾でした。つまり永遠の懷疑です」

「なんだか詛のろわれたものでも云いそうだね」

「いいえ。懷疑と云ったのも当っていません。永遠に求めるのです。永遠の希求です」

「まあ、そんなものでしょう」

大村の詞はひどく冷澹れいたんなようである。しかしその音調や表情に温みが籠こもっているので、純一は不快を感じない。聖堂の裏の塀へいのあたりを歩きながら、純一は考え考えこんな話を話し出した。

「さっき倶楽部でもお話をしたようですが、僕はマアテルリンクを大抵読んで見ました。それから同じ学校にいた友達だというので、Verhaegen を読み始めたのです。この間 La Multiple Splendeur が来たもんですから、それを国から出て来るとき、汽車で読みました。あれには大分纏まとまった人生観のようなものがあるのですね。妙にこう敬虔けいけんなような態度を取っているのですね。まるで日本なんぞで新人だと云っている人達とは違っているもんですから、へんな心持がしました。あなたの云う積極的の新人なのでしょう。日本で消極的な事ばかり書いている新人の作を見ますと、縛られた繩を解いて行くところに、なる程と思うところがありますが、別に深く引き附けられるような感じはありません。あのフェルヘアレンの詩なんぞを見ますと、妙な人生観があるので、それが直ぐにこっちの人生観にはならないのですが、その癖あの敬虔なような調子に引き寄せられてしまうのです。ロダンは友達だそうですが、丁度ロダンの彫刻なんぞも、同じ事だろうと思うのです。そうして見ると、西洋で新人と云われている連中は、皆氣息の通っているところがあつて、それが日本の新人とは大分違っているように思うのです。拈石さんのイブセンの話も同じ事

です。どうも日本の新人という人達は、拊石の云ったように、小さいのではありますまいか」
 「小さいのですとも。あれは *Chloe* の名なのです」大村は恬然としてこう云った。
 銘々勝手な事を考えて、二人は本郷の通を歩いた。大村の方では田舎もなかなか馬鹿にはならない、自分の知っている文科の学生の或るものよりは、この独学の青年の方が、眼識も能力も優れていると思うのである。

大学前から、道幅のまだ広げられない森川町に掛かるとき、大村が突然こう云った。

「君、瀬戸には気を着けて交際し給えよ」

「ええ。分かっています。Bohème ですから」

「うん。それが分かっていたら好いのです」

近いうちに大村の西片町の下宿を尋ねる約束をして、純一は高等学校の角を曲った。

九

十一月二十七日に有楽座でイブセンの John Gabriel Bokmann が興行せられた。

これは時代思潮の上から観れば、重大なる出来事であると、純一は信じているので、自由劇場の発表があるのを待ち兼ねていたように、早速会員になって置いた。これより前に、まだ純一が国にいた頃、シェクスピア興行があったこともある。しかしシェクスピアやギョオテは、縦いどんなに旨く演ぜられたところで、結構には相違ないが、今の青年に痛切な感じを与え

ることはむずかしかろう。痛切でないばかりではない。事に依ると、あんなクラシックな、俳諧の用語で言えば、一時流行でなくて千古不易の方に属する作を味う余裕は、青年の多数には無いと云っても好かるう。極端に言えば、若しシェクスピアのような作が新しく出たら、これはドラマではない、テアトルだなんぞと云うかも知れない。その韻文をも冗漫だと云うかも知れない。ギョオテもそうである。ファウストが新作として出たら、青年は何と云うだろうか。第二部は勿論であるが、第一部でも、これは象徴ではない、アレゴリーだとも云い兼ねまい。なぜと云うに、近世の写実の強い刺戟に慣れた舌には、百年前の落ち着いた深い趣味は味にくいからである。そこでその古典的なシェクスピアがどう演ぜられたか。当時の新聞雑誌で見れば、ヴェネチアの街が駿河台の屋鋪町で、オセロは日清戦争時代の将官の肋骨服に、三等勲章を佩びて登場したということである。その舞台や衣裳を想像して見たばかりで、今の青年は侮辱せられるような感じをせずにはいられないのである。

二十七日の晩に、電車で数寄屋橋まで行って、有楽座へ這入ると、バルケットの四列目あたり案内せられた。見物はもうみんな揃って、興行主の演説があった跡で、丁度これから第一幕が始まるという時であった。

東京に始めて出来て、珍らしいものに言い難されている、この西洋風の夜の劇場に這入って見ても、種々の本や画で、劇場の事を見ている純一が為めには、別に目を駭かすこともない。

純一の席の近処は、女客ばかりであった。左に二人並んでいるのは、まだどこかの学校にでも通っていいような廂髪ひきかみの令嬢で、一人は縹色の袴はかま、一人は菫色の袴はかまを穿はいている。右の方にはコオ

トを着たままで、その上に毛の厚い skunks の襟巻をした奥さんがいる。この奥さんの左の椅子が明いていたのである。

純一が座に着くと、何やら首を聚めて話していた令嬢も、右手の奥さんも、一時に顔を振り向けて、純一の方を向いた。縹色のお嬢さんは赤い円顔で、堇色のは白い角張った顔である。その角張った顔が何やらに似ている。西洋人が胡桃を噛み割らせる恐ろしい口をした人形がある。あれを優しく女らしくしたようである。国へ演説に来たとき、一度見た事のある島田三郎という人に、どこやら似ている。どちらも美しくはない。それと違って、スカンクスの奥さんは凄くよい美人で、鼻は高過ぎる程高く、切目の長い黒目勝の目に、有り余る媚がある。誰やらの奥さんに、友達を引き合せた跡で、「君、今の目附は誰にでもするのだから、心配し給うな」と云ったという話があるが、まあ、そんな風な目である。真黒い髪が多過ぎ長過ぎるのを、持て余しているというように見える。お嬢さん達はすぐに東西の棧敷を折々きよろきよろ見廻して、前より少し声を低めたばかり、大そうな用事でもあるらしく話し続けている。奥さんは良や久しい間、純一の顔を無遠慮に見ていたのである。

「そら、幕が開いてよ」と縹のお嬢さんが堇のお嬢さんをつついた。「いやあね。あんまりおしやべりに実が入って知らないでいたわ」

棧敷が闇くなる。さすが会員組織で客を集めただけあって、所々の話声がぼったり止む。舞台では、これまでの日本の芝居で見物の同情を惹きそうな理窟を言う、エゴイスタックなボルクマシ夫人が、俵の来るのを待っているとところへ、俵ではなくて、若かった昔の恋の競争者で、情に

脆い、じたらくなような事を云う、フルトリュスチツルクな妹エルラが来て、長い長い対話が始まる。それを聞いているうちに、筋の立った理窟を言う夫人の、強そうで弱みのあるのが、次第に同情を失って、いくじのなさそうな事を言う妹の、弱そうで底力のあるのに、自然と同情が集まって来る。見物は少し勝手が違うのに気が附く。対話には退屈しながら、期待の情に制せられて、息を屏めて聞いているのである。ちと大き過ぎた二階の足音が、破産した銀行頭取だと分かるところで、こんな影を画くような手段に馴れない見物が、始めて新しい刺戟しげきを受ける。息子の情婦のウィルトン夫人が出る。息子が出る。感情が次第に激して来る。皆引つ込んだ跡に、ボルクマン夫人が残って、床の上に身を転がして煩悶はんもんするところで幕になった。

見物の席がぱっと明るくなった。

「ボルクマン夫人の転がるのが、さぞ可笑しかろうと思ったが、存外可笑しいことね」と董色が云った。

「ええ。可笑しくななくてよ。とにかく、変っていて面白いわね」と縹色が答えた。

右の奥さんは、幕になるとすぐ立ったが、間もなく襟巻とコオトなしになって戻って来た。空気が暖あたたかになって来たからであろう。鶉縮緬うずくもめんの上着に羽織、金春こんばる式唐織しやうしの丸帯であるが、純一は只黒ずんだ、立派な羽織を着ていると思つて見たのである。それから膝ひざの上に組み合せている指に、殆ど一本一本指環が光っているのに気が着いた。

奥さんの目は又純一の顔に注がれた。

「あなたは脚本を読んでいらっしやるのでしょう。次の幕はどんな処でございますの」

落ち着いた、はっきりした声である。そしてなんとなく金石の響を帯びているように感ぜられる。しかし純一には、声よりは目の閃きが強い印象を与えた。横着らしい笑が目の底に潜んで、口で言っている詞とは、まるで別な表情をしているようである。そう思うと同時に、左の令嬢二人が一斉に自分の方を見たのが分かった。

「こん度の脚本は読みませんが、フランス訳で読んだことがあります。次の幕はあの足音のした二階を見せることになっています」

「おや、あなたフランス学者」奥さんはこう云って、何か思うことあるらしく、にっこり笑った。

丁度この時幕が開いたので、答うることを須い問のような、奥さんの詞は、どうい感情に根ざして発したものが、純一には分からずにしまった。

舞台では檻の狼のポルクマンが、自分にピアノを弾いて聞せてくれる小娘の、小さい心の臓をそっと開けて見て、ここにも早く失意の人の、苦痛の萌芽が籠もっているのを見て、強いて自分の抑鬱不平の心を慰めようとしている。見物は只娘フリーダの、小鳥の囀るような、可哀らしい声を聞いて、浅草公園の菊細工のある処に這入って、紅雀の籠の前に足を留めた時のような心持になっている。

「まあ、可哀いことね」と縹色のお嬢さんの囁くのが聞えた。

小鳥のようなフリーダが帰って、親鳥の失敗詩人が来る。それも帰る。そこへ昔命に懸けて愛した男を、冷酷なきょうだいに夫にせられて、不治の病に体のしんに食い込まれているエルラ

が、燭しよくを秉とつて老いたる恋人の檻かぎに這入はつて来る。妻になつたという優勝の地位の象徴でもあ
るように、大きい巾まげを頭に巻き附けた夫人グンヒルドが、扉の外で立聞たてきこをして、恐ろしい幻の
ように、現れて又消える。爪牙そがの鈍った狼のたゆたうのを、大きい愛の力で励まして、エルラは
その幻の洞窟どうくつたる階下の室に連れて行こうとすると、幕が下りる。

又見物の席が明るくなる。ざわざわと、風が林をゆするように、人の話声が聞えて来る。純一
は又奥さんの目が自分の方に向いたのを知覚した。

「これからどうなりますの」

「こん度は又二階の下です。もうこん度で、あらかた解決が附いてしまします」

奥さんに詞を掛けられてからは、純一は左手の令嬢一人に、鋭い觀察の対象にせられたように
感ずる。令嬢が自分の視野に映じている間は、その令嬢は余所あまところを見ているが、正面を向くか、又
は少しでも右の方へ向くと、令嬢の視線が矢のように飛んで来て、自分の項うなじに中あたるのを感じる。
見えない所の見える、不愉快な感じである。Y県にいた時の、中学の理り学がくの教師に、山村とい
うお爺おじいさんがいて、それが Spiritismスピリツィスム (M.O.)(M.O.) に関する、妙な迷信を持っていた。その教師が云うに
は、人は誰でも体の周囲に特殊な雰囲気まわりのきを有している。それを五官を以てせずして感ずるので、
道を背後うしろから歩いて来る友達が誰だということは、見返らないでも分かるわると云った。純一は五官
を以てせずして、背後に受ける視線しせんを感ずるのが、不愉快でならなかつた。

幕が開いた。觀面くわんめんに死と相見あひまているものは、姑息こきに安んずることを好まない。老いたる処女エ
ルラは、老いたる夫人の階下の部屋へ、檻かぎの獸けつを連れて来る。鵝蚌いっぽうならぬ三人に争まわまれる、獲とも

の青年エルハルトは、夫人に呼び戻されて、この場へ帰る。母にも従わない。父にも従わない。情誼の繩で縛ろうとするおばにも従わない。「わたくしは生きようと思ひます」と云う、猛烈な叫声を、今日の大向うを占めている、数多の学生連に喝采せられながら、萎れる前に、吸い取られる限の日光を吸い取ろうとしている花のようなヴィルトン夫人に連れられて、南国をさして雪中を立とうとする、銀の鈴の附いた橋に乗りに行く。

この次の幕間であった。少し休憩の時間が長いということが、番附にことわつてあつたので、見物が大抵一旦席を立つた。純一は丁度自分が立とうとすると、それより心持早く右手の奥さんが立つたので、前後から人に押されて、奥さんの体に触れては離れ、離れては触れながら、外の廊下の方へ歩いて行く。微な *parfum* の匂がおりおり純一の鼻を襲うのである。

奥さんは振り向いて、目で笑つた。純一は何を笑つたとも解せぬながら、行儀好く笑い交した。そして人に押されるのが可笑しいのだろうと、跡から解釈した。

廊下に出た。純一は人が疎になつたので、遠慮して奥さんの傍を離れようと思つて、わざと歩度を緩め掛けた。しかしまだ二人の間に幾何の距離も出来ないうちに、奥さんが振り返つてこう云つた。

「あなたフランス語をなさるのなら、宅に書物が沢山ございますから、見にいらっしゃいませ。新しい物ばかり御覧になるのかも知れませんが、古い本にだつて、宜しいものはございますですよ。御遠慮はない内なのでございますの」

前から識り合つている人のように、少しの窘迫の態度もなく、歩きながら云われたのである。

純一は名刺を出して、奥さんに渡しながら、素直にこう云った。

「わたくしは国から出て参ったばかりで、谷中に家を借りておりますが、本は殆どなんにも持っていないと云っても宜しい位です。若し文学の本がございましたと、少し古い本で見たいものが沢山ございます」

「そうですか。文学の本がございましたの。全集というような物が揃えてございますの。その外は歴史のような物が多いのでしよう。亡くなった主人は法律学者でしたが、その方の本は大学の図書館に納めてしまいましたの」

奥さんが未亡人だということを、この時純一は知った。そして初めて逢った自分に、宅へ本を見に来いなんぞと云われるのは、一家の主権者になっていられるからだなと思った。奥さんは姓名だけの小さく書いてある純一の名刺を一寸読んで見て、帯の間から縹紙の紙入を出して、それへしまつて、自分の名刺を代りにくれながら、「あなた、お国は」と云った。

「Y県です」

「おや、それでは亡くなった主人と御同国でございますのね。東京へお出になつたばかりだというのに、ちつともお国詞が出来ませんじゃございませんか」

「いいえ。折々出ます」

奥さんの名刺には坂井れい子と書いてあった。純一はそれを見ると、すぐ「坂井恆先生の奥さんでいらつしやつたのですね」と云つて、丁寧に辞儀をした。

「宅を御存じでございましたの」

「いいえ。お名前だけ承知してましたのです」

坂井先生はY県出身の学者として名高い人であった。Montesquieu の *Esprit des lois* を漢文で訳したのなんぞは、評判が高いばかりで、広く世間には行われなかったが、Code Napoléon の典型的な翻譯は、先生が亡くなられても、価値を減ぜずにおいて、今も坂井家では、これによって少からぬ収入を得ているのである。純一も先生が四十を越すまで独身でいて、どうしたわけか、娘にしても好いような、美しい細君を迎えてまだ一年と立たないうちに、脊髄病で亡くなられたということは、中学にいた時、噂に聞いていたのである。

噂はそれのみではない。先生は本職の法科大学教授としてよりは、代々の当路者から種々な用事を言い附けられて、随分多方面に働いておられたので、亡くなられた跡には一廉の遺産があつた。それを未亡人が一人で管理していて、旧藩主を始め、同県の人と全く交際を絶つて、何を当てにしているとも分からない生活をしていられる。子がないのに、養子をせられるでもない。誰も夫人と親密な人というもののあることを聞かない。先生の亡くなる僅か前に落成した、根岸の *Villa La Roche* の西洋造に住まっておられるが、静かに夫の跡を弔っていられるらしくはない。先生の存生の時よりも派手な暮らしをしておられる。その生活は一の秘密だということであった。

純一が青年の空想は、国でこの噂話を聞いた時、種々な幻像を描き出していたので、坂井夫人という女は、面白い小説の女主人公のように、純一の記憶に刻み附けられていたのである。

純一は坂井先生の名を聞いていたという返事をして、奥さんの顔を見ると、その顔には又さっきの無意味な、若くは意味の掩われている微笑が浮んでいる。丁度二人は西の階段の下に佇んで

いたのである。

「上へ上がって見ましょるか」と奥さんが云った。

「ええ」

二人は階段を登った。

その時上の廊下から、「小泉君じゃあないか」と声を掛けるものがある。上から四五段目の処まで登っていた純一が、仰向いて見ると、声の主は大村であった。

「大村君ですか」

この返事をする、奥さんは顔で知れない程の会釈をして、足を早めて階段を登ってしまつて、一人で左へ行った。

純一は大村と階段の上り口に立っている。丁度 *by the way* と書いて、その下に登って左を指した矢の、書き添えてある札を打ち附けた柱の処である。純一は懐かしげに大村を見て云った。

「好く丁度一しょになったものですね。不思議なようです」

「なに、不思議なものかね。興行は二日しかない。我々は是非とも来る。そうして見ると、二分の *probabilities* で出合うわけでしょう。ところが、ジダスカリアの連中なんぞは、皆大抵続けて来るから、それが殆ど一分の一になる」

「瀬戸も来ていますか知らん」

「いたようでしたよ」

「これ程立派な劇場ですから、*foyer* とも云ったような散歩場も出来ているでしょうね」

「出来ていないのですよ。先ずこの廊下あたりがフォアイエエになっている。広い場所があつちにあるが、食堂になつていゝのです。日本人は歩いたり話したりするよりは、飲食をする方を好くから、食堂を広く取るようになるのでしよう」

純一の左の方にいた令嬢二人が、手を繋ぎ合つて、頻りに話しながら通つて行つた。その外種々な人の通る中で、大村がおりおりあれは誰だと教えてくれるのである。

それから純一は、大村と話しながら、食堂の入口まで歩いて行つて、おもちゃ店のあるあたりに暫く立ち留まつて、食堂に出入する人を眺めてみると、ベルが鳴つた。

純一が大村に別れて、階段を降りて、自分の席へ行くとき、腰掛の列の狭い道で人に押されていゝと、又 *Parfain* の香がする。振り返つて見て、坂井の奥さんの謎の目に出合つた。

雪の門口の幕が開く。ウィルトン夫人に娘を連れて行かれた、不遇の楽天詩人たる書記は、銀の鈴を鳴らして行く櫓に跳飛ばされて、足に怪我をしながらも、尚娘の前途を祝福して、寂しい家の燈の下に泣いてゐる妻を慰めに帰つて行く。道具が變つて、丘陵の上になる。野心ある実業家たる老主人公が、平生心にえがいていた、大工場の幻を見て、雪のベンチの上に瞑目すると、優しい昔の情人と、反目の生活を共にした未亡人とが、屍の上に握手して、幕は降りた。

出口が込み合ふからと思つて、純一は暫く廊下に立ち留まつて、舞台の方を見ていた。舞台では、一旦卸した幕を上げて、俳優が大詰の道具の中で、大詰の姿勢を取つて、写真を写させてゐる。

「左様なら。御本はいつでもお出になれば、御覽にいきます」

純一が見返る暇に、坂井夫人の後姿は、出口の人込みの中にまぎれ入ってしまった。返事も出来なかったのである。純一は跡を見送りながら、ふいと思つた。「どうも己おれは女の人に物を言うのは、窮屈でならないが、なぜあの奥さんと話をするのを、少しも窮屈に感じなかったのだろう。それにあの奥さんは、妙な目の人だ。あの目の奥には何があるか知らん」

帰るときに氣を付けていたが、大村にも瀬戸にも逢わなかった。左隣にいたお嬢さん二人が頻りに車夫の名を呼んでいるのを見た。

十

純一が日記の断片

十一月三十日。晴。毎日几帳面きちようめんに書く日記でもあるように、天氣を書くのも可笑おかししい。どうしても己おれには続いて日記を書くということが出来ない。こないだ大村を尋ねて行った時に、その話をしたら、「人間は種々なものに縛られているから、自分で自分をまで縛らなくても好いじゃないか」と云つた。なる程、人間が生きていたと云つて、何も齷齪あくそくとして日記を付けて置かねばならないと云うものではあるまい。しかし日記に縛られず何をするかが問題である。何の目的の為に自己を解放するかが問題である。

作る。製作する。神が万物を製作したように製作する。これが最初の考えであつた。しかしそれが出来ない。「下宿の二階に転がっていて、何が書けるか」などという批評家の詞ことばを見る度

に、そんなら世界を周遊したら、誰にでもえらい作が出来るかと反問して遣りたいと思う反抗が一面に起ると同時に、己はその下宿屋の二階もまだ知らないと思う怯懦が他の一面に萌す。丁度Tiansan^{チヤンサン}が岩石を砕いて、それを天に擲とうとしているのを、傍に尖った帽子を被った一寸坊が見ていて、顔を蹙めて笑っているようなものである。

そんならどうしたら好いか。

生きる。生活する。

答は簡単である。しかしその内容は簡単どころではない。

一体日本人は生きるということを知っているだろうか。小学校の門を潜ってからというもの、一しよ懸命にこの学校時代を駈け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にあり附くと、その職業を為し遂げてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。

現在は過去と未来との間に劃した一線である。この線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。

そこで己は何をしている。

今日はもう半夜を過ぎている。もう今日ではなくなっている。しかし変に気が澄んでいて、寐ようと思つたつて、寐られそうにはない。

その今日でなくなつた今日には閱歴がある。それが人生の閱歴、生活の閱歴でなくてはならぬ。い筈である。それを書こうと思つて久しく徒に過ぎ去る記念に、空虚な数字のみを留めた日記の、

新しいペエジを開いたのである。

しかし己の書いている事は、何を書いているのだから分からない。実は書くべき事が大きいにある筈で、それが殆ど無いのである。やはり空虚な数字のみにして置いた方が増しかも知れないと思ふ位である。

朝は平凡な朝であった。極まって二三日置きに国から来る、お祖母あ様の手紙が来た。食物に気を附ける、往来で電車や馬車や自動車に障って怪我をするなどというような事が書いてあった。食物や車の外には、危険物のあることを知らないのである。

それから日曜だというので、瀬戸が遣って来た。ひどく知己らしい事を言う。何か己とあの男と秘密を共有して、それを同心戮力して隠蔽している筈だというような態度を取って来る。そして一日の消遣策を二つ三つ立てて己の採択に任せる。その中に例の如く une direction dominante がある。それは磁石の針の如くに、かの共有している筈の秘密を指しているのである。己はいつもなるべくそれと方向を殊にして策を認容するのであるが、こん度はためしにどれをも廃棄して、「きょうは僕は内で本を読むのだ」と云って見た。その結果は己の予期した通りであった。瀬戸は暫くもじもじしていたがとうとう金を貸せと云った。

己にはかれの要求を満足させることは、さほどむずかしくはなかった。しかし己は中学時代に早く得ている経験を繰り返したくなかった。「君こないだのもまだ返さないで、甚だ済まないが」と云うのは尤も無邪気なのである。「長々難有う」と云って一旦出して置いて、改めてプラス幾らかの要求をするというのは古い手である。それから一番振っているのは、「もうこれだけで丁

度になりますからどうぞ」というのであった。端たのないようにする物、纏めて置く物に事を關いて、借金を纏めて置かないでも好きそうなものである。己はそういう経験を繰り返したくなかった。そこで断然初めからことわることにした。然るにそのことわるということの経験は甚だ乏しい。己だって国から送って貰うだけの金を何々に遣うという予算を立てているから、不用な金はない。しかしその予算を狂わせれば、貸されない事はない。かれの要求するだけの金は現に持っているのである。それを無いと云おうか。そんな嘘は衝きたくない。又嘘を衝いたって、それが嘘だということは、先方へはつきり知れている。それは不愉快である。

つい国を立つすぐ前である。やはりこんな風に心中でとつ置いた結果、「君これは返さなくとも好いが、僕はこれ切り出さないよ」と云った事があった。そしてその友達とはそれきり絶交の姿になった。実につまらない潔癖であったのだ。嘘を衝きたくないからと云って、相手の面目を潰すには及ばないのである。それよりはまだ嘘を衝いた方が好いかも知れない。

己は勇気を出して瀬戸にこう云った。「僕はこれまで悪い経験をしている。君と僕との間には金銭上の関係を生ぜさせたくない。どうぞその事だけは已めてくれ給え」と云った。瀬戸は驚いたような目附をして己の顔を見ていたが、外の話を二つ三つして、そこそこに帰ってしまった。あの男は己よりは世慣れている。多分あの事の為めに交際を廃めはすまい。只その態度を変えるだろう。もう「君はえらいよ」は言わなくなつて、却て少しは前より己をえらく思うかも知れない。

しかし己はこんな事を書く積りで、日記を開けたのではなかった。目的の不慥な訪問をする人

は、故らに迂路を取る。己は自分の書こうと思う事が、心にはつきり分かっていないので、強いて余計な事を書いているのではあるまいか。

午後から坂井夫人を訪ねて見た。有楽座で識りあいになってから、今日尋ねて行くまでには、実は多少の思慮を費していた。行こうか行くまいかと、理性に問うて見た。フランスの本が集めてあるというのだから、往つて見たら、利益を得ることもあろうとは思つたが、人の噂に身の上が疑問になっている奥さんの邸に行くのは、好くあるまいかと思つた。ところが、理性の上でプロの側の理由とコントの側の理由とが争つている中へ、意志が容喙した。己は往つて見たかつた。その往つて見たかつたというのは、書物も見たかつたには相違ない。しかし容赦なく自己を解剖して見たら、どうもそればかりであつたとは云われまい。

己はあの奥さんの目の奥の秘密が知りたかつたのだ。

有楽座から帰つてから、己はあの目を折々思出した。どうかすると半ば意識せずに思い出して、それを意識してはつと思つたこともある。言わばあの目が己を追い掛けていた。或はあの目が己を引き寄せようとしていたと云つても好いかも知れない。実は理性の争に、意志が容喙したと云うのは、主客を顛倒した話で、その理性の争というのは、あの目の磁石力に対する、無力なる抗抵に過ぎなかつたかも知れない。

とうとうその抗抵に意志の打ち勝つてしまつたのが今日であつた。己は根岸へ出掛けた。

家は直ぐ知れた。平らに刈り込んだ櫛の木が高く黒板塀の上に聳えているのが、何かの秘密を藏しているかと思われるような、外観の陰気な邸であつた。石の門柱に鉄格子の扉が取り附けて

あつて、それが締めて、脇わきの片扉だけが開いていた。門内の左右を低い籠かご堀ほりで為切しきつて、その奥に西洋風に戸を締めた入口がある。ペルを押すと、美しい十四五の小間使が出て、名刺を受け取つて這入つて、間もなく出て来て「どうぞこちらへ」と案内した。

通されたのは二階の西洋間であつた。一番先に目に附いたのは Watteau ワットオ か何かの画を下画に使つたらしい、美しい Gobelin ゴブラン であつた。園の木立の前で、立っている婦人の手に若い男が接吻せつぶん している図である。草木の緑や、男女の衣服の赤や、紫や、黄のかすんだような色が、丁度窓から差し込む夕日を受けて眩まど ゆくない、心持の好い調子に見えていた。

小間使が茶をもて来て、「奥様が直ぐにいらっしゃいます」と云つて、出て行つた。茶を一口飲んで、書籍の立て並べてある棚の前に行つて見た。

書棚の中にある本は大抵己のあるだろうと予期していた本であつた。Cornelle コルネイユ と Racine ラシヌ と Molière モリエール とは立派に製本した全集が揃そろ えてある。それから Voltaire ヴォルテール の物や Hugo ユグ の物が大分ある。

背せ 革かわの文字をあちこち見ているところへ、奥さんが出て来られた。

己は謎めらしい目を再び見た。己は誰も云いそうな、簡單で平凡な詞ことばと矛盾しているような表情を再びこの女子おんなの目の中に見出した。そしてそれを見ると同時に、己のここへ来たのは、コルネイユやラシヌに引き寄せられたのではなくて、この目に引き寄せられたのだと思つた。

己は奥さんとどんな会話をしたかを記憶しない。この記憶の消え失せたのはインテレクトインテクトの上の余り大きい損耗ではないに違いない。しかし奇妙な事には、己の記憶は決して空虚ではない。

談話を忘れる癖に或る単語を覚えてゐる。今一層適切に言えば、言語を忘れて音響を忘れないでゐる。或る単語が幾つか耳の根に附いてゐるようなのは、音響として附いてゐるのである。

記憶の今一つの内容は奥さんの挙動である。体の運動である。どうして立っておられたか、どうして腰を掛けられたか、又指の尖の余り細り過ぎてゐるような手が、いかに動かさず、殆ど象徴的に膝の上に繋ぎ合わされていたか、その癖その同じ手が、いかに敏捷に、女中の運んで来た紅茶を取り次いで渡したかというような事である。

こういう音響や運動の記憶が、その順序の不確な割に、その一々の部分がはっきりとして残つてゐるのである。

ここに可笑しい事がある。己は奥さんの運動を覚えてゐるが、その静止しておられる状態に対しては記憶が頗る臆気なのである。その美しい顔だけでも表情で覚えてゐるので、形で覚えてゐるのではない。その目だけでもそうである。国にいた時、或る爺いが己に、牛の角と耳とは、どちらが上で、どちらが下に附いておりますかと問うた。それ位の事は己も知っていたから、直ぐに答へたら、爺いが云つた。「且那方でそれが直ぐにお分かりなるお方はめったにござりません」と云つた。形の記憶は誰も乏しいと見える。独り女の顔ばかりではない。

そんなら奥さんの着物に就いて、どれだけの事を覚えてゐるか。これがいよいよ覚束ない。記憶は却て奥さんの詞をたどる。己が見るともなしに、奥さんの羽織の縞を見てゐると、奥さんが云われた。「おかしいでしょう。お婆あさんがこんな派手な物を着て。わたしは昔の余所行を今の不斷着にしますの」と云われた。己はこの詞を聞いて、始てなる程そうかと思つた。華美に過

ぎるといふような感じは己にはなかった。己には只着物の美しい色が、奥さんの容姿には好く調和しているが、どこやら世間並でないところがあるといふように思われたばかりであった。

己の日記の筆はまだ迂路を取っている。己は怯懦である。

久しく棄てて顧みなかったこの日記を開いて、筆を把つてこれに臨んだのは何の爲めであるか。或る閱歴を書こうと思つたからではないか。なぜその閱歴を爲す勇氣があつて、それを書く勇氣がないか。それとも勇氣があつて敢て爲したのではなくて、人に余儀なくせられて漫りに爲したのであるか。漫りに爲して恥じないのであるか。

己は根岸の家の鉄の扉を走つて出たときは血が涌き立っていた。そして何か分からない爽快を感じていた。一種の力の感じを持っていた。あの時の自分は平生の自分とは別であつて、平生の自分はその時の状態に比べると、脈のうちに冷たい魚の血を蓄えていたのではないかとさえ思われるようであつた。

しかしそれは体の感じであつて、思想は混沌としていた。己は最初は大股に歩いた。薩摩下駄が寒い夜の土を踏んで高い音を立てた。そのうちに歩調が段々に緩くなつて、鶯坂の上を西へ曲つて、石燈籠の列をなしている、お霊屋の前を通る頃には、それまで膚を燃やしていた血がどこかへ流れて行つてしまつて、自分の顔の蒼くなつて、膚に粟を生ずるのを感じた。それと同時に思想が段々秩序を恢復して来た。澄んだ喜びが涌いて来た。譬えば paroxysme をなして発作する病を持っているものが、その発作の経過し去つた後に、安堵の思をするような場合であつた。己は手に一巻のラシイヌを持つていた。そしてそれを返しに行かなくてはいならないという義務

が、格別愉快な義務でもないように思われた。もうあの目が魔力を逞うして、自分を引き寄せることが出来なくなったのではあるまいかと思われた。

突然妙な事が己の記憶から浮き上がった。それは奥さんの或る姿勢である。己がラシイヌを借りて帰ろうとすると、寒いからというので、小間使に言い付けて、燭をした葡萄酒を出させて、己がそれを飲むのをじっと見ていながら、それまで前屈みになって掛けていられた長椅子に、背を十分に持たせて白足袋を穿いた両足をずっと前へ伸ばされた。記憶から浮き上がったのは意味のない様なあの時の姿勢である。

あれを思い出すと同時に、己は往くときから帰るまでの奥さんとの対話を回顧して見て、一つも愛情にわたる詞のなかったのに驚いた。そしてあらゆる小説や脚本が虚構ではあるまいかと疑って見た。その時ふいと *Ande* という名が思い出された。只オオドの目は海のように人を漂わしながら、死せる目であった、空虚な目であったというのに、奥さんの謎の目は生きてるだけが違う。あの目はいろいろな事を語った。しかしあの姿勢も何事かを己に語ったのである。あんな語りよりは珍らしい。飽くまで行儀正しいところと、一変して飽くまで *graceful* などところのあるのも、あれもオオドだと、つくづく思いながら歩いていたら、美術学校と図書館との間を曲がる曲がり角で、巡査が突然角燈を顔のところへ出したので、びっくりした。

己は今日の日記を書くのに、目的地に向って迂路を取ると云ったが、これでは遂に目的地を避けて、その外辺を一周したようなものである。しかし己は知らざる人であったのが、今日知る人になったのである。そしてその一時涌き立った波が忽ち又斂まって、まだその時から二時間余り

しか立たないのに、心は哲人の如くに平静になっている。己はこんな物とは予期していなかった。

予期していなかったのはそればかりではない。己が知る人になるのに、こんな機縁で知る人になろうとも予期していなかった。己は必ず恋愛を待って、始て知る人になろうとも思わなかったが、又恋愛というものなしに、自衛心が容易に打ち勝たれてしまおうとも思わなかった。そしてあの坂井夫人は決して決して己の恋愛の対象ではないのである。

己に内面からの衝動、本能の策励のあったのは己に久しい事である。己は心が不安になって、本を読んでいるのに、目が徒らに文字を見て、心がその意義を纏ねることの出来なくなるがあった。己はふいと何の目的もなく外に出たくなって飛び出して、忙がしげに所々を歩いて、その途中で自分が何物かを求めているのに気が付いて、あの Gauthier の Mademoiselle Maupin にある少年のように女を求めているのに気が付いて、自ら咎めはしなかったが、自ら嘲ったことがある。あの時の心持は妙な心持であった。或る *aventure* に遭遇して見たい。その相手が女なら好い。そしてその遭遇に身を委ねてしまおうか否かは疑問である。その刹那に於ける思慮の選択か、又は意志の判断に待つのである。自分の体は愛惜すべきものである。容易に身を委ねてしまいたくはない。事に依ったら、女に遇って、女が己に許すのに、己は従わないで、そして女をなべく侮辱せずに、なだめて慰藉して別れたら、面白からう。そうしたら、或は珍しい純潔な交が成り立つまいものでもない。いやいや。それは不可能であらう。西洋の小説を見るのに、そんな場合には女は到底侮辱を感ぜずにはいないものらしい。又よしや一時純潔な交のようなも

のが出来ても、それはきつと似て非なるもので、その純潔は汚穢おとぎの繰延くりのびに過ぎないだろう。所詮しよせんそうそう先の先までは分かるものではない。とにかくアヴァンチュールに遭遇して見てからの事である。まあ、こんな風な思量が、半ば意識の闕しきの下に、半ばその闕を踰こえて、心の中に往來していたことがある。そういう時には、己はそれに気が付いて、意識が目をはっきり醒さますと同時に、己はひどく自ら恥じた。己はなんという怯懦けつじやうな人間だろう。なぜ眞の生活を求めようとしたのか。なぜ猛烈な恋愛を求めようとしたのか。己はいくじなしたと自ら恥じた。

しかしとにかく内面からの衝動はあった。そして外面からの誘惑もないことはなかった。己は小さい時から人に可哀かわいがられた。好い子という詞ことばが己の別名のように唱えられた。友達と遊んでいると、年長者、殊に女性の年長者が友達の侮辱を基礎にして、その上に己の名譽の肖像を立ててくれた。好い子たる自覚は知らず識らずの間に、己の影を顧みて自ら喜ぶ情を養成した。己の *patience* を養成した。それから己は単に自分の美貌を意識したばかりではない。己は次第にそれを利用するようになった。己の目で或る見かたをすると、強情な年長者が脆く讓歩してしまふことがある。そこで初めは殆ど意識することなしに、人の意志の抗抵を感じるとき、その見かたをするようになった。己は次第にこれが媚であるということに自覚せずにはいられなかった。それを自覚してからは、大丈夫たるべきものが、こんな宦官かんかんのするような態度をしてはならないと反省することもあったが、好い子から美少年に進化した今日も、この媚が全くは無くならずにいる。この媚が無形の悪習慣というよりは、寧ろ有形の畸形きけいのように己の体に附いている。この媚は己の醒めた意識が滅そうとしたために、却って *patience* になつて、無邪氣らしい仮面を被かぶつて、そ

の蔭に隠れて、一層威力を逞くしているのではないかとも思われるのである。そして外面から来る誘惑、就中異性の誘惑は、この自ら喜ぶ情と媚とが内応をするので、己の為めには随分防遏し難いものになっているに相違ないのである。

今日の出来事はこう云う畠に生えた苗に過ぎない。

己はこの出来事のあったのを後悔してはいない。なぜというに、現社会に僅有絶無というようになっているらしい、男子の貞操は、縦い尊重すべきものであるとしても、それは身を保つとか自ら重んずるとかいう利己主義だというより外に、何の意義をも有せざるように思うからである。そういう利己主義は己にもある。あの時己は理性の光に刹那の間照されたが、歯牙の相撃とうとするまでになった神経興奮の雲が、それを忽ち蔽ってしまった。その刹那の光明の消えるとき、己は心の中で、「なに、未亡人だ」と叫んだ。平賀源内がどこかで云っていたことがある。「人の女房に流し目で見られたときは、頸に墨を打たれたと思うが好い。後家は」何やらというような事であった。そんな心持がしたのである。

とにかく己は利己主義の上から、或る損失を招いたということを自覚する。そしてこれから後に、又こんな損失を招きたくないということをも自覚する。しかし後悔と名づける程の苦い味を感じてはいないのである。

苦みはない。そんなら甘みがあるかというに、それも無い。あるとき一時発現した力の感じ、発揚の心状は、すぐに迹もなく消え失せてしまつて、この部屋に帰つて、この机の前に据わつてからは、何の積極的な感じもない。この体に大いなる生理的変動を生じたものとは思われない。

尤も幾分かいつもより寂しいようには思う。しかしその寂しさはあの根岸の家に引き寄せられる寂しさではない。恋愛もなければ、係恋もない。

一体こんな閱歴が生活であろうか。どうもそうは思われぬ。真の充実した生活では慥にない。

己には真の生活は出来ないのであろうか。己もデカダンスの沼に生えた、根のない浮草で、花は咲いても、夢のような蒼白い花に過ぎないのであろうか。

もう書く程の事もない。夜の明けないうちに少し寐ようか。しかし寐られれば好いが。只この寐られそうにないのだけが、興奮の記念かも知れない。それともその余波さえ最早消えてしまっていて、今寐られそうにないのは、長い間物を書いていたせいかも知れない。

十一

純一の根岸に行った翌日は、前日と同じような好い天気であった。

純一はいつも随分夜をふかして本などを読むことがあっても、朝起きて爽快を覚えないことはないのであるが、今朝、日の当たっている障子の前にすわって見れば、鈍い頭痛がして、目に羞明を感じる。顔を洗ったら、直るだろうと思つて、急いで縁に出た。

細かい水蒸気を含んでいる朝の空気に浸されて、物が皆青白い調子に見える。暇があるからだと云つて、長次郎が松葉を敷いてくれた躰のあたりを見れば、敷松葉の界にしてある、太い繩

の上に霜がまだらに降っている。

ふいと庭下駄を穿いて門に出て、しゃがんで往來を見ていた。絆纏を着た職人が二人きれぎれな話をして通る。息が白く見える。

暫くしゃがんでいるうちに、頭痛がしなくなつた。縁に帰って楊枝を使うとき、前日の記憶がぼんやり浮んで来た。あの事を今一度ゆっくり考えて見なくてはならないというような気がする。障子の内では座敷を掃く音がしている。婆あさんがもう床を上げてしまつて、東側の戸を開けて、埃を掃き出しているのである。

顔を急いで洗つて、部屋に這入つて見ると、綺麗に掃除がしてある。目はすぐに机の上に置いてある日記に惹かれた。きのう自分の實際に遭遇した出来事よりは、それを日記にどう書いたということが、当面の問題であるように思われる。記憶は記憶を呼び起す。そして純一は一種の不安に襲われて来た。それはきのうの出来事に就いての、ゆうべの心理上の分析には大分行き届かないところがあつて、全体の判断も間違つていのように思われるからである。夜の思想から見ると昼の思想から見るとで同一の事相が別様の面目を呈して来る。

ゆうべの出来事はゆうべだけの出来事ではない。これから先きはどうなるだろう。自分の方に恋愛のないのは事実である。しかしあの奥さんに、もう自分を引き寄せる力がないかどうか、それは余程疑わしい。ゆうべ何もかも過ぎ去つたように思ったのは、瘡の発作の後に、病人が全快したように思う類ではあるまいか。又あの謎の目が見たくなることがありはすまいか。ゆうべ夜が更けてからの心理状態とは違つて、なんだかもう少しあの目の魔力が働き出して来たかどさ

え思われるのである。

それに宿主やどぬしなしに勘定は出来ない。問題はこつちがどう思うかというばかりではない。向うの思わくも勘定に入れなくてはならない。有楽座で始めて逢あつてから、向うは目的に向つて一直線に進んで来ている。自分は受身である。これから先きを自分がどうしようかというよりは、向うがどうしてくれるかという方が問題かも知れない。恋愛があるのしないと生利なまじりな事を思ったが、向うこそ恋愛はないのであろう。そうして見れば、我が為めに恥はずべきこの交際まじりあひを、向うがいつまで継続しようと思つているかが問題ではあるまいか。それは固もとより一時の事であるには違ちがいない。しかし一時というのは比較くらべ的な詞ことばである。

こんな事を思つているところへ、婆あさんが朝飯を運んで来たので、純一は箸はしを取り上げた。婆あさんは給仕をしながら云つた。

「昨晚は大相遅くまで勉強していらつしゃいましたね」

「ええ。友達の処へ本を借りに行つて、つい話が長くなつてしまつて、遅く帰つて来て、それから少し為事しごとをしたもんですから」

言いわけらしい返事をして、これがこの内うちへ来てからの、嘘うその衝つき始めだと、ふいと思つた。そして厭いやな心持がした。

食事が済むと、婆あさんは火鉢に炭をついで置いて帰つた。

純一はゆうべ借りて来たラシイヌを出して、一二枚開けて見たが、読む気になれなかつた。そこでこんなクラシックなものは、気分のもっと平穩な時に読むべきものだ、自分で自分に言

いわけをした。それから二三日前に、神田の三才社で見附けて、買って帰った Huijsmans の小説のあったのを出して、読みはじめた。

小説家たる主人公と医者との対話を書いてある。話題は過ぎ去ったものとしての自然主義の得失である。次第次第に実世間に遠ざかって、しまいは殆ど縁の切れたようになった文芸を、ともかくも再び血のあり肉のあるものにしたのは、この主義の功績である。しかし煩瑣な、冗漫な文字で、平凡な卑猥な思想を写すに至ったこの主義の作者の末路を、飽くまで排斥する客の詞にも、確に一面の真理がある。

自然主義の功績を称える処には、バルザックが挙げてある。フロオベルが挙げてある。ゴンクウルが挙げてある。最後にゾラが挙げてある。とにかく立派な系図である。

純一は日本での en miniature 自然主義運動を回顧して、どんなに眞面目に見ても、さ程難有くもないように思った。純一も東京に出て、近く寄って預言者を見てから、渴仰の熱が余程冷却しているのである。

対話が済んで客が帰る。主人公が独りで物を考えている。そこにこんな事が書いてある。「材料の真実な事、部分部分の詳密な事、それから豊富で神経質な言語、これ等は写実主義の保存せられなくてはならない側である。しかしその上に靈的価値を汲むものとならなくてはならない。奇蹟を官能の病で説明しようとしてはならない。人性に靈と体との二つの部分があって、それが鎔合せられている。寧ろ混淆せられている。小説も出来る事なら、そんな風に二つの部分があらせたい。そしてその二つの部分の反応、葛藤、調和を書くことにしたい。一言で言えば、ゾラの

深く穿^{うが}つて置いた道を踏んで行きながら、別にそれと併行している道を通ぜさせたい。それが裏面の道、背後の道である。一言で言えば靈的自然主義を建立^{こんりゆう}するのである。そうならば、それは別様な誇りであろう。別様な完全であろう。別様な強大であろう。そういう立派な事が出来ないで、自然主義をお座敷向きにしようとするリベラルな流義と、電信体^{でんしん}の悪く気取った文章で、徒らに靈的芸術の真似^{まね}をしていて、到底思想の貧弱^{ひんじやく}を覆^{おほ}うことの出来ない流義とが出来ているというのである。

純一はここまで読んで来て、ふいと自分の思想が書物を離れて動き出した。目には文字を見ていて、心には別の事を思っている。

それは自分のきのうの閲歴が体だけの閲歴であって、自分の靈は別に空中の道を歩いていると思つたのが始で、それから本に書いてある事が余所^{あま}になつてしまつたのである。

あの靈を離れた交^{まじり}を、坂井夫人はいつまで継続しようとするだろうか。きのうも既に心に浮かんだオオドのように、いつまでも己に付き纏^{まと}うのだろうか。それとも夫人は目的を達するまでは、一直線に進んで来たが、既に目的を達した時が初の終なのであるだろうか。借りて帰っているラシイヌの一卷が、今は自分を向うに結び付けている一筋の糸である。あれを返すとき、向うは糸を切るであらうか。それともその一筋を二筋にも三筋にもしくはすまいか。手紙をよこしはすまいか。この内へ尋ねて来はすまいか。

こう思うと、なんだかその手紙が待たれるような気がする。その人が待たれるような気がする。あのお雪さんは度々^{たびたび}この部屋へ来た。いくら親しくしても、気が置かれて、帰ったあとでは

つと息を衝く。あの奥さんは始めて顔を見た時から気が置けない。この部屋へでもずっと這入って来て、どんなにか自然らしく振舞うだろう。何を話そうかと気苦労をするような事はあるまい。話なんぞはしなくても分かっていうような風をするだろう。

純一はここまで考えて、空想の次第に放縦になって来るのに心附いた。そして自分を臍甲斐なく思った。

自分は男子ではないか。経験のない為めに、これまでは受身になっていたにしても、何もいつまでも受身になっている筈がない。向うがどう思ったって、それにどう応ずるかはこつちに在る。もう向うの自由になっていないと、こつちが決心さえすればそれまでである。借りた本は小包にしても返される。手紙が来ても、開けて見なければ好い。尋ねて来たら、きっぱりとことわれば好い。

純一はここまで考えて、それが自分に出来るだろうかと反省して見た。そして躊躇した。それを極めずに置くところに、一種の快味があるのを感じた。その躊躇している虚に乗ずるように、色々な記憶が現れて来る。しなやかな体の起ちよう据わりよう、意味ありげな顔の表情、懐かしい声の調子が思い出される。そしてそれを惜む未練の情のあることを、我ながら抹殺してしまふことが出来ないのである。又してはこの部屋であの態度を見たらどうだろうなどと思われる。脱ぎ棄てた吾嬬コオト、その上に置いてあるマッフまでが、さながら目に見えるようになるのである。

純一はふと気が附いて、自分で自分を嘲って、又 *Huyssmans* を読み出した。Durtal という主人

公が文芸家として旅に疲れた人なら、自分はまだ途に上らない人である。デュルタルは現世界に愛想をつかして、いつその事カトリック教に身を投じようかと思つては、幾度かその「空虚に向つての飛躍」を敢てしないで、袋町から踵を旋らして帰るのである。それがなぜ愛想をつかしたかと思つと、実に馬鹿らしい。現世界は奇蹟の多きに堪えない。金なんぞも大いなる奇蹟である。何か為事をしようと思つている人の手には金がない。金のある人は何も出来ない。富人が金を得れば、悪業が増長する。貧人が金を得れば墮落の梯を降つて行く。金が集まって資本になると、個人を禍するものが一変して人類を禍するものになる。千万の人はこれがために餓死して、世界はその前に跪く。これが悪魔の業でないから、不可思議であらう。奇蹟であらう。この奇蹟を信ぜざることを得ないとなれば、三位一体のドグマも信ぜられない筈がなくなると云うのである。

純一は顔を蹙めた。そして作者の厭世主義には多少の同情を寄せながら、そのカトリック教を唯一の退却路にしているのを見て、因襲というものの根ざしの強さを感じた。

十一時半頃に大村が尋ねて来た。月曜日の午前の最終一時間の講義と、午後の臨床講義とは某教授の受持であるのに、その人が事故があつて休むので、今日は遠足でもしようかと思つたことである。純一はすぐに同意して云つた。

「僕はまだちつとも近郊の様子を知らないのです。天気もひどく好いから、どこへでも御一しょに行きましよう」

「天気はこの頃の事さ。外国人が岡目八目で、やっぱり冬寒くなる前が一番好いと云つている

ね」

「そうですかねえ。どっちの方へ行きますか」

「そうさ。僕もまだ極めてはいないので。とにかく上野から汽車に乗ることにするさ」

「もうすぐ午ですわね」

「上野で食って出掛けるさ」

純一が袴はかまを穿はいていると、大村は机の上に置いてある本を手に取って見た。

「大変なものを読んでいるね」

「そうですかね。まだ初めの方を見ているのですが、なんだかひどく厭世的な事が書いてあります」

「そうそう。行き留まりのカトリック教まで行って、半分道だけ引き返して、靈的自然主義になるとうとところでしよう」

「ええ。そこまで見たのです。一体先きはどうかなるのですか」

こう云いながら、純一は袴を穿はいてしまつて、鳥打帽を手に持った。大村も立って戸口に行つて腰を掛けて、編上あみあげ沓くつを穿はき掛けた。

「まあ、歩きながら話すから待ち給え」

純一は先きへ下駄を引ひつ掛かけて、植木屋の裏口を覗のぞいて、午食ひるめしをことわつて置いて、大村と一しょに歩き出した。大村と並んで歩くと、動動くもすればこの巖がん乗じょうな大男に圧倒せられるような感じのするのを禁いじ得えない。

純一の感じが伝わりでもしたように、大村は一寸純一の顔を見て云った。
 「ゆっくり行こうね」

なんだか讓歩するような、庇護ひごするような口調であった。しかし純一は不平には思わなかつた。

「さっきの小説の先きはどうなるのですか」と、純一が問うた。

「いや。大変なわけさ。相手に出て来る女主人公は真正銘の サタニスト(五三) なのだからね。しかしド
 ユルタルは驚いて手を引いてしまふのです。フランスの社会には、道徳も宗教もなくなって、只
 悪魔主義だけが存在しているという話になるのです。今まであの作者のものは読まなかつたの
 ですか」

「ええ。つい読む機会がなかったのです。あの本も注文して買ったのではないのです。瀬戸が三
 才社に大分沢山フランスの小説が来ていると云ったので、往って見たとき、ふいと買ったのです」
 「瀬戸はフランスは読めないでしょう」

「読めないのです。学校で奨励しているので、会話かなんかを買に行ったとき、見て来て話し
 たのです」

「そんな事でしよう。まあ、読んで見給え。随分猛烈な事が書いてあるのだ。一体青年の読む本
 ではないね」

目で笑って純一の顔を見た。純一は黙って歩いている。

天王寺前の通に出た。天氣の好いわりに往來は少い。墓参に行くかと思われるような女子供

の、車に乗ったのに逢った。町屋の店先に蓆むしろを敷いて、子供が日なたばかりをして遊んでゐる。

動物園前から、東照宮の一の鳥居の内を横切つて、精養軒の裏口から這入つた。

帳場の前を横切つて食堂に這入ると、丁度客が一人もないので、給仕が二三人熨だんちの前で話をしていたが、驚いたような様子をして散ってしまった。その一人のヴェランダに近い卓テーブルの処まで附いて来たのに、食事を誂あたらえた。

酒はと問われて、大村は麦酒、純一はシトロンを命じた。大村が「寒そうだな」と云つた。

「酒も飲めないことはないのですが、構えて飲むという程好きでないのです」

「そんなら勧めたら飲むのですか」

この詞ことばが純一の耳には妙に痛切に響いた。「ええ。どうも僕は「バックシイフ」で行けません」

「誰だつてあらゆる方面に acid に agressif に遣るわけには行かないよ」

給仕がスープを持って来た。二人は暫く食事をしながら、雑談をしているうちに、何の連絡もなしに、純一が云つた。

「男子の貞操という問題はどういうものでしょう」

「そうさ。僕は医学生だが、男子は生理上に、女子よりも貞操が保ちにくく出来ているだけは、事実らしいのだね。しかし保つことが不可能でもなければ、保つのが有害でも無難ないということだ。御相談とあれば、僕は保つ方を賛成するね」

純一は少し顔の赤くなるのを感じた。「僕だつて保ちたいと思つて居るのです。しかし貞操な

んというものは、利己的の意義しかないように思うのですが、どうでしょう」

「なぜ」

「つまり自己を愛惜するに過ぎないのではないでしょうか」

大村は何やら一寸考えるらしかったが、こう云った。「そう云えば云われないことはないね。僕の分らないと思つたのは、生活の衝動とか、種族の継統とかいうような意義から考えたからです。その方から見れば、生活の衝動を抑制しているのだから、egoistic エゴイスマチック よりも altruistic アルトリュイスマチック の方になるからね。なんだか哲学臭いことを言うようだが、そう見るのが当り前のようだからね」

純一は手に持っていたフォークを置いて、目をかがやかした。「なる程そうです。どうぞ僕の希望ですから、哲学談をして下さい。僕は国にいた頃からなんでも因襲に囚とらわれているのはつまらないと、つくづく思つたのです。そして腹の底で、自分の周囲の物を、何もかも否定するようになったのですね。それには小説やなんぞに影響せられたところもあるのでしょう。それから近頃になって、自分の思想を点検して見るようになったのです。いつかあなたと新人の話をしたでしょう。丁度あの頃からののです。あの時積極的の新人ということですが、その積極的ということの内容が、どうも僕にははっきりしていなかったのです」

給仕が大村の前にあるフライの皿を引いて、純一の前へ来て顔を覗くようにした。純一は「好いよ」と云って、フォークを皿の中へ入れて、持つて行かせて話し続けた。「そこで折々ひとり考えて見たのです。そうすると、自分の思想が凡すべて利己的なのですね。しかもけちな利己主義で、殆ど独善主義とでも言つて好いように思われたのです。僕はこんな事では行けないと

思ったのです。或る物を犠牲にしなくては、或る物は得られないと思つたのです。ところが、僕なんぞの今までした事には、犠牲を払うとか、献身的態度に出るとかいような事が一つもないでしょう。それからというものはあれも利己的だ、これも利己的だと思つたのです。それだもんですから、貞操ということ考えた時も、生活の受用や種族の継続が犠牲になっているという側を考えずに、自己の保存だ、利己的だという側ばかり考えたのです」

大村の顔には、憎らしくない微笑が浮んだ。「そこで自己を犠牲にして、恋愛を得ようと思つたというのですか」

「いいえ。そうではないのです。それは僕だつて恋愛というものを期待していかないことではないのです。しかし恋愛というものを人生の総てだとは思いませんから、恋愛を成就するのが、積極的新人の面目だとも思いません」純一は稍やわざとらしい笑をした。「つまり貧乏人の世帯調べのように、自己の徳目を数えて見て、貞操なんということを持ち出したのです」

「なる程。人間のする事は、殊に善と云われる側の事になると、同じ事をして、利己の動機でするのもあろうし、利他の動機でするのもあろうし、両方の動機を有しているのもあるでしょう。そこで新人だつて積極的なものを求めて、道徳を構成しようとか、宗教を構成しようとかいうことになれば、それはどうせ利己では行けないでしょうよ」

「それではどうしても又因襲のような或る物に縛せられるのですね。いつかもその事を言ったら、あなたは繩の当りどころが違ふと云つたでしょう。あれがどうも好く分らないのですが」

「大変な事を記憶していましたね。僕はまあ、こんな風に思っているのです。因襲というのは、

その縛しましめが本能的で、無意識なのです。新人が道徳で縛られるのは、同じ縛しましめでも意識して縛られるのです。因襲に縛られるのが、窃盗きつとうをした奴やつが逃げ廻まわっていて、とうとう縛られるのなら、新人は大泥坊が堂々と名乗なをりって出て、笑いながら縛ばくに就くのですね。どうせ囚とらわれたの縛しましめだのという語ことばを使うのだから」

大村が自分で云って置いて、自分が無遠慮に笑うので、純一も一しよになって笑った。暫くしてから純一が云った。

「そうして見ると、その道徳というものは自己が造るものでありながら、利他的であり、socialであるのですね」

「無論そうさ。自己が造った個人的道徳が公共的になるのを、飛躍だの、復活だのと云うのだね。だから積極的の新人が出来れば、社会問題も内部から解決せられるわけでしよう」

二人は暫く詞ことばが絶えた。料理は小鳥の炙あぶりものに萵苣もものサラダが出ていた。それを食たってしまつて、ヴェランダへ出て珈琲コーヒーを飲んだ。

勘定を済ませて、快い冬の日を角帽と鳥打帽とに受けて、東京に珍らしい、乾いた空気を呼吸しながら二人は精養軒を出た。

十二

二人は山を横切つて、常磐華壇ときわわかだんの裏の小さな坂を降りて、停車場はに這入はいった。時候が好いの

にいたとき、九州の大演習を見に連れて行かれて、師団長が将校集まれの喇叭を吹かせて、命令を伝えるのを見たことがある。あの時より外には、こんな口吻で物を言う人を見たことがないのである。

純一は心のうちで、この未知の夫人と坂井夫人とを比較することを禁じ得なかつた。どちらも目に立つ女であつて、どこか技巧を弄しているらしい。しかしそれが殆ど自然に迫っている。外の女は下手が舞台に登つたようである。丁度芸術にも日本には或る *manerisme* が行われているように、風俗にもそれがある。本で読んだり、画で見たりする、西洋の女のように自然に勝つていない。そしてその技巧のある夫人の中で、坂井の奥さんが女らしく伶俐な方の代表者であるなら、この奥さんは女丈夫とか、賢夫人とか云われる方の代表者であらうと思つた。

そこへ、純一はどこへ行つたかと思廻しているような様子で、大村が外から覗いたので、純一はすぐに出て行つて、一しよに三等客の待つてゐるベンチの側の石畳みの上を、あちこち歩きながら云つた。

「今一等待合にいた夫人は、当り前の女ではないようでしたが、君は気が付きませんでしたか」「気が附かなくて。あれは、君、有名な高島詠子さんだよ」

「そうですか」と云つた純一は、心の中になる程と領いた。東京の女学校校長で、あらゆる毀譽褒貶を一身に集めたことのある人である。校長を退いた理由としても、種々の風説が伝えられた。

国にいたとき、田中先生の話に、詠子さんは演説が上手で、或る目的を以て生徒の群に対して演説するとなると、ナポレオンが士卒を鼓舞するときの雄弁の面影があると云つた。悪徳新聞のあ

らゆる攻撃を受けていながら、告別の演説でも、全校の生徒を泣かせたそうである。それも一時の感動ばかりではない。級ごとに記念品を贈る委員などが出来たとき、殆ど一人もその募りに応ぜなかったものはないということである。とにかく英雄である。絶えず自己の感情を自己の意志の下に支配している人物であろうと、純一は想像した。

「女丈夫だとは聞いていましたが、一寸見てもあれ程態度の目立つ人だとは思わなかったのです」

「うん。態度の representative な女だね」

「それを実際えらいのでしょう」

「えらいのですとも。君、オオトリシアンで、まだ若いのに自殺した学者があったね。Otto Weininger というのだ。僕なんぞはニイチェから後の書物では、あの人の書いたものに一番ひどく動されたと云っても好いが、あれがこう云う議論をしていますね。どの男でも幾分か女の要素

を持っているように、どの女でも幾分か男の要素を持っている。個人は皆 M + W だということさ。そして女のえらいのは M の比例数が多いのだそうだ」

「そんなら詠子さんは M を余程沢山持っているのしょう」と云いながら、純一は自分には大分 M がありそうだと思つて、いやな心持がした。

風炉敷包を持った連中は、もうさつきから黒い木札の立てである改札口に押し掛けています。塙が開くや否や、押し合つてプラットホームへ出る。純一はとかくこんな時には、透くまで待つていようとするのであるが、今日大村が人を押し退けようともせず、人に道を譲りもせず、群

集を空気扱いにして行くので、その背後に附いて、早く出た。

一等室に這入って見れば、二人が先登であった。そこへ純一が待合室で見た洋服の男が、赤帽に革包を持たせて走って来た。赤帽が縦側の左の腰掛の真ん中へ革包を置いて、荒い格子縞の駱駝の膝掛を傍に鋪いた。洋服の男は外へ出た。大村が横側の後に腰掛けたので、純一も並んで腰を掛けた。

続いて町のものらしい婆あさんと、若い女とが這入って来た。物馴れない純一にも、銀杏返しに珊瑚珠の根掛をした女が芸者だろうということだけは分かった。二人の女は小さい革包を間に置いて腰を掛けたが、すぐに下駄を脱いで革包を挟んで、向き合って、きちんと据わった。二人の白足袋が symétrique に腰掛の縁にはみ出している。

芸者らしい女は平気でこっちを見ている。純一は少し間の悪いような心持がしたので、救を求めるように大村を見た。大村は知らぬ顔をして、人の馳せ違うプラットフォームを見ている。

乗るだけの客が大抵乗ってしまった頃に、詠子さんが同じ室に這入って来た。さっきの洋服の男は、三等にでも乗るのである。挨拶をして走って行った。女学生らしい四五人がずらりと窓の外に立ち並んだ。詠子さんは開いていた窓から、年寄の女に何か言った。

発車の笛が鳴った。「御機嫌宜しゅう」、「さようなら」なんぞという詞が、愛相の好い女学生達の口から、囁くように出た。詠子さんは窓の内に真っ直に立って、顔で会釈をしている。女学生の中の年上で、瘦せた顔の表情のひどく活潑なのが、汽車の大分遠ざかるまで、ハンケチを振って見送っていた。

詠子さんは静かに膝掛の上に腰を卸して、マッフに両手を入れて、端然としている。暫くは誰も物を言わない。日暮里の停車場を過ぎた頃、始めて物を言い出したのは、黒うとらしい女連であった。「往くと思つているでしようか」と若いのが云うと、「思つていなくて」と年を取つたのが云う。思いの外に遠慮深い小声である。しかし静かなこの室では一句も残らずに聞える。それが始終主格のない話ばかりなのである。

大村が黙っているの、純一も遠慮して黙っている。詠子さんはやはり端然としている。

窓の外は同じような田圃道ばかりで、おりおりそこに客を載せてゆつくり歩いている人力車なんぞが見える。刈跡から群がって雀が立つ。醜い人物をかけた広告の一つに、鴉の止まっていたのが、嘴を大きく開いて啼きながら立つ。

室内は、左の窓から日の差し込んでゐる処に、小さい塵が跳つている。

黒人らしい女連も黙つてしまふ。なぜだか大村が物を言わないので、純一も退屈には思ひながら黙つていた。

王子を過ぎると、窓から外を見ていた純一が、「ここが王子ですね」と云うと、大村は「この列車は留まらないのだよ」と云つた切り、又黙つてしまつた。

赤羽で駅員が一人這入つて来て、卓の上に備えてある煎茶の湯に障つて見て、出て行つた。ここでも、藤や浦和でも、多少の乗客の出入はあつたが、純一等のいる沈黙の一等室には人の増減がなかつた。詠子さんは始終端然としているのである。

三時過ぎに大宮に着いた。駅員に切符を半分折り取らせて、停車場を出るとき、大村がさも楽

楽したという調子で云った。

「ああ苦しかった」

「なぜです」

「馬鹿げているけれどね、僕は或る種類の人間には、なるべく自己を観察して貰いたくないのだ」

「その種類の人間に詠子さんが属しているのですか」

大村は笑った。「まあ、そうだね」

「一体どういう種類なのでしょう」

「そうさね。一寸説明に窮するね。要するに自己を誤解せられる虞のある人には、自己を観察して貰いたくないとでも云ったら好いのでしょう」純一は目を睜みっている。「これでは余り抽象的かねえ。所謂教育界の人物なんぞがそれだね」

「あ。分かりました。つまり hypocrisies だと云うのでしょう」

大村は又笑った。「そりゃあ、あんまり酷だよ。僕だってそれ程教育家を悪く思っていないやしないが、人を鑄型に拵はめて拵こえようとしているのが癖くせになっていて、誰をでもその鑄型に拵はめて見ようとするからね」

こんな話を話しながら、二人は公園の門を這入った。常磐木とまきわぎの間に、葉の黄ばんだ雑木の交っている茂みを見込む、二本柱の門に、大宮公園と大字で書いた木札の、稍古せうこびたのが掛かっているのである。

落葉の散らばっている、幅の広い道に、人の影も見えない。なる程大村の散歩に來そうな処だと、純一は思った。只どこからか微かに三味線の音がする。純一が云った。

「さっきお話しの方インゲルなんぞは女性をどう見ているのですか」

「女性ですか。それは余程振っていますよ。なんでも女というものには娼妓のタイプと母のタイプとしかないというのです。簡単に云えば、娼と母とでも云いますかね。あの論から推すと、東京や無名通信で退治している役者買の奥さん連は、事実である限りは、どんなに身分が高くて、どんな金持を親爺や亭主に持っていても、あれは皆娼妓です。芸者という語を世界の字書に提供した日本に、娼妓の型が発展しているのは、不思議ではないかも知れない。子供を二人しか生まないことにして、そろそろ人口の耗って来るフランスなんぞは、娼妓の型の優勝を示しているのに外ならない。要するにこの質の女は antisocial です。幸な事には、他の一面には母の型があつて、これも永遠に滅びない。母の型の女は、子を欲しがつていて、母として子を可哀がるばかりではない。娘の時から犬ころや猫や小鳥をも、母として可哀がる。嬪に行けば夫をも母として可哀がる。人類の継続の上には、この型の女が勲功を奏している。だから国家が良妻賢母主義で女子を教育するのは尤もでしょう。調馬手が馬を育てるにも、駈足は教えなくても好いようなもので、娼妓の型には別に教育の必要がないだらうから」

「それでは女子が独立していろいろの職業を営んで行くようになる、あの風潮に対してはどう思っているのでしょうか」

「あれはM V Mの女と看做して、それを育てるには、男の這入るあらゆる学校に女の這入るのを

拒まないようにすれば好いわけでしょうよ」

「なる程。そこで恋愛はどうなるのです。母の型の女を対象にしては恋愛の満足は出来ないでしょうし、娼妓の型の女を対象にしたら、それは墮落ではないでしょうか」

「そうです。だから恋愛の希望を前途に持っているという君なんぞの爲めには、ワイニングゲルの論は残酷を極めていのです。女には恋愛というようなものはない。娼妓の型には性欲がある。母の型には繁殖の欲があるに過ぎない。恋愛の対象というものは、凡て男子の構成した幻影だといふのです。それがワイニングゲルの爲めには非常に真面目な話で、当人が自殺したのも、その辺に根ざしているらしいのです」

「なる程」と云った純一は、暫く詞もなかつた。坂井の奥さんが娼妓の型の代表者として、彼れの想像の上に浮ぶ。贅くことを知らない polype の腕に、自分は無意味の餌になつて抱かれていたような心持がして、堪えられない程不愉快になつて来るのである。そしてこう云つた。

「そんな事を考えると、厭世的になつてしまいますね」

「そうさ。ワイニングゲルなんぞの足跡を踏んで行けば、厭世は免れないね。しかし恋愛なんという概念のうちには人生の酔を含んでいる。Ivresse を含んでいる、鴉片や Hirsch のようなものだ。鴉片は支那までが表向禁じているが、人類が酒を飲まなくなるかは疑問だね。Dionisos は Apollon の制裁を受けたつて、滅びてしまうものではあるまい。問題は制裁奈何にある。どう縛られるか、どう囚われるかにあると云つても好かるう」

二人は氷川神社の拝殿近く来た。右側の茶屋から声を掛けられたので、殆ど反射的に避けて、

社の背後の方へ曲がった。

落葉の散らばっている小道の向うに、木立に囲まれた離れのような家が見える。三味線の音はそこからする。四五人のとよめき笑う声と女の歌う声とが交って来る。

音締の悪い三味線の伴奏で、聴くに堪えない卑しい歌を歌っている。丁度日が少し傾いて来たので、幸に障子が締め切ってあって、この放たれた男女の一群と顔を合せずに済んだ。二人は又この離れを避けた。

社の東側の沼の畔に出た。葦簀を立て繞らして、店をしまっている掛茶屋がある。

「好い処ですね」と、覚えず純一が云った。

「好かるう」と、大村は無邪気に得意らしく云って、腰掛けに掛けた。

大村が紙巻煙草に火を附ける間、純一は沼の上を見わたしている。僅か二三間先きに、枯葦の茂みを抜いて立っている杙があって、それに鴉が一羽止まっている。こつちを向いて、黒い円い目を見て、紫色の反射のある羽をちよいと動かしたが、又居ずまいを直して逃げずにいる。

大村が突然云った。「まだ何も書いて見ないのですか」

「ええ。蜚ばず鳴かずです」と、純一は鴉を見ながら答えた。

「好く文学者の成功の事を、大いなるoupをしたと云うが、あれは采を擲つので、つまり芸術を賭博に比したのだね。それは流行作者、売れる作者になるにはそういう偶然の結果もあろうが、ceuvre問題は別として、今のよう思想を発表する道の開けている時代では、価値のある作が具眼者に認められずにしまうという虞れは先ず無いね。だから急ぐには及ばないが、遠慮す

るにも及ばない。起とうと思えば、いつでも起てるのだからね」

「そうでしょうか」

「僕なんぞはそういう問題では、非常に楽天的に考えていますよ。どんなに手広に新聞雑誌を利用している *living* でも、有力な分子はいつの間にか自立してしまふから、党派そのものは脱殻になつてしまつて、自滅せずにはいられないのです。だからそんなものに、縋つたつて頼もしくはないし、そんなものに黙殺せられたつて、悪く言われたつて沮喪するには及ばない。無論そんな仲間に這入るなんという必要はないのです」

「しかし相談相手になつて貰われる先輩というようなものは欲しいと思つてますが」
「そりゃああつても好いでしようが、縁のある人が出合ふのだから、強いて求めるわけには行かない。紹介状やなんぞで、役に立つ交際が成り立つことは先ず無いからね」

こんな話をしているうちに、三味線や歌が聞え已んだので、純一は時計を見た。
「もう五時を大分過ぎています」

「道理で少し寒くなつて来た」と云つて、大村が立つた。

鴨が一声啼いて森の方へ飛んで行つた。その行方を見送れば、いつの間にか鼠色の薄い雲が空を掩うていた。

二人は暫く落葉の道を歩いて上りの汽車に乗つた。

純一が日記は又白い処ばかり多くなつた。いつの間にか十二月も半ばを過ぎてゐる。珍らしい晴天続きで、国で噂うわさに聞いたような、東京の寒さをもまだ感じたことがない。

植長うゑちやうの庭の菊も切られてしまつて、久しく咲いていた山茶花さざんかまでが散り尽した。もう色のあるものと云つては、常磐樹とこざねに交つて、梅もどきやなんぞのような、赤い実のなつてゐる木が、あちこちに残つてゐるばかりである。

中沢のお雪さんが余り久しく見えないと思ひながら、問いもせずにいると、或る日婆あさんがこんな事を話した。お雪さんに小さい妹がある。それがジフテリアになつて大学の病院に這入つた。ジフテリアは血清注射で直つたが、跡が腎臓炎じんぞうえんになつて、なかなか退院することが出来ない。お雪さんは稽古けいこに行つた帰りに、毎日見舞に行つて、遅くなつて帰る。休日には朝早くからおもちゃなんぞを買つて行つて、終日附いてゐるといふことである。「ほんとにあんな氣立ての好い子つてありません」と婆あさんが褒めて話した。

この頃純一は久し振りで一度大石路花を尋ねた。下宿が小石川の富坂上とみざかうへに變つてゐた。純一はまだ何一つ纏まとまつた事を始めずにゐるのを恥じて、若し行きなり何をしてゐるかと問われはすまいかと心配して行つたが、そんな事は少しも問わない。寧ろなんにもしないのが当り前だとも思つてゐるらしく感ぜられた。丁度這入つて行つたとき、机の上に一ぱい原稿紙を散らかして、

何か書き掛けていたらしいので「邪魔なら又参ります」と云うと「構わないよ、器械的に書いてるのだから、いつでも已めて、いつでも続けられる。重宝な作品だ」と真面目な顔で云った。そしていつもの詞少なに応答をする癖とまるで交って、自分の目下の境遇を話して聞せてくれた。それが極端に冷静な調子で、自分はなんの痛癢をも感ぜずに、第三者の出来事を話しているように聞えるのである。純一は直ぐに、その話が今書き掛けている作品と密接の関係を有しているのだということ悟った。話しながら、事柄の経過の糸筋を整理しているらしいのである。話している相手が誰でも構わないらしいのである。

路花の書いている東京新聞は、初め社会の下層を讀者にして、平易な事を平易な文で書いていた小新聞に起って、次第に品位を高めたものであった。記者と共に調子は幾度も変った。しかし近年のように、文芸方面に向って真面目に活動したことはなかった。それは所謂自然主義の唯一の機関と云っても好いようになってからの事である。ところが社主が亡くなって、新聞は遺産として、親から子の手に渡った。これまでの新聞の發展は、社主が意識して遂げさせた發展ではなかった。思想の新しい記者が偶然這入る。学生やなんぞのような若い読者が偶然殖える。記事は知らず識らず多数の新しい読者に迎合するようになる。こういう交互の作用がいつか自然主義の機関を成就させたのであった。それを故の社主は放任していたのである。新聞は新しい社主の手に渡った。少壮政治家の鉄のような腕が意識ある意志によって揮われた。社中のもの話に聞けば、あの背の低い、肥満した体を巴里為立てのフロックコオトに包んで、鋭い目の周囲に横着するな微笑を湛えた新社主菅田男爵は、欧羅巴の某大國の Corps diplomatique で鍛えて来た社交的

伎倆を逞うして、或る夜一代の名士を華族会館の食堂に羅致したのである。今後は賛助員の名の下に、社会のあらゆる方面の記事を東京新聞に寄せることになったという、この名士とはどんな人々であったか。帝国大学の総ての分科の第一流の教授連がその過半を占めていたのである。新聞はこれから *academique* になるだろう。社会の出来事は、謂わば永遠の形の下に見た鳥瞰図になって、新聞を飾るだろう。同じ問題でも、今まで焼芋の皮の燻る、縁の焦げた火鉢の傍で考えた事が発表せられた代りに、こん度は温室で咲かせた熱帯の花の蔭から、雪を硝子越しに見る窓の下で考えた事が発表せられるだろう。それは結構である。そんな新聞もあっても好い。しかし社員の中で只一人華族会館のシャンパニエエの杯を管めなかつた路花はどうしても車の第三輪になるのである。それなのに「見てい給え、今に僕なんぞの新聞は華族新聞になるんだ」と、平気な顔をして云っている。

純一は著作の邪魔などをしてはならないと思つたので、そこそこに暇乞をして、富坂上の下宿屋を出た。そして帰り道に考えた。東京新聞が大村の云う小さいクリクを形づくって、不公平な批評をしていたのは、局外から見ても、余り感心出来なかつた。しかしとにかく主張があつた。特色があつた。推し測つて見るに、新聞社が路花を推戴したことがあるのではあるまいから、路花の思想が自然に全体の調子を支配する様になつて、あの特色は生じたのだろう。そこで社主が代つて、あの調子を社会を荼毒するものだと思つたとしよう。一般の読者を未丁年者として見る目で、そう認めたのは致し方がない。只驚くのは新聞をアカデミックにしてその弊を除こうとした事である。それでは反動に過ぎない。抑圧だと云つても好い。なぜ思想の自由を或る程度まで

許して置いて、そして矯正しようとはしないのだろう。路花の立場から見れば、ここには不平がなくてはならない。この不平は赫とした赤い怒りになって現れるか、そうでないなら、緑青のような皮肉になって現れねばならない。路花はどんな物を書くだろうか。いやいや。やはりいつもの何物に出逢っても屈折しないラジウム光線のような文章で、何もかも自己とは交渉のないように書いて、「ああ、わたくしの頭にはなんにもない」なんぞと云うだろう。今の文壇は、愚痴というものの外に、力の反応を見ることが出来ない程に萎弱しているのだが、これなら何等の反感をも起さずに済む筈だ。純一はこんな事を考えながら指が谷の町を歩いて帰った。

十四

十二月は残り少なくなった。前月の中頃から、四十日程の間雨が降ったのを記憶しない。純一は散歩もし飽きて、自然に内において本を読んでいる日が多くなる。二三日続くと、頭が重く、気分が悪くなって、食機が振わなくなる。そういう時には、三崎町の町屋が店をしまつて、板戸を卸す頃から、急に思い立って、人気のない上野の山を、薩摩下駄をがら附かせて歩いたこともある。

或るそういう晩の事であった。両大師の横を曲がって石燈籠の沢山並んでいる処を通って、ふと鶯坂の上に出た。丁度青森線の上りの終列車が丘の下を通る時であった。死せる都会のはずれに、吉原の電灯が幻のように、霧の海に漂っている。暫く立って眺めているうちに、公園で十

一時の鐘が鳴った。巡查が一人根岸から上がって来て、純一を角灯で照して見て、暫く立ち留ま
って見ていて、お霊屋の方へ行った。

純一の視線は根岸の人家の黒い屋根の上を辿っている。坂の両側の灌木と、お霊屋の背後の森
とに遮られて、根岸の大部分は見えないのである。

坂井夫人の家はどの辺だろうと、ふと思った。そして温い血の波が湧き立って、冷たくなつて
いる耳や鼻や、手足の尖までも漲り渡るような心持がした。

坂井夫人を尋ねてから、もう二十日ばかりになっている。純一は内に据わっていても、外を歩
いていても、おりおり空想がその人の倂を想い浮べさせることがある。これまで対象のない係恋
に襲われたことのあるに比べて見れば、この空想の戯れは度数も多く光彩も濃いので、純一はこ
れまで知らなかった苦痛を感ずるのである。

身の周囲を立ち籠めている霧が、領や袖や口から潜り込むかと思うような晩であるのに、純一
の肌は燃えている。恐ろしい「盲目なる策励」が理性の光を覆うて、純一にこんな事を思わせ
る。これから一走りにあの家へ行って、門のベルを鳴らして見たい。己がこの丘の上に立つてこ
う思っているように、あの奥さんもほの暗い電燈の下の白い *courte-pointe* の中で、己を思ってい
るのではあるまいか。

純一は忽ち肌の粟立つのを感じた。そしてひどく刹那の妄想を慙じた。

馬鹿な。己はどこまでおめでたい人間だろう。芝居で只一度逢って、只一度尋ねて行っただけ
の己ではないか。己が幾人かの中の一人に過ぎないということは、殆ど問うことを須たない。己

の方で遠慮をしていけば、向うからは一枚の葉書もよこさない。二十日ばかりの長い間、己は待たない、待ちたくないと思いつながら、意志に背いて便を待っていた。そしてそれが徒らな事であったではないか。純一は足元にあった小石を下駄で蹴飛ばした。石は灌木の間を穿って崖の下へ墜ちた。純一はステッキを揮って帰途に就いた。

*

*

*

純一が夜上野の山を歩いた翌日は、十二月二十二日であった。朝晴れていた空が、午後は薄曇りになっていく。読みさした雑誌を置いて、純一は締めた障子を見詰めてぼんやりしている。己はいつかラシイヌを読もうと思っていて、まだ少しも読まないと、ふと思つたのが縁になって、遮り留めようとしている人の傍が意地悪く念頭に浮かんで来る。「いつでも取り換えにいらっしやいよ。そう申して置きますから、わたくしがいなかったら、ずんずん上がって取り換えていらっしやって宜しゅうございます」と坂井の奥さんは云つた。その権利をこちらではまだ一度も用に立てないでいるのである。葉書でも来はずまいかと、待ちたくないと思つながら、心の底で待っていたが、あれは顛倒した考えであつたかも知れない。おとずれはこちらからすべきである。それをせぬ間、向うで控えているのは、あの奥さんのつつましい、Froleでないのを証拠立てているのではあるまいか、それともわざと縦って置いて、却って確実に、擒にしようとする手管かも知れない。若しそうなら、その手管がどうやら己の上に功を奏して来そうにも感ぜられる。遠慮深い人でないということは、もう経験していると云つても好い。どうしても器を傾けて飲ませず

に、渴したときの一滴に咽を濡させる手段に違いない。純一はこんな事を思っているうちに、空想は次第に放縦になって来るのである。

この時飛石を踏む静かな音がした。

「いらっしって」女の声である。

純一ははっと思った。ちゃんと机の前に据わっているのだから、誰に障子を開けられても好いのであるが、思っていた事を気が咎めて、慌てて居住まいを直さなくてはならないように感じた。「どなたです」と云って、内から障子を開けた。

にっこり笑って立っているのはお雪さんである。きょうは廂髪の末を、三組のお下げにしている。長い、たつぷりある髪を編まれるだけ編んで、その尖のところに例のクリイム色のリボンをつけている。黄いろい縞の銘撰の着物が、いつかじゆう着ていたのと、同じか違うか、純一には鑒別が出来ない。只羽織が真紫のお召であるので、いつかのととは違っているということが分かった。

「どうぞお掛けなさい。それとも寒いなら、お上がんなさいまし。お妹御さんが悪かったですってね。もうお直りになったのですか」純一はお雪さんに物を言うとなると、これまで苦しいのを勉めて言うような感じがしてならなかったのであるが、きょうはなんだかその感じが薄らいだようである。全く無くなってしまいはしないが、薄らいだだけは確かなようである。

「よく御存じね。婆あやがお話したのでしょう。腎臓の方はどうせ急には直らないのだということですから、きのう退院して参りましたの。もう十日も前から婆あやにも安にも逢わないもん

ですから、わたくしはあなたがどっかへ越しておしまいなさりはしないかと思つてよ」こう云いながら、徐かに縁側に腰を掛けた。暫く来なかつたので、少し遠慮をするらしく、いつかじゆうよりは行儀が好い。

「なぜそう思つたのです」

「なぜですか」と無意味に云つたが、暫くして「ただそう思つたの」と少しぞんざいに言い足した。

雲の絶間から、傾き掛かつた日がさして、四目垣の向うの檜の影を縁の上に落していたのが、雲が動いたので消えてしまつた。

「わたくしこんな事をしていると、あなた風を引いておしまいなさるわ」細い指をちよいと縁に衝いて、立ちそうにする。

「這入つてお締めなさい」

「好くつて」返事を待たずに千代田草履を脱ぎ棄てて這入つた。

障子はこの似つかわしい二人を狭い一間に押し籠めて、外界との縁を断つてしまつた。しかしこういう事はこれが始めではない。今までも度々あつて、その度毎に純一は胸を躍らせたのである。

「画があるでしょう。ちよいと拝見」

純一と並んで据わつて、机の上にあつた西洋雑誌をひっくり返して見ている。

お召の羽織の裾がしつとりした *Jet de la draperie* をなして、純一が素早く出して薦めた座布団

の上に委積たななわって、その上へたつぷり一握ひとつかみある濃い褐色のお下げが重げに垂れている。頬ほから、腮あきから、耳の下を頸くびに掛けて、障さわったら、指に軽い抗抵をなして窪くぼみそうな、轆ろくろ色の肌の見えているのと、ペエジを翻ひらす手の一つ一つの指の節に、抉えったような窪みの附いているのとの上を、純一の不安な目は往反わうはんしている。

風景画なんぞは、どんなに美しい色を出して製版してあっても、お雪さんの注意を惹ひかない。人物に対してでなくては興味を有せないのである。風景画の中の小さい点景人物を指して、「これはどうしてでなくてはどうしょう」などと問う。そんな風で純一は画解きをさせられている。

袖と袖と相触れる。何やらの化粧品化粧品の香に交まじって、健康な女の皮膚の匂におがする。どの画かを見て突然「まあ、綺麗だこと」と云って、仰山おんざんに体をゆすった拍子に、腰のあたりが衝突して、純一は鈍い、弾力のある抗抵を感じた。

それを感じるや否や、純一は無意識に、殆ど反射的に坐を起たって、大分遠くへ押し遣やられていた火鉢ひばちの傍そばへ行って、火箸ひしほを手にとって、「あ、火が消えそうになった、少しおこしましゅうね」と云った。

「わたくしそんなに寒かないわ」極きよくめて穏かな調子である。なぜ純一が坐を移したか、少しも感ぜないと見える。

「こんなに大きな帽子があるでしょうか」と云うのを、火をいじりながら覗のぞいて見れば、雑誌のしまいの方はたにある婦人服の広告であった。

「そんなのが流行はやりだそうです。こっちへ来ている女にも、もう大ぶ大きいのを被かったのがありま

すよ」

お雪さんは雑誌を見てしまった。そして両手で頰杖ほおづえを衝いて、無遠慮に純一の顔を見ながら云った。

「わたくしあなたにお目に掛かったら、いろんな事をお話ししなくてはならないと思つたのですが、どうしたんでしょう、みんな忘れてしまつてよ」

「病院のお話でしょう」

「ええ。それもあつてよ」病院の話が始まつた。お医者は一週間も二週間も先きの事を言っているのに、妹は這入つた日から、毎日内へ帰ることばかり云つていたのである。一日毎に新しく望を属しよくして、一日毎にその望が空そらしくなるのである。それが可哀そうでならなかつたと、お雪さんはさも深く感じたらしく話した。それから見舞に行つて帰りそうにすると泣くので、とうとう寐ね入るまでいたことやら、妹がなぜ直ぐに馴染なじんだかと不思議に思つた看護婦が、やはり長く附き合つて見たら、一番好い人であつたことやら、なんとか云う太つたお医者か廻診の時にお雪さんが居合わすと、きつと頼つべたを衝つつ衝ついたことやら、純一はいろいろな事を聞せられた。

話を聞きながら、純一はお雪さんの顔を見ている。譬たとえば微かすかな風が径尺けいしゃくの水盤の上を渡るように、この愛くるしい顔には、絶間なく小さい表情の波が立っている。お雪さんの遊びに来たことは、これまで何度だか知らないが、純一はいつもこの娘の顔を見るよりは、却つてこの娘に顔を見られていた。それがきょう始つて向うの顔をつくづく見ているのである。

そして純一はこう云うことに気が附いた。お雪さんは自分を見られることを意識しているとい

うことに気が附いた。それは当り前の事であるのに、純一の為めには、そう思った刹那に、大いなる発見をしたように感ぜられたのである。なぜかというに、この娘が人の見るに任す心持は、同時に人の為すに任す心持だと思つたからである。人の為すに任すと云つては、まだ十分でない、人の為すを待つ、人の為すを促すと云つても好きさうである。しかし我一步を進めたら、彼一步を迎えるだろうか。それとも一步を退くだろうか。それとも守勢を取つて踏み応えるであろうか。それは我には分からない。又多分彼にも分からないのであろう。とにかく彼には強い智識欲がある。それが彼をして待つような促すような態度に出でしむるのである。

純一はこう思うと同時に、この娘を或る破碎し易い物、こわれ物、危殆なる物として、これに保護を加えなくてはならないように感じた。今の自分の位置にいるものが自分でなかつたら、お雪さんの危いことは実に甚だしいと思つたのである。そしてお雪さんがこの間に這入つた時から、自分の身の内に漂つていた、不安なような、衝動的なような感じが、払い尽されたように消え失せてしまった。

火鉢の灰を掻きならしている純一が、こんな風に頓に感じた冷却は、不思議にもお雪さんに通じた。夢の中でする事が、抑制を受けない為めに、自在を得ているようなものである。そして素直な娘の事であるから、残惜しいという感じに継いで、すぐに諦めの感じが起る。

「またこんど遊びに来ましようね」何か悪い事でもしたのをあやまるように云つて、坐を立つた。

「ええ。お出なさいよ」純一は償わずに置く負債があるような心持をして、常よりは優しい声で

云つて、重たげに揺らぐお下げの後姿を見送っていた。

この日の夕方であった。純一は忙しげに支度をして初音町の家を出た。出る前にはなぜだか暫く鏡を見ていた。そして出る時手にラシイヌの文集を持っていた。

十五

純一が日記の断片

恥辱を語るベエジを日記に添えたくはない。しかし事實はどうもすることが出来ない。

己は部屋を出るとき、ラシイヌの一卷を手に取りながら、こんな事を思った。読もうと思う本を持つて散歩に出ることは、これまでも度々あった。今日はラシイヌを持つて出る。この本が外の本と違ふのは、あの坂井夫人の所へ行くことの出来る *possibilité* を己に与えるというだけの事である。行くと行かぬとの自由はまだ保留してあると思つた。

こんな考えは自ら欺くに近い。

実は余程前から或る希求に伴う不安の念が、次第に強くなつて来た。己は極力それを卻けようとした。しかし卻けても又来る。敵と対陣して小ぜりあいの絶えないようなものである。

大村はこの希求を抑制するのが、健康を害するものではないと云つた。害せないかも知れぬが、己は殆どその煩わしさに堪えなくなつた。そしてある時は、こんなうるさい生活は人間の *dignité* を傷けるものだと思つた。

大村は神経質の遺伝のあるものには、この抑制が出来なくて、それを無理に抑制すると病気になる云った。己はそれを思い出して、我神経系にそんな遺伝があるのかとさえ思った。しかしそんな筈はない。己の両親は健康であつたのが、流行病で一時に死んだのである。

己の自制力の一角を破壊したものは、久し振に尋ねて来たお雪さんである。

お雪さんと並んで据わっていたとき、自然が己に投げ掛けようとした諒の、頭の上近く閃くのが見えた。

お雪さんもあの諒を見たには違いない。しかしそれを遁れようとしたのは、己の方であつた。そして己は自分のそれを遁れようとするのを智なりとして、お雪さんを見下だしていた。

その時己は我自制力を讚美して、丁度それと同時に我自制力の一角が破壊せられるのに心附かずにいた。一たび繋がれては断ち難い、堅靱なる索を避けながら、己は縛せられても解き易い、脆弱なる索に対する、戒心を弛廃させた。

無智なる、可憐なるお雪さんは、この破壊この弛廃を敢てして自ら曉らないのである。

若しお雪さんが来なかつたら、己は部屋を出るとき、ラシイヌを持って出なかつたらう。

己はラシイヌを手を持って、当てもなく上野の山をあちこち歩き廻っているうちに、不安の念が次第に増長して来て、脈搏の急になるのを感じた。丁度酒の酔が循って来るようであつた。

公園の入口まで来て、何となく物騒がしい広小路の夕暮を見渡していたとき、己は熱を病んでいるように、気が遠くなつて、脚が体の重りに堪えないようになった。

何を思うともなしに引き返して、弁天へ降りる石段の上まで来て、又立ち留まつた。ベンチの

明いているのが一つあるので、それに腰を掛けて、ラシイヌを翻して見たが、もう大ぶ昏くて読めない。無意味に引つ繰り返して、題号なんその大きい活字を拾って、*Prædica* なんと題号を見て、ぼんやり考え込んでいた。

ふいと気が附いて見ると、石段の傍にある街燈に火が附いていた。形が妙に大きくて、不愉快な黄色に見える街燈であった。まさかあんな色の色硝子でもあるまい。こんど通る時好く見ようと思う。

人間の心理状態は可笑しなものである。己はあの明りを見て、根岸へ行こうと決心した。そして明りの附いたのと決心との間に、密接の關係でもあるように感じた。人間は遲疑しながら何かするときは、その行為の動機を有り合せの物に帰するものと見える。

根岸へ向いて歩き出してからは、己はぐんぐん歩いた。歩度は次第に急になった。そして見覚えのある生垣や門が見えるようになってからも、先方の思わくに気兼をして、歩度を緩めるような事はなかった。あの奥さんがどう迎えてくれるかとは思ったが、その迎えかたにこっちが困るような事があるうとは思わなかったのである。

門には表札の上の処に小さい電燈が附いていて、潜りの戸が押せば開くようになっていた。それを這入って、門口のベルを押したときは、さすがに胸が跳った。それは奥さんに気兼をする感じではなくて、シチュアションの感じであった。

いつか見た小間使の外にどんな奉公人がいるか知らないが、もう日が暮れているのだから、知らない顔のものが出て来はしないかと思った。しかしベルが鳴ると、直ぐにあの小間使が出た。

奥さんがしづえと呼んでいたっけ。代々の小間使の名かも知れない。おおかた表玄関のお客には、外の女中は出ないのだろう。

ベルが鳴ってから電氣を附けたと見えて、玄関の腋の櫛子の硝子にぱつと明りが映ったのであった。

己の顔を見て「おや」と云って、「一寸申し上げて参ります」と、急いで引き返して行った。黙って上がっても好いと云われたことはあるが、そうも出来ない。奥へ行つたかと思うと、直ぐに出て来て、「洋室は煖炉が焚いてございませぬから、こちらへ」と云って、赤い緒の上草履を揃えて出した。

廊下を二つ三つ曲がった。曲がり角に電氣が附いているきりで、どの部屋も真暗で、しんとしている。

しづえの軽い足音と己の重い足音とが反響をした。短い間ではあったが、夢を見ているような物語めいた感じがした。

突き当りに牡丹に孔雀をかけた、塗縁の杉戸がある。上草履を脱いで這入って見ると内外が障子で、内の障子から明りがさしている。国の内に昔お代官の泊つた座敷というのがあって、あれがあんな風に出て来た。なんとというものだから知らない。仮りに書院造りの colonnade と名づけて置く。恆先生は大ぶお大名染みた事が好きであったと思う。

しづえが腰を屈めて、内の障子を一枚開けた。この間には微かな電燈が只一つ附けてあった。何も掛けてない、大きい衣桁が一つ置いてあるのが目に留まった。しづえは向うの唐紙の際へ

行つて、こん度は膝を衝いて、「いらっしやいました」と云つて、少し間を置いて唐紙を開けた。

己はとうとう奥さんに逢つた。この第三の会見は、己が幾度か実現させまいと思つて、未来へ押し遣るようになつていたのであつたが、とうとう実現させてしまつたのである。しかも自分が主動者になつて。

「どうぞお這入り下さいまし、大変お久し振でございますね」と奥さんは云つて、退紅色の粗形の布団を掛けた置炬燵を脇へ押し遣つて、桐の円火鉢の火を掻き起して、座敷の真ん中に鋪いてある、お嬢様の据わりそうな、紫縮緬の座布団の前に出した。炬燵の傍には天外の長者星が開けて伏せてあつた。

己は奥さんの態度に意外な真面目と意外な落着きとを感じた。只例の謎の目のうちに、微かな笑の影がほのめいているだけであつた。奥さんがどんな態度で己に對するだろうという、はつきりした想像を画くことは、己には出来なかつた。しかし目前の態度が意外だということだけは直ぐに感ぜられた。そして一種の物足らぬような情と、萌芽のような反抗心が、己の意識の底に起つた。己が奥さんを「敵」として視る最初は、この瞬間であつたかと思う。

奥さんは人に逢うのを予期してでもいたかと思われるように、束髪の髪の毛一筋乱れていなかった。こん度は己も奥さんの着物をはっきり記憶している。羽織はついぞ見たことのない、黄の勝った緑いろの縮緬であつた。綿入はお召縮緬だろう。明るい褐色に、細かい黒い格子があつた。帯は銀色に鈍く光る、粗い唐草のような模様であつた。薄桃色の帯揚げが、際立つて艶に若

若しく見えた。

己は良心の軽い呵責を受けながら、とうとう読んで見ずにしまったラシイヌの一巻を返した。奥さんは見遣りもせず手にも取らずに、「お帰りの時、どれでも外のをお持ちなさいまし」と云った。

前からあったのと同じ桐の火鉢が出る。茶が出る。菓子が出る。しづえは静かに這入って静かに立って行く。一間のうちはしんとしていて、話が絶えると、衝く息の音が聞える程である。二重に鎖された戸の外には風の音もしないで、汽車が汽笛を鳴らして過ぎる時だけ、実世間の消息が通りように思われるのである。

奥さんは己の返した一つの火鉢を顧みないで、指の尖の驚くべく細い、透き徹るような左手を、退紅色摸様の炬燵布団の上に載せて、稍神経質らしく指を払げたりすぼめたりしながら、目を大きく睜って己の顔をじっと見て、「お煙草を上がりませんの」だの、「この頃あなた何をしていらっしって」だのというような、無意味な問を発する。己も勉めて無意味な返事をする。己は何か言いながら、覚えず奥さんの顔とお雪さんの顔とを較べて見た。

まあ、なんとという違いようだろう。お雪さんの、血の急流が毛細管の中を奔っているような、ふっくりしてすべっこくない顔には、刹那も表情の変化の絶える隙がない。埒もない対話をしてゐるのに、一一の詞に應じて、一一の表情筋の顫動が現れる。Natifな小曲に sensibleな伴奏がある。

それに較べて見ると、青み掛かって白い、希臘風に正しいとでも云いたいような奥さんの顔は、

殆ど masque である。仮面である。表情の影を強いて尋ねる触角は尋ね尋ねて、いつでも大きい濃い褐色の瞳に達してそこに止まる。この奥にばかり何物かがある。これがあるので、奥さんの顔には今にも雷雨が来ようかという夏の空の、電気に飽いた重くろしきがある。鷺鳥や猛獣の物をねらう目だと云いたいが、そんなに獐猛なものではない。Nymphe というものが熱帯の海にいたら、こんな目をしているだろうか。これがなかったら奥さんの顔を mine de mort と云っても好からう。美しい死人の顔色と云っても好からう。

そういう感じをいよいよ強めるのは、この目にだけある唯一の表情が談話と合一しない事である。口は口の詞を語って、目は目の詞を語る。謎の目を一層謎ならしめて、その持主を Sphinx にするところはここにある。

或る神学者が dogma は詞だと云うと、或る他の神学者が詞は詞だが、「強いられたる」詞だと云ったと聞いたが、奥さんの目の謎に己の与えた解釈も強いられたる解釈である。

己がこの日記を今の形のままでか、又はその形を改めてか、世に公にする時が来るだろうか。それはまだ解釈せられない疑問である。仮に他日これを読む人があるとして、己はここでその読む人に言う。「読者よ。僕は君に或る不可思議な告白をせねばならない。そしてその告白の端緒はこれから開ける」

奥さんの目の謎は伝染する。その謎の詞に己の目も応答しなくてはならなくなる。

夜の静けさと闇とに飽いている上野の森を背に負うた、根岸の家の一間で、電燈は軟い明りを湛え、火鉢の火が被った白い灰の下から、羅を漏る肌の光のように、優しい温まりを送る時、奥

さんと己とは、汽車の座席やホテルの食卓を偶然共にした旅人と旅人とが語り交すような対話をしている。万人に公開しても好いような対話である。初度の会見の折の出来事を閲して来た己が、決して予期していなかった対話である。

それと同時に奥さんはその口にする詞の一語一語を目の詞で打消して、「あなたとわたしとの間では、そんな事はどうでも好うございませぬねえ」とでもいうように ironiquement に打消して全く別様な話をしている。Une persuasion puissante et chaleureuse である。そして己の目は無慙に、抗抵なくこの話に引き入れられて、同じ詞を語る。

席と席とは二三尺を隔てて、己の手を翳しているのと、奥さんに閉却せられているのと、二つの火鉢が中に置いてある。そして目は吸引し、霊は回抱する。一団の火焰が二人を裹んでしま

う。
己はこういふ時間の非常に長いのを感じた。その時間は苦痛の時間である。そして或る瞬間に、今あからさまに覚える苦痛を、この奥さんを知ってからは、意識の下で絶間なく、微に覚えているのであったという発見が、稲妻のように、地獄の焰と烟とに巻かれている、己の意識を掠めて過ぎた。

この間に苦痛は次第に奥さんを敵として見させるようになった。時間が延びて行くに連れて、この感じが段々長じて来た。若し己が強烈な意志を持っていたならば、この時席を蹴起つて帰つただろう。そして奥さんの白い滑かな頬を批たずに帰つたのを遺憾としただろう。

突然なんの著明な動機もなく、なんの過渡もなしに。(この下日記の紙一枚引き裂きあり)

その時己は奥さんの目の中の微笑が、凱歌を奏するような笑に変じているのを見た。そして一たび断えた無意味な、余所余所しい對話が又続けられた。奥さんを敵とする己の感じは愈々強まった。奥さんは云った。

「わたくし二十七日に立って、箱根の福住へ参りますの。一人で参っておりますからお暇ならいらっしゃいませ」

「さようですね。僕は少し遣って見ようかと思つてゐる為事がありますから、どうなりますか分りません。もう大変遅くなりました」

「でもお暇がございましたらね」

奥さんが、傍に這つてゐる、絹糸を巻いた導線の尖の控鈕を押すと、遠くにベルの鳴る音がした。廊下の足音が暫くの間はつきり聞えていてから、次の間まで来たしづえの御用を伺う声がした。呼ばなければ来ないように訓練してあるのだなど、己は思った。

しづえは己を書棚のある洋室へ案内するのである。己は迂濶にも、借りてゐる一卷を返すことに就いてはいろいろ考えていたが、跡を借るということに就いてはちつとも考えていなかった。己は思案する暇もなく、口実の書物を取り換えに座を起つた。打勝たれた人の附甲斐ない感じが、己の胸を刺した。

先きに立って這入つて、電燈を点じてくれたしづえと一しよに、己は洋室にいたとき、意識の海がまだ波立っていた為めか、お雪さんと一しよにいるより、一層強い窘迫と興奮とを感じた。しかしこの娘はフランスの小説や脚本にある部屋附きの女中とは違つて、おとなしく、つまし

やかに、入口の傍に立ち留まって、両手の指を緋鹿子の帯上げの上の処で、からみ合わせていた。こういう時に恐るべき微笑もせずに、極めて真面目に。

己は選びもせずに、ラシイヌの外の一卷を抜き出して、持て来た一卷を代りに入れて置いて、しづえと一しよに洋室を出た。

己を悩ました質の、ラシイヌの一卷は依然として己の手の中に残ったのである。そして又己を悩まさなくては済まないだろう。

奥さんの部屋へ、暇乞に覗くと、奥さんは起って送りに出た。上草履を直したしづえは、廊下の曲り角で姿の見えなくなる程距離を置いて、跡から附いて来た。

「お暇があったら箱根へいらっしやいましたね」と、静かな緩い語気で、奥さんは玄関に立っていて繰り返した。

「ええ」と云って、己は奥さんの姿に最後の一瞥を送った。

髪の一筋も乱れていない。着物の襟をきちんと正して立っている、しなやかな姿が、又端なく己の反感を促した。敵は己を箱根へ誘致せずには置かないかなと、己は心に思いながら右の手に持っていた帽を被って出た。

空は青く晴れて、低い処を濃い霧の立ち籠めている根岸の小道を歩きながら、己は坂井夫人の人と為りを思った。その時己の記憶の表面へ、力強く他の写象を排して浮き出して来たのは、ベルジック文壇の著者 Lemonnier の書いた *Aude* が事であった。あの読んだ時に、女というものの一面を余りに誇張して書いたらしく感じたオオドのような女も、坂井夫人が有る以上は、決して

無いとは云われない。

恥辱のペエジはここに尽きる。

己は拙い小説のような日記を書いた。

十六

十二月二十五日になった。大抵腹を立てるような事はあるまいと、純一の推測していた瀬戸が、一昨日谷中の借家へにこにこして来て、今夜亀清楼である同県人の忘年会に出ると勧めたのである。純一は旧主人の高繩の邸へ名刺だけは出して置いたが、余り同県人の交際を求めようとはしないので、最初断ろうとした。しかし瀬戸が勧めて已まない。会に出る人のうちに、いろいろな階級、いろいろな職業の人があるのだから、何か書こうとしている純一が為めには、面白い観察をすることが出来るに違いないと云うのである。純一も別に明日何をしようという用事が極まってもいなかったので、とうとう会釈負けをってしまった。

丁度瀬戸のいるところへ、植長の上さんのお安というのが、亭主の誕生日なので拵えたと云って赤飯を重箱に入れて、煮染を添えて持って来た。何も馳走がなかったのに、丁度好いというので、純一は茶碗や皿を持って来て貰うことにして、瀬戸に出すと、上さんは茶を入れてくれた。黒糴子の領の掛かったねんねこ絆纏を着て、頭を櫛巻にした安の姿を、瀬戸は無遠慮に眺めて、「こんなお上さんの世話を焼いてくれる内があるなら、僕なんぞも借りたいものだ」と云った。

「田舎者で一向届きませんが、母がまめに働くので、小泉さんのお世話は好くいたします」と謙遜する。「なに、届かないものか。紺足袋を穿いているところを見ても、稼人だということは分かる」と云う。「わたくし共の田舎では、女でも皆紺足袋を穿きます」と説明する。その田舎というのが不思議だ。お上さんのような、意気な女が田舎者である筈がないと云う。とうとう安が故郷は銚子だと打明けた。段々聞いて見ると、瀬戸が写生旅行に行ったとき、安の里の町内に泊ったことがあったそうだ。いろいろ銚子の話をして、安が帰った跡で、瀬戸が狡狴らしい顔をして、「明日柳橋へ行つたつて、僕の材料はないが、君の所には惜しい材料がある」と云った。どういうわけかと問うと、芸者なんぞは、お白いや頬紅の *Opium* を研究するには好いかも知れないが、君の家主のお上さんのような生地きじの女はあの仲間にはないと云った。それから芸者に美人があるとか無いとかいう議論になった。その議論の結果は芸者に美人がないではないが、皆持えたような表情をしていて、芸者という *Type* を研究する粉本にはなつても、女という自然をあの中に見出すことは出来ないということになった。この「女という自然」は随に安に於いて見出すことが出来る。瀬戸に注意せられて、純一も首肯せざるを得なかつた。話し草臥れて瀬戸が帰つた。純一は一人になつてこんな事を思つた。一体己には *esprit non préoccupé* が關つてゐる。安という女が瀬戸の *frivole* な目で発見せられるまで、己の目には唯家主の概たがひというものが写つてゐた。人妻が写つてゐた。それであの義務心の強そうな、好んで何物をも犠牲にするような性格や、その性格を現わしている、忠実な、甲斐甲斐しい一般現象に対しては同情を有してゐたが、どんな顔をしてゐるといふことにさえも、ろくろく気が附かなかつた。瀬戸に注意せられてから、

あの顔を好く思い浮べて見ると、田舎生れの小間使上がりで、植木屋の女房になつてゐる、あの安がどこかに美人の骨相を持つてゐる。色艶は悪い。身綺麗にはしていても髪容に構わない。それなのにあの円顔の目と口とには、複製図で見た Monna Lisa の媚がある。芸者やなんぞの拵えた表情でない表情を、安は有しているに違いない。思つて見れば、抽象的な議論程容易なものはない。瀬戸でさえあんな議論をするが、明治時代の民間の女と明治時代の芸者とを、簡単な、しかも典型的な表情や姿勢で、現わしている画は少いようだ。明治時代はまだ一人の Constantin Guys を生まないのである。自分も因襲の束縛を受けない目だけをでも持ちたいものだ。今のような事では、芸術家として世に立つ資格がないと、純一は反省した。五時頃に瀬戸が誘いに来た。「きょうはお安さんがはんべつていないじゃないか」と、厭な笑顔をして云う。

「めつたに来やしない」

純一は生帳面な、気の利かない返事をしながら、若し瀬戸の来た時に、お雪さんでもいたら、どんなに冷かされるか、知れたものではないと、気味悪く思った。中沢の奥さんが筆筒を買つて遣つて、内から嫁入をさせたとき、奥さんに美しく化粧をして貰つて、別な人のようになつて出て来て、いつも友達のようにしていたのが、叮嚀に手を衝いて暇乞をすると、暫く見ていたお雪さんが、おいおい泣き出して皆を困らせたという話や、それから中沢家で、安の事を今でもお姫の安と云つてゐるといふ話が記憶に浮き出して来た。

支度をして待つていた純一は、瀬戸と一しょに出て、上野公園の冬木立の間を抜けて、広小路で電車に乗つた。

須田町で九段両国の電車に乗り換えると、不格好な外套がいとうを被きて、この頃見馴みなれない山高帽たかかぶを被かった、酒飲さけのみみらしい老人らうじんの、腰こしを掛けている前まへへ行いって、瀬戸せとがお辞儀じぎをして、「これからお出掛でかけですか、わたくしも参まゐるところで」と云いっている。

瀬戸せとは純一じゅんいちを直ただぐにその老人らうじんに紹介しょうかいした。老人らうじんはY県出身けんしゅしんの漢学者くわんがくしやで、高山先生こうさんせんせいという人ひとであった。美術学校びじゆつがくがうでは、岡倉時代おかくらじだいからいろいろな学者がくしやに、科外講義かがいこうぎに出いて貰もらって、講義録こうぎろくを出版しゅつぱんしている。高山先生こうさんせんせいもその講義こうぎに來きたとき、同県人どうけんじんの生徒せいとだといいうので、瀬戸せとは近附きんぷききになつたのである。

高山先生こうさんせんせいは宮内省みやうちしやうに勤とめている。漢学者くわんがくしやで伝典でんてんも精くわしい。鄧完白風とうかんぱくふうの篆書せんしよを書かく。漢文くわんぶんが出來きて、Y県人けんじんの碑銘めいめいを多おほく撰えらんでいる。純一じゅんいちも名なは聞きいていたのである。

暫しばらくくして電車でんしゃが透とおいたので、純一じゅんいちは瀬戸せとと並ならんで腰こしを掛かけた。

瀬戸せとは純一じゅんいちに小聲こせいで云いった。「あの先生せんせいはあれでなかななか馴なれな先生せんせいだよ。漢学くわんがくはしていても、通人つうじんなのだからね」

純一じゅんいちは先生せんせいが幅広あしひろな、夷三郎えいざぶろうめいた顔かほをして、女おんなにふざける有様ありさまを想像さうぞうして笑わらいたくなるのを我慢がまんして、澄あました顔かほをしていた。

両国りやうごくの橋手前はしでまへで電車でんしゃを下くだりて、左ひだりへ曲まって、柳橋やなぎはしを渡わたって、高山先生こうさんせんせいの跡あとに附ついて亀清かめせいに這入はいった。

先生せんせいがのろのろ上うがって行いくと、女中にようぢゆうが手てを衝ついて、「曾根そねさんでいらっしやいますか」と云いった。

「うん」と云って、女中に引かれて梯子を登る先生の跡を、瀬戸が附いて行くので、純一も跡から行った。曾根というのは、書肆博聞社の記者兼番頭さんをしている男で、忘年会の幹事だと、瀬戸が教えてくれた。この男の名も、純一は雑誌で見て知っていた。

登って取っ附きの座敷が待合になっていて、もう大勢の人が集まっていた。

外はまだ明るいのに、座敷には電燈が附いている。一方の障子に嵌めた硝子越しに、隅田川が見える。斜に見える両国橋の上を電車が通っている。純一は這入ると直ぐ、座布団の明いているのを見附けて据わって、鼠掛かった乳色の夕べの空気を透かして、ぼつぼつ火の付き始める向河岸を眺めている。

一番盛んに見える、この座敷の一群は、真中に据えた棋盤の周囲に形づくられている。当局者という、当世では少々恐ろしいものに聞えるが、ここで局に当っている老人と若者とは、どちらも極度のん気な容貌をしている。純一は象棋も差さず棋も打たないので、棋を打っている人を見ると、単に時間を打ち殺す人としか思わない。そう云えばと云って、何も時間が或る事件に利用せられなくてはならないと云う程の窮屈な *utilitaire* になつていなくてもないが、象棋や *domino* のように、短時間に勝負の付くものと違って、この棋というものが社交的遊戯になつている間は、危険なる思想が蔓延するなどという虞はあるまいと、若い癖に生利な皮肉を考えている。それも打っている人はまだ好い。それを幾重にも取り巻いて見物している連中に至っては、実に気が知れない。

この群の隣に小さい群が出来ていて、その中心になつているのは、さっき電車で初めて逢った

高山先生である。先生は両手を火鉢に翳しながら、何やら大声で話している。純一はしよさいなさにこれに耳を傾けた。聞けば狸の話をしている。

「そりゃあわたし共のいた時の聖堂なんというものは、今の大学の寄宿舎なんぞとは違って、風雅なものだったよ。狸が出たからね。我々は廊下続きで、障子を立て切った部屋を当てがわれている。そうすると夜なか過ぎになって、廊下に小さい足音がする。人間の足音ではない。それが一つ一つ部屋を覗いて歩くのだ。起きていると通り過ぎてしまふ。寐ているなら行燈の油を嘗めようというのだね。だから行燈は自分で掃除しなくても好い。廊下に出してさえ置けば、狸奴が綺麗に舐めてくれる。それは至極結構だが、聖堂には狸が出るという評判が立ったもんだから、狸の贖物が出来たね。夏なんぞは熱くて寐られないと、紙鳶糸に杉の葉を付けて、そいつを持って塀の上に乗って涼んでいる。下を通る奴は災難だ。頭や頬つべたをちよちよ杉の葉でくすぐられる。そら、狸だというので逃げ出す。大小を挿した奴は、刀の反りを打って空を睨んで通る。随分悪い徒らをしたものさね。しかしその頃の書生だって、そんな子供のするような事ばかりしていたかというと、そうではない。塀を乗り越して出て、夜の明けるまでに、塀を乗り越して帰ったこともある。人間に論語さえ読ませて置けばおとなしくしていると思うと大違いさ」

狸の話が飛んだ事になってしまった。純一は驚いて聞いていた。

そこへ瀬戸が来て、「君会費を出したか」と云うので、純一はやっとな気が附いて、瀬戸に幹事の所へ連れて行って貰った。

曾根という人は如才なさそうな小男である。「学生諸君は一元です」と云う。

純一は一寸考えて、「学生でなければ幾らですか」と云った。

曾根は余計な事を問う奴だと思つうらしい様子であつたが、それでも慇懃に「五円ですが」と答えた。

「そうですか」と云つて、純一が五円札を一枚出すのを見て、背後に立っていた瀬戸が、「馬鹿にきばるな」と冷かした。曾根は真面目な顔をして、名を問うて帳面に附けた。

そのうち人が段々来て、曾根の持っていた帳面の連名の上に大抵丸印が附いた。

最後に某大臣が見えたのを合図に、隣の間との界の襖が開かれた。

何畳敷か知らぬが、ひどく広い座敷である。廊下からの入口の二間だけを明けて座布団が四角に並べてある。その間々に火鉢が配つてある。向うの床の間のある座布団や火鉢は大ぶ小さく見える程である。

曾根が第一に大臣を床の間の前へ案内しようとすると、大臣は自分と同じフロックコートを着た、まだ三十位の男を促して、一しよに席を立たせた。只大臣の服には、控鈕の孔に略綬が挿んである。その男のにはそれが無い。後に聞けば、高繩の侯爵家の家扶が名代に出席したのださうである。

座席に札なぞは附けてないので、方々で席の譲り合いが始まる。笑いながら押し合つたり揉み合つたりしているうちに、謙讓している男が、引き摩られて上座に据えられるものもある。なかなかの騒動である。

ようよりの事で席の極まるのを見ていると、中程より下に分科大学の襟章を附けたものもある。

種々な学校の制服らしいのを着たのもある。純一や瀬戸と同じような小倉袴こくらばかまのものもある。所謂学生諸君が六七人いるのである。

こんな時には純一なんぞは気楽なもので、一番跡から附いて出て、末席ぼつせきと思った所に腰を卸すと、そこは幹事の席ですと云って、曾根が隣へ押し遣やった。

ずっと見渡すに、上流の人は割合に少いらしい。純一は曾根に問うて見た。

「今晚出席しているのは、国から東京に出ているものの小部分に過ぎないようですが、一体どんな人がこの会を催したのですか」

「小部分ですとも。素もとと少壮官吏と云ったような人だけで催すことになっていたのが、人の出入があるたびに、色々交って来たのですよ。今では新俳優もいます」

こんな話をしてるうちに、女中が膳を運んで来始めた。

土地は柳橋、家は亀清である。純一は無論芸者が来ると思った。それに瀬戸がきのうの話の様子では来る例になつてゐるらしかつた。それに膳を運ぶのが女中であるのは、どうした事かと思つた。

酒が出た。幹事が挨拶あいさつをした。その中に侯爵家から酒を寄附せられたという報告などがあつた。それからY県出身の元老大官が多い中に、某大臣が特に後進を愛してこういう会に臨まれたのを感じるといふような詞もあつた。

大臣は大きな赤い顔をして酒をちびりちびり飲んでゐる。純一は遠くからこの人の巖乘がんじやうな体を見て、なる程世間の風波に堪たえるには、あんな体でなくてはなるまいと思つた。折々近処の人と

話をする。話をする度にきつと微笑する。これも世に処し人を遇する習慣であらう。しかし話をし止めると、眉間に深い皺が寄る。既往に於ける幾多の不如意が刻み附けた *écriture runique* であらう。

吸物が吸ってしまわれて、刺身が荒された頃、所々から床の間の前へお杯頂戴に出掛けるものがある。所々で知人と知人とが固まり合う。誰やらが誰やらに紹介して貰う。そこにもここにも談話が湧く。忽ちどこかで、「芸者はどうしたのだ」と叫んだものがある。誰かが笑う。誰かが賛成と呼ぶ。誰かがしつと云う。

この時純一は、自分の直ぐ傍で、幹事を取り巻いて盛んに議論をしているものがあるのに気が附いた。聞けば、芸者を呼ぶ呼ばぬの問題に就いて論じているのである。

暫く聞いているうちに、驚く可し、宴会に芸者がいる、宴会に芸者がいらぬと争っている、その中へ謂わば *tertium comparationis* として例の学生諸君が引き出されているのである。宴会に芸者がいらぬのではない。学生諸君のいる宴会だから、芸者のいない方が好いというところに、*Antigéisme* の側は帰着するらしい。それから一体誰がそんな事を云い出したかということになった。

この声高に、しかも双方から *ironie* の調子を以て遣られている議論を、おとなしく真面目に引き受けていた曾根幹事は、已むことを得ず、こういう事を打明けた。こん年度の忘年会の計画をしているうちに、或る日教育会の職員になつてゐる塩田に逢つた。塩田の云うには、あの会は学生も出ることだから、芸者を呼ばないが好いと云うことであつた。それから先輩二三人に相談した

ところが、異議がないので、芸者なしということになったそうである。

「偽善だよ」と、聞いていた一人が云った。「先輩だって、そんな議論を持ち出されたとき、己は芸者が呼んで貰いたいと云うわけには行かない。議論を持ち出したものの偽善が、先輩を余儀なくして偽善をさせたのだ」

「それは穿^{うが}つて云えばそんなものかも知れないが、あらゆる美德を偽善にしまつても困るね」と、今一人が云った。

「美德なものか。芸者が心^{しん}から厭^{いや}なのなら、美德かも知れない。又そうでなくても、好きな芸者の誘惑に真面目に打勝とうとしているのなら、それも美德かも知れない。学生のいないところで呼ぶ芸者を、いるところで呼ばないなんて、そんな美德はないよ」

「しかし世間というものはそうしたもので、それを美德としなくてはならないのではあるまいか」

「これはけしからん。それではまるで偽善の世界になってしまふね」

議論の火の手は又熾^{さか}んになる。純一は面白がつて聞いている。熾んにはなる。しかしそれは花火^{せうこう}燄香が熾んに燃えるようなものである。なぜというに、この言い争っている一群^{むねぐら}の中に、芸者が真に厭だとか、下だらないと思つていらしいものは一人もない。いずれも自分の好むところを暴露しようか、暴露すまいか、どの位まで暴露しようかなどという心持でしゃべつてゐるに過ぎない。そこで偽善には相違ない。そんなら偽善呼ばわりをしてゐる男はどうかというに、これも自分が真の善というものを持つてゐるので、偽善を排斥するといふのでもなんでもない。暴

露主義である。浅薄な、随したがって価値のない Cynismeシニスムであると、純一は思っている。

とにかく塩田君を呼んで来ようじゃないかという事になった。曾根は暫く方々見廻していたが、とうとう大臣の前に据わって辞儀をしている塩田を見附けて、連れに行つた。

塩田という名も、新聞や雑誌に度々たびたび出たことがあるので、純一は知っている。どんな人かと思つて、曾根の連れて来るのを待っていると、想像したとはまるで違つた男が来た。新しい道徳といふものに、頼るべきものがない以上は、古い道徳に頼らなくてはならない、古に復るが即ち醒せい覚であると思つてゐる人だから、容貌も道学先生らしく窮屈きうくつに出来ていて、それに幾分か世と忤こつてゐる、misanthropeミザントロフらしいところがありそうに思つたのに、引つ張られて来た塩田は、やはり曾根と同じような、番頭らしい男である。曾根は小男なのに、塩田は背が高い。曾根は細面ほそおもてで、尖とがつたような顔をしているのに、塩田は下膨れの顔で、濃い頬髯ほおひげを剃つた迹あとが青い。しかしどちらも如才なさそうな様子をして、目にひどく融通の利きそうな ironiqueイロニツクな閃ひらめきを持っている。「こんな事を言わなくては、世間が渡られない。それでお互にこんな事を言っている。実際はそうばかりは行かない。それもお互に知っている」とでも云うような表情が、この男の断えず忙しそりに動いている目の中に現れているのである。

「芸者かね。何も僕が絶待的に拒絶したわけじゃあないのです。学生諸君も来られる席であつて見れば、そんなものは呼ばない方が穩当えんたうだらうと云つたのですよ」塩田は最初から讓歩し掛かっている。

「そんなら君の、その不穩当だという感じを少し辛抱して貰えば好いのだ」と、偽善嫌いの男が

露骨に出た。

相談は直ぐに纏まった。塩田は費用をどうするかと云い出して、一頓挫を来たしそうであったが、会費が余り窮屈には見積ってないところへ、侯爵家の寄附があったから、その心配はないと云って、曾根は席を起った。

四五人を隔てて据わっていた瀬戸が、つと純一の前に来た。そして小声で云った。

「僕のような学生という奴は随分侮辱せられるね。さっきからの議論を聞いただろう」

純一が黙って微笑んでいると、瀬戸は「君は学生ではないのだが」と言い足した。

「もう冷かすのはよし給え。知らない人ばかりの宴会だから、恩典に浴したくなかったのだ。僕はこの会へ来たなら、国の詞でも聞かれるかと思つたら、皆東京子になってしまっているね」

「そうばかりでもないよ。大臣の近所へ行って聞いて見給え。ござりまするのぎに、アクセントのあるなんぞが沢山聞かれるから」

「まあ、どうやらこうやら柳橋の芸者というものだけは、近くで拝見が出来そうだ」

「なに。今頃出し抜に掛けたって、ろくな芸者がいるものか。よくよくのお茶碾ぎでなくては」
「そういうものかね」

こんな話をしている時、曾根が座敷の真中に立って、大声でこう云った。

「諸君。大臣閣下は外に今一つ宴会がおりなさるそうで、お先きへお立ちになりました。諸君に宜しく申してくれと云うことであります。どうぞ跡の諸君は御ゆっくりなさる様に願います。只今別品が参ります」

所々に拍手するものがある。見れば床の間の前の真中の席は空虚になっていた。殆ど同時に芸者が五六人這入って来た。

十七

席はもう大分乱れている。所々に小さい圈を作つて話をしてるかと思えば、空虚な坐布団も間々に出来ている。芸者達は暫く酌をしていたが、何か囁き合つて一度に立つてこん度は三味線を持つて出た。そして入口のあたりで、床の間に併行した線の上に四人が一列に並んで、弾いたり歌つたりすると、二人はその前に立つて踊つた。そうぞうしかつた話声があらかた歇んだ。中にはひどく真面目になつて踊を見ているものもある。

まだ純一の前を起たずに、背を円くして胡坐を搔いて、不精らしく紙巻煙草を飲んでいた瀬戸が、「長歌の老松おいらまつというのだ」と、教育的説明をして、暫くして又こう云つた。

「見給え。あのこつちから見て右の方で踊っている芸者なんぞは、お茶碾ちまひき仲間にしては別品だね」

「僕なんぞはどうせ上手か下手か分からないのだから、踊はお酌の方が綺麗で好かろうと思う。なせきょうはお酌が来ないのだから」

「そうさね。明いたのがいなかったのだから」

こう云つて、瀬戸はついと起つて、どこかへ行ってしまった。純一は自分の右も左も皆空席に

なっているのに気が附いて、なんだか居心が悪くなった。そこで電車で逢って一しょに来た、あの高山先生の処へでも行って見ようかと、ふと思ひ附いて、先生の顔が見えたように思った、床の間の左の、違棚のあたりを見ると、先生は相変らず何やら盛んに話している。自分の隣にいた曾根も先生の前へ行っている。純一は丁度好いと思つて、曾根の背後の方へ行つて据わつて、高山先生の話の話を聞いた。先生はこんな事を言っている。

「秦淮には驚いたね。さようさ。幅が広い処で六間もあろうか。まあ、六間幅の溝だね。その水のきたないことおびたらしい。それから見ると、西湖の方はとにかく湖水らしい。好い景色だと云つて好い処もある。同じ湖水でも、洞庭湖は駄目だ。冬往つて見たからかも知れないが、洲ばかりあつて一向湖水らしくない」

先生の支那に行かれた時の話と見える。先生は純一の目の自分の顔に注がれているのに気が附いて、「失礼ですが、持ち合せていますから」と云つて、杯を差した。それを受けると、横の方から赤い襦袢の袖の絡んだ白い手がひょいと出て、酌をした。

その手の主を見れば、さつき踊っているのを、瀬戸が別品だと云つて褒めた女であった。

純一は先生に返杯をして、支那の芝居の話やら、西瓜の核をお茶受けに出す話やらを跡に聞き流して、自分の席に帰つた。両隣共依然として空席になっている。純一はぼんやりして、あたりを見廻している。

同じ列の曾根の空席を隔てた先きに、やはり官吏らしい、四十恰好の、洋服の控鈕の孔から時計の金鎖を垂らしている男が、さつき三味線を弾いていた、更けた芸者を相手に、頻りに話して

いる。小さい銀杏返しを結って、黒縷子の帯を締めている中婆あさんである。相手にとは云つても、客が芸者を相手にしている積りでいるだけで、芸者は些もこの客を相手にしてはいない。客は芸者を擲掄ちやくかっている積りで、徹頭徹尾芸者に擲掄ちやくかわれている。客を子供扱いにすると云おうか。そうでもない。無智な子供を大人が扱うには、多少いたわる情がある。この老妓は *Mainten-honne* に侮辱を客に加えて、その悪意を包み隠すだけの抑制をも自己の上に加えていないのである。客は自己の無智に乗ぜられていながら、少しもそれを曉さとらずに、薄い笑談の衣を掛けた、若い皮肉を浴せられて、無邪気に笑い興じている。

純一は暫く聞いていて、非常に不快に感じた。馬鹿にせられている四十男は、気の毒がつて遣る程の価値はない。それに対しては、純一は全然 *indifferent* である。しかし老妓は憎い。

芸者は残忍な動物である。これが純一の最初に芸者というものに下した解釈であった。突然会話の続きを断つて、この *Atropos* は席を立った。

その時、老妓の席を立つのを待っていたかと思われるように、入り代つて来て据わった島田は、例の別品である。手には徳利を持っている。

「あなた、お熱いところを」と、徳利を金鎖の親爺の前へ、つと差し出した。

親爺は酒を注がせながら、女の顔をうるさく見て、「お前の名はなんと云うのだい」と問う。

「おちゃら」と返事をしたが、その返事には愛敬笑も伴っていない。そんならと云つて、さっきの婆あさんのように、人を馬鹿にしたと云う調子でもない。おちゃらの顔の気象は純然たる *Calme* が支配している。無風である。

純一は横からこの女を見ている。極若い。この間までお酌という雛でいたのが、ようようdrugに
なつたのであろう。細面の頬にも鼻にも、天然らしい一抹の薄紅が漲っている。涼しい目の瞳に
横から見れば緑色の反射がある。着物は落ち着いた色の、上着と下着とが濃淡を殊にしていると
云う事だけ、純一が観察した。藤鼠、色変りの織縮緬に、唐織お召しの丸帯をしていたのであ
る。帯上げは上に、腰帯は下に、帯を中にして二つの併行線を劃した緋と、折り返して据わった
裾に、三角形をなしている襦袢の緋とが、先ずひどく目を刺戟する。

純一が肴を荒しながら向うをちょいちょい見ると、女の方でも小さい煙管で煙草を飲みながら
こつちをちょいちょい見る。ひよいと島田鬻を前へ俯向けると、脊柱の処の着物を一掴み、ぐつ
と下へ引つ張つて着たような襟元に、尖を下にした三角形の、白いぼんの窪が見える。純一はふ
とこう思った。この女は己のいる処の近所へ来るようにしているのではあるまいか。さつき高山
先生の前に来た時も、知らない内に己の横手に据わっていた。今金鎖の親爺の前に来てのものも
己の席に近いからではあるまいかと思つたのである。しかし直ぐに又自分を嘲つた。幾ら瀬戸の
言うのが事実で、今夜来ている芸者はお茶張きばかりでも、小倉袴を穿いた書生の跡を追い廻す
筈がない。我ながら馬鹿氣た事を思つたものと、純一は心機一転して、丁度持て来た茶碗蒸し
を箸で掘り返し始めた。

この時黒羽二重の五所紋の羽織を着流した、ひどくにやけた男が、金鎖の前に来て杯を貰つて
いる。二十代の驚くべく垢の抜けた男で、物を言う度に、薄化粧をしているらしい頬に、堅に三
本ばかり深い皺が寄る。その物を言う声が、なんとも言えない、不自然な、きいきい云うような

る。殊に東京に出てからは、どの階級にもせよ、少し社会の水面に頭を出して泳いでいる人間を見る毎に、もはや純一はその人が趣味を有しているなんぞとは予期していない。そこで芸者が趣味を解していようとは初めから思っていない。

しかしおちゃらはこのにやけ男を、青眼を以て視るだろうか。将た白眼を以て視るだろうか。純一の目に映ずるところは意外であった。おちゃらは酌をするとき、ちよいと見たきり顧みない。反応はどう見ても中性である。

俳優はおちゃらと袖の相触れるように据わって、杯を前に置いて、やはり左の手を疊に衝いて話している。

「狂言も筋が御見物にお分かりになれば宜しいということになりませんと、勤めにくくて困ります。脚本の長い白を一々諳記させられてはたまりません。大家のお方の脚本は、どうもあれに困ります。女形ですか。一度調子を呑み込んでしまえば、そんなにむずかしくはございません。女優も近々出来ましようが、やはり男でなくては勤めにくい女の役があると仰しゃる方もございます。西洋でも昔は男ばかりで女の役を勤めましたそうでございます」

金鎖は天晴 meche らしい顔をして聞いている。おちゃらはさも退屈らしい顔をして、新紐程の烟管挿しを、膝の上で結んだり、ほどいたりしている。この番の中の白魚がよじれるような、小さい指の戯れを純一が見ていると、おちゃらもやはり目を偷むようにして、ちよいちよい純一の方を見るのである。

視線が暫く往来をしているうちに、純一は次第に一種の緊張を感じて来た。どうにか解決を与

えなくてはならない問題を与えられているようで、窘迫と不安とに襲われる。物でも言ったら、この不愉快な縛が解けよう。しかし人の前に来て据わっているものに物は言いにくい。いや。己の前に来たって、旨く物が言われるかどうか、少し覚束ない。一体あんなに己の方を見るようなら、己の前へ来れば好い。己の前へ来たって、外の客のするように、杯を遣るなんという事が出来るかどうか分からない。どうもそんな事するのは、己には不自然なようである。強いてしても柄にないようでもまずかろう。向うが誰にでも薦めるように、己に酒を薦めるのは造作はない筈である。なぜ己の前に来ないか。そして酌をしないか。向うがそうするには、先ず打勝たなくてはならない何物も存在していないではないか。

ここまで考えると、純一の心の中には、例の女性に対する敵意が萌して来た。そしてあいつは己を不言の間に翻弄していると感じた。勿論この感じは的のあなたを射るようなもので、女性に多少の冤屈を負わせているかも知れないとは、同時に思っている。しかしそんな顧慮は敵意を消滅させるには足らないのである。

幸におちやらの純一の上に働かせている誘惑の力が余り強くないのと、二人の間にまだ直接的な collision を来たしていなかったのとの二つの為めに、純一はこの可哀らしい敵の前で退却の決心をするだけの自由を有していた。

退路は瀬戸の方向へ取る事になった。それは金鎖の少し先きの席へ瀬戸が戻って、肴を荒しているのを発見したからである。おちやらのいる所との距離は大して違わないが、向うへ行けば、顔を見合せることだけではないのである。

純一は誘惑に打勝った人の小さい *Triomphe* を感じて席を起った。しかし純一の起つと同時に、おちやらも起つてどこかへ行った。

「どうだい」と、瀬戸が目で迎えながら声を掛けた。

「余り面白くもない」と、小声で答えた。

「当り前さ。宴会というものはこんな物なのだ。見給え。又踊るらしいぜ。ひどく勉強しやがる」

純一が背後を振り返って見ると、さっきの場所に婆あさん連が三味線を持って立っていて、その前でやはりおちやらと今一人の芸者とが、盛んな支度をしている。上着と下着との裾をぐっとまくって、帯の上に持て来て挟む。おちやらは緋の友禅摸様の長襦袢、今一人は退紅色の似寄った摸様の長襦袢が、膝から下に現れる。婆あさんが据わって三味線を弾き出す。活潑な踊が始まる。

「なんだろう」と純一が問うた。

「桃太郎だよ。そら。爺いさんと婆あさんとがどうかしたと云って、歌っているだろう」

さすが酒を飲む処へは、真先に立って出掛ける瀬戸だけあって、いろんな智識を有していると、純一は感心した。

女中が鮓を一皿配って来た。瀬戸はいきなり鮓の鮓を摘まんで、一口食って膳の上を見廻した。刺身の醬油を搜したのである。ところが刺身は綺麗に退治してしまつたので、女中が疾づくに醬油も一しよに下げてしまった。跡には殻附の牡蠣に添えて出した醋があるばかりだ。瀬

戸は鮓の鮓にその醋を附けて頬張った。

「どうだい。君は鮓を遣らないか」

「僕はもうさっきの茶碗蒸しで腹が一ぱいになってしまった。酒も余り上等ではないね」

「お客次第なのだよ」

「そうかね」純一はしよさいなさに床の間の方を見廻して云った。「なんだね。あの大きな虎は」

「岸駒さ。文部省の展覧会へ出そうもんなら、鑑査で落第するのだ」

「どうだらう。もうそろそろ帰っても好くはあるまいか」

「構うものか」

暫くして純一は黙って席を起った。

「もう帰るのか」と、瀬戸が問うた。

「まあ、様子次第だ」こう云って、座敷の真中を通って、廊下に出て、梯はしどを降りた。実際目立た

ないように帰られたら帰ろう位の考であった。

梯の下に降りると、丁度席上で見覚えた人が二人便所から出て来た。純一は自分だけ早く帰る

のを見られるのが極きまりが悪いので、便所へ行った。

用を足してしまつて便所を出ようとしたとき、純一はおちやらが廊下の柱に靠より掛かつて立っ

ているのを見た。そして何故なにかともなしに、びっくりした。

「もうお帰りなさるの」と云って、おちやらは純一の顔をじっと見ている。この女は目で笑うこ

との出来る女であった。瞳に緑いろの反射のある目で。

おちゃらはしなやかな上半身を前に屈めて、一步進んだ。薄赤い女の顔が余り近くなったので、純一はまぶしいように思った。

「こん度はお一人でいらっしやいな」小さい名刺入の中から名刺を一枚出して純一に渡すのである。

純一は名刺を受け取ったが、なんとも云うことが出来なかった。それは何事をも考える余裕がなかったからである。

純一がまだ *stidise* の状態から回復しないうちに、おちゃらは身を翻して廊下を梯の方へ、足早に去ってしまった。

純一は手に持っていた名刺を見ずに袂に入れて、ぼんやり梯の下まで来て、あたりを見廻した。帽や外套を隙間もなく載せてある棚の下に、男が四五人火鉢を囲んで蹲んでいる外には誰もいない。純一は不安らしい目をして梯を見上げたが、丁度誰も降りては来なかった。この隙にとまって、棚の方へ歩み寄った。

「何番様で」一人の男が火鉢を離れて起った。

純一は合札を出して、帽と外套とを受け取って、寒い玄関に出た。

十八

純一は亀清の帰りに、両国橋の袂に立って、浜町の河岸を廻って来る電車を待ち受けて乗っ

た。歳の暮が近くなつていて、人の往来も頻繁な為めである。その車には満員の赤札が下がつていたが、停留場で二三人降りた人があったので、とにかく乗ることだけは乗られた。

車の背後の窓の外に、横に打ち付けてある真鍮の金物に掴まって立っていると、車掌が中へ這入れと云う。這入ろうと思つて片足高い処に踏み掛けたが、丁度出入口の処に絆纏を着た若い男が腕組をして立っていて、屹然として動かない。純一は又足を引込めて、そのまま外にいたが、車掌も強いて這入れとは云わなかつた。

そのうち車が急に曲がった。純一は始めて気が附いて見れば、浅草へ行く車であつた。宴会の席で受けた色々の感動が頭の中で chaos を形づくっているの、何処へ行く車か見て乗るといふ注意が、覚えす忘れられたのである。

帰りの切符を出して、上野広小路への乗換を貰つた。そして車掌に教えられて、既橋の通りで乗り換えた。

こん度の本所から来た車は、少し透いていたので、純一は用革に掴まる事が出来た。人道を歩いている人の腰から下を見ている純一が頭の中には、おちやらが頸筋を長く延べて据わつた姿や、腰から下の長襦袢を見せて立つた形がちらちら浮んだり消えたりして、とうとう便所の前での出来事が思い出されたとき、想像がそこに踏み止まって動かない。この時の言語と動作とは、一一精しく心の中に繰り返されて、その間は人道をどんな人が通るといふことも分からなくなる。

どういふ動機であんな事をしたのだからという問題は、この時早くも頭を擡げた。随分官能は

若い血の循環と共に急劇な動揺をもするが、思慮は自分で自分を怪しむ程冷やかである。或時瀬戸が「君は老人のような理窟を考えるね」と云ったのも道理である。色でしたか、慾でしたか、それとも色と慾との二道掛けてしたかと、新聞紙の三面の心理のような事が考えられる。そして慾でするなら、書生風の自分を相手にせずとも、もっと人選の為様がありそうなものだと、謙譲らしい反省をする、その裏面には *クレンディエ* が動き出して来るのである。しかし恋愛はしない。恋愛というものをいつかはしようと、負債のように思っているながら、恋愛はしない。思慮の冷かなのも、そのせいだろうかなどと考えて見る。

広小路で電車を下りたときは、少し風が立って、まだ明りがかつかつと点している店々の前に、新年の設けに立て並べてある竹の葉が戦いでいた。純一は外套の襟を起して、頸を竦めて、薩摩下駄をかかんかと踏み鳴らして歩き出した。

谷中の家の東向きの小部屋にある、火鉢が恋しくなったところを、車夫に勧められて、とうとう車に乗った。車の上では稍々強く顔に当る風も、まだ酔が残っているので、却て快い。

東照宮の大鳥居の側を横ぎる、いつもの道を、動物園の方へ抜けるとき、薄暗い杉木立の下で、ふと自分は今何をしているかと思つた。それからこのまま何事をも成さずに、あの聖堂の狸の話をしたお爺いさんのようになってしまはいはすまいかと思つたが、馬鹿らしくなって、直ぐに自分で打消した。

天王寺の前から曲れば、この三崎北町あたりもまだ店が締めずにある。公園一つを中に隔て、都鄙それぞれ歳の賑いが見える。

我家の門で車を返して、部屋に這入った。袂から蠟マツチを出して、ランプを付けて見れば、婆あさんが氣を付けてくれたものと見えて、丁寧ていねいに床が取ってあるばかりではない、火鉢に掛けてある湯沸かしには湯が沸いている。それを卸して見れば、生けてある佐倉炭が真赤におこっている。純一はそれを掻き起して、炭を沢山くべた。

綺麗に片附けた机の上には、読みさして置いて出たマアテルリンクの青い鳥が一冊ある。その上に葉書が一枚乗っている。ふと明日箱根へ立つ人の便りかと思つて、手に取る時何がなしに動悸がしたがそうでは無かつた。差出人は大村であつた。「明日参上いたすべく候に付、外に御用事なくば、御待下されたく候。尤も当方も用事にては無之候」としてある。これだけの文章にも、どこやら大村らしいところがあると感じた純一は、独り微笑んで葉書を机の下にある、針金で編んだ書類入れに入れた。これは純一が神保町の停留場の傍で、ふいと見附けて買ったのである。

それから純一は、床の間の隅に置いてある小蓋を引き出して、袂から金入れやら時計やらを、無造作に攫み出して、投げ入れた。その中に小さい名刺が一枚交っていた。貰つたままで、好くも見ずに袂に入れた名刺である。一寸拾つて見れば、「栄屋おちやら」と厭な手で書いたのが、石版摺にしてある。

厭な手だと思つると同時に、純一はいかに人のおもちゃになる職業の女だとは云つても、厭な名刺を附けたものだと思つた。文字に書いたのを見たので、そう思つたのである。名刺という形見を手にかけていながら、おちやらの表情や声音が余りはつきり純一の心に浮んでは来ない。着物の

色どりとか着こなしとかの外には、どうした、こう云ったという、粗大な事実の記憶ばかりが残っているのである。

しかしこの名刺は純一の為めに、引き裂いて棄てたり、反古籠に入れたりする程、無意義な物ではなかった。少くも即時にそうする程、無意義な物ではなかった。そんなら一人で行って、おちゃら呼んで見ようと思うかと云うに、そういう問題は少くも目前の問題としては生じていない。只棄ててしまうには忍びなかった。一体名刺に何の意義があるだろう。純一はそれをはっきりとは考えなかった。或は彼が自ら愛する心に一縷の *encens* を焚いて遣った女の記念ではなかっただろうか。純一はそれをはっきりとは考えなかった。

純一は名刺を青い鳥のペエジの間に挟んだ。そして着物も着換えずに、床の中に潜り込んだ。

十九

翌朝純一は十分に眠った健康な体の好い心持で目を醒ました。只咽に痰が詰まっているようなので咳払を二つ三つして見て風を引いたかなと思つた。しかしそれは前晩に酒を飲んだ為めであつたと見えて漱いをして顔を洗つてしまうと、さっぱりした。

机の前に据わって、いつの間にか火の入れである火鉢に手を翳したとき、純一は忽ち何事か思い出して、「あ、今日だったな」と心の中につぶやいた。丁度学校にいた頃、朝起きて何曜日だということを考えて、それと同時にその日の時間表を思い出したような工合である。

純一が思い出したのは、坂井の奥さんが箱根へ行く日だということであつた。誘われた通りに、跡から行こうと、はつきり考えているのではない。それが何より先きに思い出されたのは、奥さんに軽い程度の suggestion を受けているからである。一体夫人の言語や挙動には suggestion などころがあつて、夫人は半ば無意識にそれを利用して、寧ろ悪用して、人の意志を左右しようとする傾きがある。若し催眠術者になつたら、大いに成功する人かも知れない。

坂井の奥さんが箱根へ行く日だと思つた跡で、純一の写象は暗中の飛躍をして、妙な記憶を喚び起した。それは昨夜夜明け近くになって見た夢の事である。その夢を見掛けて、ちよいと驚いて目を醒まして、直ぐに又寐てしまったが、それからは余り長く寐たらしくはない。どうしても夜明け近くになってからである。

なんでも大村と一しょに旅行をしていて、どこかの茶店に休んでいた。大宮で休んだような、人のいない霞寶張りではない。茶を飲んで、まずい菓子麩包か何か食っている。季節は好く分らないが、目に映ずるものは暖い調子の色に飽いている。薄曇りのしている日の午後である。大村と何か話して笑っていると、外から「海嘯が来ます」と叫んだ女がある。自分が先きに起つて往來に出て見た。

広い畑と畑との間を、真直に長く通っている街道である。左右には溝があつて、その縁には榛の木の下に別に灰色の一線が劃せられている。女の「あれ、あそこ」という方角を見たが、灰色の空の下に別に灰色の一線が劃せられているようなだけで、それが水だとはつきりは見分けられない。その癖純一の胸には劇しい恐怖が湧く。そこへ出て来た大村を顧みて、「山の近いのは

どっちだろう」と問う。大村は黙っている。どっちを見ても、山らしい山は見えない。只水の来るといふ方角と反対の方角に、余り高くもない丘陵が見える。純一はそれを目掛けて駈け出した。広い広い畑を横に、足に任せて駈けるのである。

折々振り返って見るに、大村はやはり元の街道に動かずに立っている。女はいない。夢では人物の経済が自由に行われる。純一は女がいなくなったとも思わないから、なぜいなくと怪しむもしない。

忽ち *sober* が改まった。場所の変化も夢では自由である。純一は水が踵に迫って来るのを感じると共に、傍に立っている大きな木に攀じ登った。何の木か純一には分からないが広い緑色の葉の茂った木である。登り登って、扇のように開いている枝に手が届いた。身をその枝の上に撥ね上げて見ると、同じ枝の上に、自分より先きに避難している人がある。所々に白い反射のある緑の葉に埋もれて、長い髪も乱れ、袂も裾も乱れた女がいるのである。

黄いろい水がもう一面に漲って来た、その中に、この一本の木が離れ小島のように抜き出でている。滅びた世界に、新に生れて来た *Adam* と *Eva* とのように梢を掴む片手に身を支えながら、二人は遠慮なく近寄った。

純一は相触れんとするまでに迫り近づいた、知らぬ女の顔の、忽ちおちゃらになったのを、少しも不思議とは思わない。馴馴しい表情と切れ切れの詞とが交わされるうちに、女はいつか坂井の奥さんになっている。純一が危い体を支えていようとする努力と、僅かに二人の間に存している距離を縮めようと思う慾望とに悩まされているうちに、女の顔はいつかお雪さんになってい

る。

純一がはつと思つて、半醒覚の状態に復つたのはこの一刹那の事であつた。誰やらの書いたものに、人は夢の中ではどんな禽獣きんじゆうのような行いをも敢てして恬然てんぜんとしてゐるもので、それは道徳という約束の世間にまだ生じていない太古に復る *Atavisme* だと云うことがあつた。これは随分思ひ切つた推理である。しかしその是非はとにかく措いて、純一はそんな *Atavisme* には陥らなかつた。或は夢が醒め際になつていて、醒めた意識の幾分が働いていたのかも知れない。

半醒覚の純一が体には慾望の火が燃えていた。そして踏み脱いでいた布団を、又領元りやうげんまで引き寄せて、腮おほを埋めるようにして、又寐入る刹那には、臆おそげな意識の上に、見果てぬ夢の名残を惜む情が漂つていた。しかしそれから、短い深い眠に入つたらしい。

純一が写象は、人間の思量の無碍むげの速度を以て、ほんの束の間つかひに、長い夢を繰り返して見た。そして、それを繰り返して見ている間は、その輪廓や色彩のはっきりしてゐて、手で掴まれるように感ぜられるのに打たれて、ふとあんな工合に物が書かれたら好かろうと思つた。そう思つて、又繰り返して見ようとする、もう輪廓は崩れ色彩は褪あせてしまつて、不自然な事やら不合理な事やらが、道の小石に足の躓つまりくように、際立だつて感ぜられた。

二十

午前十時頃であつた。初音町はつねちやうの往来へ向いた方の障子に鼠色の雲に濾こされた日の光が、白らけ

た、殆ど色神に触れない程な黄いろを帯びて映じている純一が部屋へ、大村荘之助が血色の好い、爽快な顔付きをして這入って来た。

「やあ、内にいてくれたね。葉書は出して置いたが、今朝起きて見れば、曇ってはいるけれど、先ず東京の天気としては、不愉快ではない日だから、どこか出掛けはしないかと思った」

純一は自分の陰気な部屋へ、大村と一しょに一種の活気が這入って来たような心持がした。そして火鉢の向うに胡坐を掻いた、がっしりした体格の大村を見て、語気もその晴れ晴れしさに釣り込まれて答えた。「なに。丁度好いと思っていました。どこと云って行くような処もないのですから」

大村の話の聞けば、休暇中一月の十日頃まで、近県旅行でもしようかと思う、それで告別の心持で来たということである。純一は心から友情に感激した。

一つ二つ話をしているうちに、大村が机の上にある青い鳥の脚本に目を附けた。「何か読んでいるね」と云って、手に取りそうにするので、純一ははっと思った。中におちゃらの名刺の挿入であるのを見られるのが、心苦しいのである。

そこで純一は機先を制するように、本を手に取って、「L'oiseau bleu です」と云いながら、自分で中を開けて、初の方をばらばらと引つ繰り返して、十八ペエジの処を出した。

「リジですぞ。A peine [lyly] a-t-il tourné le diamant, qu'un changement soudain et prodigieux s'opère en toutes choses. リジの処が只のと書きだとは思われない程、美しく書いてありますね。

僕は国の中学にいた頃、友達にさそわれて、大ぶ学問のある坊さんの所へちよいちよい行ったこと

があります。丁度その坊さんが維摩經ゆいまぎょうこーじの講釈をしていました。みすばらしい維摩居士こじの方丈の室が莊嚴世界になるところが、こんな工合ですね。しかし僕はもうずっと先きの方まで読んでいますが、この脚本の全体の帰趣きすうというようなものには、どうも同情が出来ないのです。麵包と水とで生きていて、クリスマスが来ても、子供達に椗もみの枝に蠟燭ろうそくを点ともして遣やることも出来ないような木樵こすりの棲すみ家にも、幸福の青い鳥は籠かごの内うちにいる。その青い鳥を余所よそこに求めて、Tytyl, Mytylのきょうだいの子は記念の国、夜の宮殿、未来の国とさまよい歩くのですね。そしてその未来の国で、これから先きに生れて来る子供が、何をしているかと思うと、精巧な器械を工夫している。翼なしに飛ぶ手段を工夫している。あらゆる病を直す薬方を工夫している。死に打ち克かつ法を工夫している。ひどく物質的な事が多いのですね。そんな事で人間が幸福になられるでしょうか。僕にはなんだか、ひどく矛盾しているように思われてなりません。十九世紀は自然科学の時代で、物質的の開化もたらを齎もたらした。我々はそれに満足することが出来ないで、我々の触角を外界から内界に向け換かえたでしょう。それに未来の子供が、いろんな器械を持って来てくれたり、西瓜すいかのような大きさの林檎りんごを持って来てくれたりしたって、それがどうなるでしょう。おう。それから鼻はな糞ぼをほじくっている子供がいましたっけ。大かた鷗村おうむらさんが大発見たいはつしんの追加を出すだろうと、僕は思ったのです。あの子供が鼻糞をほじくりながら、何を工夫しているかと思うと、太陽が消えてしまった跡で、世界を暖ぬくめる火を工夫しているというのですね。そんな物は、現在の幸福が無くなった先きの入れ合せに過ぎないじゃありませんか。そりゃあ、なる程、人のまだ考えたことのない考を考えている子供だとか、あらゆる不公平を無くしてしまおう工夫をしている子供だとか云

うのもいました。内生活に立ち入る様な未来もまるで示してないことはないのです。しかし僕にはそれが、唯雑然と並べてあるようで、それを結び附ける鎖が見附からないのです。矛盾が矛盾のままではいるのですね。どう云うものでしょう」

純一は覚えず能弁になった。そして心の底には始終おちやらの名刺が気になっている。大村がその本をよこせと云って、手を出すような事がなければ好いがと、切に祈っているのである。

幸に大村は手を出しそうにもしないで云った。「そうさね。矛盾が矛盾のままではいるようなところは、その脚本の弱点だろうね。しかし一体哲学者というものは、人間の万有の最終問題から観察している。外から覗いている。ニイチェだって、この間話の出たワインゲルだってそうだ。そこで君の謂う内界が等閑にせられる。平凡な日常の生活の背後に潜んでいる象徴的意義を体験する、小景を大観するというのが無い。そう云うところのある人は、*Simmel* なんぞのような人を除けたらマアテルリンクしかあるまい。だから君が雑然と並べてあると云う、あの未來の子供の分担している為事が、悉く解けて流れて、青い鳥の象徴の中に這入ってしまうように書きたかったには違いないが、それがそう行かなかつたのでしよう」

純一は大村の詞を聞いているうちに、名刺を発見せられはすまいかと思う心配が次第に薄らいで行って、それと同時に大村が青い鳥から拈出した問題に引き入れられて来た。

「ところが、どうも僕にはその日常生活というものが、平凡な前面だけ目に映じて為様がないのです。そんな物はつまらないと思うのです。これがいつかもお話をした利己主義と関係しているのではないでしようか」

「それは大おほいに關係して思うね」

「そうですか。そんならあなたの考えているところを、遠慮なく僕に話して聞かせて貰いたいのですがねえ」純一は大きい涼しい目を輝かして、大村の顔を仰ぎ見た。

大村は手に持っていた紙巻の消えたのを、火鉢の灰に挿さして語り出した。「そうだね。そんなら無遠慮に大風呂敷を広げるよ」大村は白い歯を露あらわわして、ちよっと笑った。「一体青い鳥の幸福という奴は、煎まじ詰めて見れば、内に安心立命を得て、外に十分の勢力を施すというより外有るまいね。昨今はそいつを漢学の道徳で行こうなんという連中があるが、それなら修身齐家治国平天下で、解決は直ぐに附く。そこへ超越的な方面が加わって来ても、老荘を始として、仏教渡来以後の朱子学やら陽明学というようなものになるに過ぎない。西洋で言つて見ると希臘ギリシヤの倫理が Platonプラトンあたりから超越的になつて、基督教クリストがその方面を極力開拓した。彼岸ひがんに立脚して、馬鹿に神々こうじゅうしくなつてしまつて、此岸しがんがお留守になつた。樵夫せうぶの家に飼つてある青い鳥は顧みられなくなつて、余所よそに青い鳥を求めることになつたのだね。僕の考では、仏教の遁世とんせいも基督教の遁世トネツキも同じ事になるのだ。さてこれからの思想の発展というものは、僕は西洋にしか無いと思う。Renaissanceルネッサンスという奴が東洋には無いね。あれが家の内の青い鳥をも見させてくれた。大胆な航海者が現れて、本当の世界の地図が出来る。天文も本当に分かる。科学が開ける。芸術の花が咲く。器械が次第に精巧になつて、世界の総てが仏者の謂う器世界きせかいばかりになつてしまつた。殖産と資本とがあらゆる勢力を吸収してしまつて、今度は彼岸がお留守になつたね。その時ふいと目が醒めて、彼岸を覗いて見ようとしたのが、シヨペンハウエルという変人だ。彼岸を望んで、此

岸を顧みて見ると、万有の根本は盲目の意志になつてしまふ。それが生を肯定することの出来ない厭世主義だね。そこへニイチェが出て一転語を下した。なる程生というものは苦艱を離れない。しかしそれを避けて逃げるのは卑怯だ。苦艱籠めに生を領略する工夫があるというのだ。Whatの問題をHowにしたのだね。どうにかしてこの生を有のままに領略しなくてはならない。ルソオのように、自然に帰れなどと云つたつて、太古と現在との中間の記憶は有力な事実だから、それを抹殺してしまふことは出来ない。日本で護國派の漢学や、契沖、真淵以下の国学を、ルネッサンスだなんと云うが、あれは唯復古で、再生ではない。そんならと云つて、過去の記憶の美しい夢の国に魂を馳せて、Romanikerの青い花にあこがれたつて駄目だ。Tostoiがえらくたつて、あれも遁世的だ。所詮觀面に日常生活に打つ附かつて行かなくては行けない。この打つ附かつて行く心持がDionysos的だ。そうして行きながら、日常生活に没頭していながら、精神の自由を牢く守つて、一步も仮借しないところがApollo的だ。どうせこう云う工夫で、生を領略しようとなれば、個人主義には相違ないね。個人主義は個人主義だが、ここに君の云う利己主義と利他主義との岐路がある。利己主義の側はニイチェの悪い一面が代表している。例の権威を求める意志だ。人を倒して自分が大きくなるという思想だ。人と人とがお互にそいつを遣り合えば、無政府主義になる。そんなのを個人主義だとすれば、個人主義の悪いのは論を須たない。利他的個人主義はそうではない。我という城廓を堅く守つて、一步も仮借しないで、人生のあらゆる事物を領略する。君には忠義を尽す。しかし国民としての我は、昔何かもごちやごちやにしていた時代の所謂臣妾ではない。親には孝行を尽す。しかし人の子としての我は、昔子を売

ることも殺すことも出来た時代の奴隷^どではない。忠義も孝行も、私の領略し得た人生の価値に過ぎない。日常の生活一切も、私の領略して行く人生の価値である。そんならその我というものを棄てる事が出来るか。犠牲にすることが出来るか。それも慥^{たしか}に出来る。恋愛生活の最大の肯定が情死になるように、忠義生活の最大の肯定が戦死にもなる。生が万有を領略してしまえば、個人は死ぬる。個人主義が万有主義になる。遁世主義で生を否定して死ぬるのとは違う。どうだろう、君、こう云う議論は」大村は再び齒を露^{あらわ}わして笑った。

熱心に聞いていた純一が云った。「なる程そんなものでしょうかね。僕も跡で好く考えて見なくては分らないのですが、そんな工合に連絡を付けて見れば、切れ切れになっている近世の思想に、綜合点が出来て来るように思われますね。こないだなんとか云う博士の説だと云うので、こんな事が書いてありましたっけ。個人主義は西洋の思想で、個人主義では自己を犠牲にするとは出来ない。東洋では個人主義が家族主義になり、家族主義が国家主義になっている。そこで始て君父の為に身を棄てるということも出来ると云うのですね。こう云う説では、個人主義と利己主義と同一視してあるのだから、あなたの云う個人主義とは全く別ですね。それに個人主義から家族主義、それから国家主義と発展して来たもので、その発展が西洋に無くって、日本にあると云うのは可笑^{おか}しいじゃありませんか」

「そりゃあ君、無論可笑しいさ。そんな人は個人主義を利己主義や自己中心主義と一しよにして居るばかりではなくって、無政府主義とも一しよにしているのだね。一体太古の人間が一人一人穴居から這い出して来て、化学の原子のように離れ離れに生活していただろうと思うのは、まる

で歴史を撥無した話だ。若しそうなら、人生の始は無政府的だが、そんな生活はいつの世にもありやしなかつた。無政府的生活なんと云うものは、今の無政府主義者の空想にしか無い。人間が最初そんな風に離れ離れに生活していて、それから人工的に社会を作った、国家を作ったと云う思想は、ルソオの *Contract Social* あたりの思想で、今になってまだそんな事を信じているものは、先ず無いね。遠い昔に溯って見れば見る程、人間は共同生活の束縛を受けていたのだ。それが次第にその羈絆を脱して、自由を得て、個人主義になって来たのだ。お互に文学を遣っているのだが、文学の沿革を見たって知れるじゃないか。運命劇や境遇劇が性格劇になったと云うのは、劇が発展して個人主義になったのだ。今になって個人主義を退治しようとするのは、目を醒まして起きようとする子供を、無理に布団の中へ押し込んで押さえていようとすることもものだ。そんな事が出来るものかね」

これまでになく打ち明けて、盛んな議論をしているが、話の調子には激昂の迹は見えない。大村はやはりいつもの落ち着いた語気で話している。それを純一は唯「そうですね」「全くですね」と云って、聞いているばかりである。

「一体妙な話さ」と、大村が語り続けた。「ロシアと戦争をしてからは、西洋の学者が一般に、日本人の命を惜まないことを知って、一種の説明をしている。日本なんぞでは、家族とか国家とか云う思想は発展していかないから、そういう思想の為に犠牲になるのではない。日本人は異人種の鈍い憎悪の為に、生命の貴さを覚らないところから廉価な戦死をするのだと云っている。誰の書物をでも見るが好い。殆ど皆そんな風に観察している。こっちでは又西洋人が太古のまま

の個人主義でいて、家族も国家も知らないために、片っ端から無政府主義になるように云っている。こんな風にお互に *méconnaissance* の交換をしているうちに、ドイツとアメリカは交換大学教授の制度を次第に拡張する。白耳義には国際大学が程なく立つ。妙な話じゃないか」と云つて、大村は黙ってしまった。

純一も黙つて考え込んだ。しかしそれと同時に尊敬している大村との隔てが、遽かに無くなつたような気がしたので、純一は嬉しさに覚えず微笑んだ。

「何を笑うんだい」と、大村が云つた。

「きょうは話はずんで、愉快ですね」

「そうさ。一々の詞を秤の皿に載せるような事をせずに、なんでも言いたい事を言うのは、我々青年の特権だね」

「なぜ人間は年を取るに従つて偽善に陥つてしまふでしょう」

「そうさね。偽善というのは酷かも知れないが、甲らが硬くなるには違いないね。永遠なる生命が無いと共に、永遠なる若さも無いのだね」

純一は暫く考えて云つた。「それでもどうにかして幾分かその甲らの硬くなるのを防ぐことは出来ないでしょうか」

「甲らばかりでは無い。全身の弾力を保存しようという問題になるね。巴里の Institut Pasteur に Metchnikoff というロシア人がいる。その男は人間の体が年を取るに従つて段々石灰化してしまうのを防ぐ工夫をしているのだがね。不老不死の問題が今の世に再現するには、まあ、あんな形

式で再現する外ないだろうね」

「そうですか。そんな人がありますかね。僕は死ぬまいなんぞとは思わないのですが、どうか石灰化せずになりたいものですね」

「君、メチュニコッフ自身もそう云っているのだよ。死なないわけには行かない。死ぬるまで弾力を保存したいと云うのだね」

二人共余り遠い先の事を考えたような気がしたので、言い合せたように同時に微笑んだ。二人はまだ老だの死だのということ、際限もなく遠いもののように思っている。人一人の生涯というものを測る尺度を、まだ具体的に手に取って見たことが無いのである。

忽ち襖の外でこと音をさせるのが聞えた。植長の婆あさんが気を利かせて、二人の午飯を用意して、持ち運んでいたのである。

二十一

食事をしまつて茶を飲みながら、隔ての無い青年同士が、友情の楽しさを緘黙の中に味わっていた。何か言わなくてはならないと思つて、言いたくない事を言う位は、所謂附合いの人の心を縛る繩としては、最も緩いものである。その繩にも縛られずに平気で黙りたい間黙っていることは、或る年齢を過ぎては容易に出来なくなる。大村と純一とはまだそれが出来た。

純一が炭斗を引き寄せて炭をついでいる間に、大村は便所に立った。その跡で純一の目は、急

に青い鳥の脚本の上に注がれた。Charpentier et Faquelle 版の仮綴の青表紙である。忙わしい手は、紙切小刀で切った、ざら附いた、出入りのあるペエジを翻した。そして捜し出された小さい名刺は、引き裂かれるところであったが、堅韌なる紙が抗抵したので、揉みくちやにせられて袂に入れられた。

純一は証拠を湮滅させた犯罪者の感じる満足のような満足を感じた。

便所から出て来た大村は、「もうそろそろお暇をしようか」と云って、中腰になって火鉢に手を翳した。

「旅行の準備でもあるのですか」

「何があるものか」

「そんなら、まあ、好いじゃありませんか」

「君も寂しがる性だね」と云って、大村は胡座を搔いて、又紙巻を吸い附けた。「寂しがらない奴は、神経の鈍い奴か、そうでなければ、神経をほかして世を渡っている奴だ。酒。骨牌。女。Herschisch」

二人は顔を見合せて笑った。

それから官能的受用で精神をほかしているなんということは、精神的自殺だが、神経の異様に興奮したり、異様に抑圧せられたりして、体をどうしたら好いか分らないようなこともある。そう云う時はどうしたら好いだらうと、純一が問うた。大村の説では、一番健全なのはスエデン式の体操か何かだらうが、演習の仮設敵のように、向うに的を立てなくては、倦み易い。的を立

てるとなると、*spot* になる。*spot* になると、直接にもせよ間接にもせよ競争が生ずる。勝負が生ずる。畢竟倦まないと云うのは、勝とう勝とうと思う励みのあることを言うのであろう。ところが個人毎に幾らかずつの相違はあるとしても、芸術家には先ずこの争う心が少い。自分の遣っている芸術の上でからが、縦え形式の所謂競争には加わっていても、製作をする時はそれを忘れてある位である。Paul Heyse の短篇小説に、競争仲間の彫像を夜忍び込んで打ち壊すことが書いてあるが、あれは性格の上の憎悪を土台にして、その上に恋の遺恨をさえ含ませている。要するに芸術家らしい芸術家は、恐らくは *spot* に熱中することがむずかしからうと云うのである。

純一は思い当る所があるらしく、こう云った。「僕は芸術家がる訳ではないのですが、どうも勝負事には熱心になられませんか」

「もう今に歌がるたの季節になるが、それでは駄目だね」

「全く駄目です。僕はいつも甘んじて読み役に廻されるのです」と、純一は笑いながら云った。「そうさね。同じ詞で始まる歌が、百首のうちに幾つあるということを諳んじてしまつて、初五文字を読んでもしまわないうちに、どれでも好いように、二三枚のかたるたを押えてしまうことが出来なくて、上手下手の評に上ることが出来ない。もうあんな風になつてしまえば、歌のせんは無。子供のするいろはがるたも同じ事だ。もつと極端に云えばAの札Bの札というようなものを二三枚ずつ蒔いて置いて、Aと読んだ時、蒔いてあるAの札を残らず撈つてしまえば好いわけになる。若し歌がるたに価値があるとすれば、それは百首の歌を諳んじただけで、同じ詞で始ま

る歌が幾つあるかなんと云う、器械的な穿鑿せんさくをしない間の楽みに限られているだろう。僕なんぞもそんな事で記憶に負担をさせるよりは、何かもつと気の利いた事を覚えたいね」

「一体あんな事を遣ると、なんにも分らない、音の清濁も知らず、詞の意味も知らないで読んだり取ったりしている、本当の *rouinies* ルチニエス(二四) に愚弄せられるのが厭いやです」

「それでは君にはまだ幾分の争気がある」

「若いのでしょう」

「どうだかねえ」

二人は又顔を見合せて笑った。

純一の笑う顔を見る度に、なんと云う可哀い目付きをする男だろうと、大村は思う。それと同時に、この時ふと同性の愛ということが頭に浮んだ。人の心には底の知れない暗黒の堺さかいがある。

不断一段自分より上のものにばかり交るのを喜んでいる自分が、ふいとこの青年に逢あつてから、余所の交を疎そんじて、ここへばかり来る。不断講釈めいた談話を尤も嫌きらって、そう云う談話の聞き手を求めることは、屑くずとしない自分が、この青年の為めには饒舌じょうぜつして忌むことを知らない。自分分は *homosexual* オモセクシナル(二三) ではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽ほうがが潜ひそんでいるのではあるまいかということが、一寸頭に浮うんだ。

暫くして大村は突然立ち上がった。「ああ。もう行こう。君はこれから何をするのだ」

「なんにも当てがないのです。とにかくそこいらまで送って行きましょう」

午後二時にはまだなっていないかった。大学の制服を着ている大村と一しよに、純一は初音町の

下宿を出て、団子坂の通へ曲った。

門ごとに立てた竹に松の枝を結び添えて、横に一筋の注連縄が引いてある。酒屋や青物屋の賑やかな店に交って、商売柄でか、綺麗に障子を張った表具屋の、ひっそりした家もある。どれを見ても、年の改まる用意に、幾らかの潤飾を加えて、店に立ち働いている人さえ、常に無い活気を帯びている。

この町の北側に、間口の狭い古道具屋が一軒ある。谷中は寺の多い処だからでもあろうか、朱漆の所々に残っている木魚や、胡粉の剥げた木像が、古金と数の揃わない茶碗小皿との間に並べである。天井からは鱧口や磬が枯れた釣葱と一しよに下がっている。

純一はいつも通る度に、ちよいとこの店を覗いて過ぎる。掘り出し物をしようとして、骨董店の前に足を留める、老人の心持と違うことは云うまでもない。純一の覗くのは、或る一種の好奇心である。国の土蔵の一つに、がらくた道具ばかり這入っているのがある。何に使ったものか、見慣れない器、闕け損じて何の片割れとも知れない金屑や木の切れがある。純一は小さい時、終日その中に這入って、何を捜すとなしにそのがらくたを掻き交ぜていたことがある。亡くなった母が食事の時、純一がいけないというので、捜してその蔵まで来て、驚きの目を睜ったことを覚えていた。

この古道具屋を覗くのは、あの時の心持の名残である。一種の探検である。鏽びた鉄瓶、焼き接ぎの痕のある皿なんぞが、それぞれの生涯の *ruine* を語る。

きょう通って見ても、周囲の影響を受けずにいるのは、この店のみである。

純一が古道具屋を覗くのを見て、大村が云った。「君はいろんな物に興味を有していると見えるね」

「そうじゃないのです。あんまり妙な物が並んでいるので、見て通るのが癖になってしまいました」

「頭の中がああの店のようになっていいる人もあるね」

二人はたわいもない事を言つて、山岡鉄舟の建てた全生庵の鐘楼の前を下りて行く。

この時下から上がって来る女学生が一人、大村に会釈をした。俯向けて歩いてゐた、廂の乱れ髪を、一寸横に傾けて、稲妻のように早い、鋭い一瞥の下に、二人の容貌、態度、性格をまで見たかと思われる位であつた。

大村は角帽を脱いで答礼した。

純一は只女学生だなと思つた。手に持っている、中身は書物らしい紫の包みの外には、喉の下と手首とを、リボンで括つたシャツや、袴の堇色が目に留まつたに過ぎない。実際女学生は余り人と変つた風はしていなかつた。着物は新大島、羽織はそれより少し粗い飛白である。袴の下に巻いてゐた、藤紫地に赤や萌葱で模様の出してある、友禅縮緬の袴下の帯は、純一には見えなかつた。シャツの上に襲ねた襦袢の白衿には、大ぶ臍垢が附いてゐたが、こう云う反対の方面も、純一には見えなかつた。

しかし純一の目に強い印象を与えたのは、琥珀色の薄皮の底に、表情筋が透いて見えるようなこの女の顔と、いかにも鋭敏らしい目なざしとであつた。

どう云う筋の近附きだらうかと、純一が心の中に思うより先きに、大村が「妙な人に逢った」と、ひとりごと独言のようにつぶやいた。そして二人殆ど同時に振り返って見た時には、女はもう十歩ばかりも遠ざかっていた。

それから坂を降りて又登る途すがら、大村が問わず語りにこんな事を話した。

大村が始めてこの女に逢ったのは、去年雑誌女学界の懇親会に往った時であった。なんとか云う若いピアノストが六段をピアノで弾くのを知りて、退屈しているところへ、遅れて来た女学生が一人あって、椅子が無いのでまごまごしていた。そこで自分の椅子を譲って遣って、傍に立っているうちに、その時もやはり本を包んで持っていた風炉敷の角の引つ繰り返った処に、三枝と書いてあるのが目に附いた。その頃大村は女学界の主筆に頼まれて、短歌を選んで遣っていたが、際立って大胆な熱情の歌を度々採ったことがある。その作者の名が三枝茂子であった。三枝という氏は余り沢山はなさそうなので、ふいと聞いて見る気になって、「茂子さんですか」と云うと、殆ど同時に女が「大村先生でいらっしやいませう」と云った。それから会話がはずんで、種々な事を聞くうちに、大村が外国語をしているかと問うと、ドイツ独逸語だと云う。独逸語を遣っている女というものには、大村はこの時始て出逢ったのである。

懇親会の翌日、大村の所へ茂子の葉書が来た。又暫く立つと、或る日茂子が突然大村の下宿へ尋ねて来た。Sudermannの Zweilich を持って、分からない所を質問しに来たのである。さ程見当違いの質問ではなかった。しかし問わない所が皆分かっているか、どうだかと云うことを、ためして見るだけの意地わるは大村には出来なかった。

その次の度には、Nicht doch と云う、Favote の短篇集を持って来た。先ず「ニヒト・ドホはなんと訳しましたら宜しいのでしよう」と問われたには、大村は少からず辟易したと云うのである。これを話す時、大村は純一に、この独逸特有の語を説明した。フランスの point de tout や、nemi-da に稍似ていて、どこやら符合しない語なのである。極めて平易に書いた、極めて浅薄な、廉価なる喝采を俗人の読者に求めているらしい、タヴォオテの、あの巻頭の短篇を読んで見れば、多少隔靴の憾はあるとしても、前後の文意で、ニヒト・ドホがまるで分らないはずはない。それが分かっているとすれば、この語の説明に必然伴って来る具体的例が、どんなものかということも分かっているとすれば、実際の説明に必要でも独逸が読めるとすれば、その位な事は分かってゐる筈である。それが分かっていると、なんの下心もなく、こんな質問をすることが出来る程、茂子さんは innocente なのだろうか。それでは、篁村翁にでも言わせれば、余りに「紫の矢継ぎ過ぎている」それであの人のいつも作るような、殆ど暴露的な歌が作られようか。今の十六の娘にそんなのがあろうか。それともと考え掛けて、大村はそれから先きを考えることを憚つたと云うのである。

茂子さんはそれきり来なくなつた。大村が云うには、二人は素と交互の好奇心から接近して見たのであるが、先方でもこつちでも、求むるところのものを得なかつた。そこで恩もなく怨みもなく別れてしまった。勿論先方が近づいて来るにも遠ざかつて行くにも、主動的にはなつていたが、こつちにも好奇心はあつたから、あらわに動かなかつた中に、迎合し誘導した責は免れないと、大村は笑いながら云つた。

大村がこう云って、詞を切ったとき、二人は往来から引込めて立てた門のある、世尊院せそんいんの前を歩いていた。寒そうな振もせず、一群の子供が、門前の空地あきちで、鬼ごっこをしている。

「一体どんな性質の女ですか」と、突然純一が問うた。

「そうさね。歌を見ると、情に任せて動いているようで、逢ってみると、なかなか駈引かけひきのある女だ」

「妙ですね。どんな内の娘ですか」

「僕が問いもせず、向うが話しもしなかったのだが、後になって外ほかから聞けば、母親は京橋辺に住まって、吉田流の按摩あんまの看板を出していると云うことだった」

「なんだか少し気味が悪いようじゃありませんか」

「さあ。僕もそれを聞いたときは、不思議なようにも思い、又君の云う通り、気味の悪いようにも思ったね。それからそう思ってあの女の挙動を、記憶の中から喚よび起して見ると、年は十六で、もうあの時に或る過去を有していたらしいのだね。やはりその身元の話をした男が云ったのだが、茂子さんは初め女医になるのだと云って、日本医学校に這入って、男生ばかりの間交って、随意科の独逸語を習っていたそうさ。その後何度学校を換えたか知れない。女子の学校では、英語と仏語の外は教えていないからでもあろうが、医学を罷やめたと云ってからも、男ばかりの私立学校を数えて廻っている。或る官立学校で独逸語を教えている教師の下宿に毎日通って、その教師と一しょに歩いていたのを見られたこともある。妙な女だと、その男も云っていた。とかく *problematische* などところのある女だね」

二人は肴町の通りへ曲った。石屋の置場のある辺を通る時、大村が自分の下宿へ寄れと云って勧めたが、出発の用意は無いと云っても、手紙を二三本は是非書かなくてはならないと云うのを聞いて、純一は遠慮深くことわって、葬儀屋の角で袂を別った。

「Au revoir!」の一声を残して、狭い横町を大股に歩み去る大村を、純一は暫く見送って、夕の薄衣に次第に包まれて行く街を、追分の方へ出た。点燈会社の人足が、踏台を片手に提げて駈足で摩れ違った。

二二二

箱根湯本の柏屋という温泉宿の小座舖に、純一が独り顔を蹙めて据わっている。

きょうは十二月三十一日なので、取引やら新年の設けやらの為めに、家のものは立ち騒いでいるが、客が少いから、純一のいる部屋へは、余り物音も聞えない。只早川の水の音がごうごうと鳴っているばかりである。

伊藤公の書いた七絶の半折を掛けた床の間の前に、革包が開けてあって、その傍に仮綴の OCTAVO 版の洋書が二三冊、それから大版の横文雑誌が一冊出して開いてある。縦にベエジを二つに割って印刷して、挿画がしてある。これは「Illustration Theatre」の来たのを、東京を立つ時、そのまま革包に入れて出たのである。

ゆうべ東京を立って、今箱根に着いた。その足で浴室に行つて、綺麗な湯を快く浴びては来た

が、この旅行を敢てした自分に対して、純一は頗る不満足な感じを懐いている。それが知らず識らず顔色にあらわれているのである。

* * *

大村は近県旅行に立ってしまふ。外に友達は無。大都会の年の暮に、純一が寂しさに襲われたのも、無理は無いと云えば、それまでの事である。しかし純一はこれまで二日や三日人に物を言わずにいたって、本さえ読んでいれば、寂しいなんと云うことを思ったことはなかったのである。

寂しさ。純一を駆って箱根に來させたのは、果して寂しさであろうか。Solitudeであろうか。そうではない。気の毒ながらそうではない。ニイチエの詞遣で言え、純一は einsam なることを恐れたのではなくて、zweism ならんことを願ったのである。

それも恋愛ゆえだと云うことが出来るなら、弁護にもなるだろう。純一は坂井夫人を愛しているのではない。純一を左右したものはなんだと、追窮して見れば、つまり動物的の策励だと云わなくてはなるまい。これはどうしたって庇護をも文飾をも加える余地が無さそうだ。

東京を立った三十日の朝、純一はなんとなく気が鬱してならないのを、曇った天氣の所為に帰しておいた。本を読んで見ても、どうも興味を感じない。午後から空が晴れて、障子に日が差して来たので、純一は気分が直るかと思つたが、予期とは反対に、心の底に潜んでいた不安の塊りが意識に上ぼって、それが急劇に増長して来て、反理性的の意志の叫声になって聞え始めた。そ

の「箱根へ、箱根へ」と云う叫声に、純一は策うたれて起つたに相違ない。

純一は夕方になって、急に支度を始めた。そこらにある物を掻き集めて、国から持つて出た革包に入れようとしたが、余り大きくて不便なように思われたので、風炉敷に包んだ。それから東京に出る時買って来た、駱駝の膝掛を出した。そして植長の婆あさんに、年礼に廻るのがうるさいから、箱根で新年をするのだと云って、車を雇わせた。実は東京にいたって、年礼に行かなくてはならない家は一軒もないのである。

余り出し抜けなので、驚いて目を睜っている婆あさんに送られて、純一は車に乗って新橋へ急がせた。年の暮で、夜も賑やかな銀座を通る時、ふと風炉敷包みの不体裁なのに気が附いて軀屋に寄って小さい革包を買って、包をそのまま革包に押し込んだ。

新橋で発車時間を調べて見ると、もう七時五十分発の列車が出た跡で、次は九時発の急行である。国府津に着くのは十時五十三分の筈であるから、どうしても、適当な時刻に箱根まで漕ぎ着けるわけには行かない。儘よ。行き当りばったりだと、純一は思つて、いよいよ九時発の列車に乗ることに極めた。そして革包と膝掛とを駅夫に預けて、切符を買うことも頼んで置いて、二階の壺屋の店に上がって行つた。まだ東洋軒には代つていなかったのである。

Bufferの前を通り抜けて、取り附きの室に這入つて見れば、丁度夕食の時間が過ぎているので、一間は空虚である。壁に塗り込んだ、古風な煖炉に骸炭の火がきたない灰を被つていて、只電燈だけが景気好く附いている。純一は帽とインパネスとを壁の鉤に掛けて、ビュッフエと壁一重を隔てている所に腰を掛けた。そして二品ばかりの料理を眺めて、申しわけに持つて来させ

たビールを、舐めるようにちびちび飲んでいた。

初音町の家を出るまで、苛立つようであった純一の心が、いよいよこれで汽車にさえ乗れば、箱根に行かれるのだと思うと同時に、差していた汐の引くように、ずうと静まって来た。そしてこんな事を思った。平生自分は瀬戸なんぞの人柄の陋しいのを見て、何事につけても、彼と我との間には大した懸隔があると思っていた。就中性欲に関する動作は、若し刹那に動いて、偶然提供せられた受用を容すか斥けるかと云うだけが、問題になっているのなら、それは恕すべきである。最初から計画して、汗れた行いをするとなると、余りに卑劣である。瀬戸なんぞは、悪所へ行く積りで家を出る。そんな事は自分は敢てしないと云っていた。それに今わざわざ箱根へ行く。これではいよいよ墮落して、瀬戸なんぞと同じようになるのではあるまいかとも思われる。この考えは、純一の為めに、頗る *horrible* を損ずるもののように感ぜられたのである。そこで純一の意識は無理な弁護を試みた。それは箱根へ行たって、必ず坂井夫人との関係を継続するとは極まっていけない。向うへ行つた上で、まだどうでもなる。去就の自由はまだ保留せられていると云うのであった。

こんな事を思っているうちに、給仕が *ham-eggs* か何か持って来たので、純一はそれを食っていると、一人の女が這入って来た。薄給の家庭教師でもあろうかと思われる。瘦せた、醜い女である。竿のように真っ直な体付きをして、引き詰めた束髪の下に、細長い頸を露わしている。持って来た蝙蝠傘を椅子に倚せ掛けて腰を掛けたのが丁度純一のいる所と対角線で結び附けられている隅の卓で、純一にはその幅の狭い背中が見える。咖啡に *crème* を誂えたが、クレムが来

たかと思うと、直ぐに代りを言い付けて、べろりと舐めてしまふ。又代りを言い付ける。見る間に四皿舐めた。どうしても生涯に一度クレムを食べたい程食べて見たいと思つていたとしか思われない。純一はなんとなく無気味なように感じて、食べているものの味が無くなった。謂わばロオマ人の想像していたような *lemures* の一人が、群を離れて這入つて来たように感じたのである。これには仏教の方の餓鬼という想像も手伝つていたかも知れない。とにかく迷信の無い純一がどうした事かこの女を見て、旅行が不幸に終る前兆のように感じたのである。

急行の出る九時が段段近づいて来ると共に、客がぼつぼつこの間に這入つて来て、中には老人や子供の交つた大勢の組もあるので、純一の写象はやつと陰気でなくなつた。どこかの学校の制服を着た、十五六の少年が燧炉の火を掻き起して、「皆ここへお出で」と云つて、弟や妹を呼んでいる。誰かが食事を誂える。誰かが誂えたものが来ないと云つて、小言を言う。

喧騒の中に時間が来て、誰彼となくぼつぼつ席を立ち始めた。クレムを食つた *lemme omnibus* もこの時棒立ちに立つて、蝙蝠傘を体に添えるようにして持つて、出て行く。純一の所へは、駅夫が切符を持つて催促に来た。

プラットフォオムは大ぶ雑遑していたが、純一の乗った二等室は、駅夫の世話にならずに、跡から這入つて来た客さえ、坐席に困らない位であった。向側に細君を連れて腰を掛けている男が、「却て一等の方が籠んでいるよ」と、細君に話していた。

汽車が動き出してから、純一は革包を開けて、風炉敷の中を捜して、本を一冊取り出した。青い鳥と同じ体裁の青表紙で、*Henry Bernstein* の *Le Voleur* である。つまらない物と云ふこと

は、知っていながら、俗受けのする脚本の、ドラマらしいよりは寧ろ演劇らしい処を、参考に見て置こうと思つて取り寄せて、そのまま読まずに置いたのであった。

象牙の紙切り小刀で、初めの方を少し切つて、表題や人物の書いてある処を齧つて、第一幕の対話を読んでいる。氣の利いた、軽い、唯骨折らずに、筋を運ばせて行くだけの対話だと云うことが、直ぐに分かる。退屈もしないが、興味をも感じない。

二三ペエジ読むと、目が懈くなつて来た。明りが悪いのに、黄いろを帯びた紙に、小さい活字で印刷してある、ファスケル版の本が、汽車の振動に連れて、目の前でちらちらしているのだから堪まらない。大村が活動写真は目に毒だと云つたことなどを思い出す。お負に隣席の商人らしい風をした男が、無遠慮に横から覗くのも氣になる。

読みさした処に、指を一本挟んで閉じた本を、膝の上に載せたまま、純一は暫く向いの窓に目を移している。汽車は品川にちよつと寄つたきりで、ずんずん進行する。闇のうちを、折折どこかの燈火が、流星のように背後へ走る。忽ち稍大きい明りが窓に迫つて来て、車ははためきながら、或る小さい停車場を通り抜ける。

純一の想像には、なんの動機もなく、ふいと故郷の事が浮かんだ。お祖母あ様の手紙は、定期刊行物のように極まつて来る。書いてある事は、いつも同じである。故郷の「時」は平等に、同じ姿に流れて行く。こちらから御返事をするのは、遅速がある。書く手紙にも、長短がある。しかもそれが遅くなり勝ち、短くなり勝ちである。優しく、親切に書こうとは心掛けているが、いつでも紙に臨んでから、書くことのないのに当惑する。ぼんやりした、捕捉し難い本能のような

ものの外には、お祖母様と自分とを結び付けている内生活というものが無い。しかしこれは手紙だからで、帰ってお目に掛ったら、お話をする事がないことはあるまいなどと思う。こう思うと、新年には一度帰れと、一度も続けて言つて来ているのに、この汽車を国府津で降りるのが、なんだか済まない事のように、純一は軽い良心の呵責を覚えた。

隣の商人らしい男が新聞を読み出したのに促されて、純一は又脚本を明けて少し読む。女主人公 Marie Louise の金をほしがらる動機として、裁縫屋 Paquin の勘定の嵩むことなどが、官能欲を隠したり顕したりする、夫との対話の中に、そつと投げ入れてある。謀計と性欲との二つを綱に交ぜにして、人を倦ませないように筋を運ばせて行くのが、作者の唯一の手柄である。舞台上に注ぐ目だけは、倦まないだろうと云うことが想像せられる。しかし読んでいる人の心は、何等の動揺をも受けない。つまりこれでは脚本と云うものの *didactic* な一面を、純粹に發展させたようなものだと思う。

目がむず痒いようになると、本を閉じて外を見る。汽車の進行する向きが少し變つて、風が煙を横に吹き靡けるものと見えて、窓の外の闇を、火の子が彗星の尾のように背後へ飛んでいる。目が直ると、又本を読む。この脚本の先が読みたくなるのは、丁度探偵小説が跡を引くのと同じである。金を盗んだマリイ・ルイズが探偵に見顯されそうになつたとたん、この女に懸想している青年 Bernard が罪を自分で引き受ける。憂悶の雲は忽ち無辜の青年と、金を盗まれた両親との上に掩い掛かる。それを余所に見て、余りに気軽にマリイ・ルイズは、闇に入って夫に戯れ掛かる。陽に拒み、陰に促して、女は自分の寝支度を夫に手伝わせる。半ば呑み半ば吐く對話

と共に、女の身の皮はたかなな二三八は箒はらを剥ぐ如くに、一枚々々剥がれる。所詮しよせん東京の劇場などで演ぜられる場では無い。女の紙入れが出る。「お前は生涯己おれの写真を持ち廻るのか」「ええ。生涯持ち廻ってよ」「ちょっと見たいな」「いじっちゃあ、いや」「なぜ」「どうしてもいや」「そう云われると見たくなるなあ」「直ぐ返すのなら」「返さなかつたら、どうする」「生涯あなたに物を言わないわ」「ちと覚束おぼつかないな」「わたし迷信があるの。それを見られると」「変だぞ。変だぞ。その熱心に隠すのが怪しい」「開けないで下さいよ」「開ける。間男まおとこの写真を見なくてはい」こんな対話の末、紙入れは開かれる。大金が出る。蒸暑い恋の詞ことばが、氷のように冷たい嫌疑の詞になる。純一は目の痛むのも忘れて、インセルへ遣られる青年を気の毒がって、マリイ・ルイイズが白状する処まで、一息に読んでしまった。そして本を革包かばんに投げ込んで、馬鹿にせられたような心持になっていた。

間もなく汽車が国府津に着いた。純一はどこも不案内であるから、余り遅くならないうちに泊って、あすの朝箱根へ行こうと思った。革包と膝掛とを自分に持って、ぶらりと停車場を出て見ると、図抜けて大きい松の向うに、静かな夜の海が横たわっている。

宿屋はまだ皆開いていて、燈火ともしびの影に女中の立ち働いているのが見える。手近な一軒につと這入って、留めてくれと云った。甲斐々々かひがしい支度をした、小綺麗な女中が、忙しそうな足を留めて、玄関に立ちはたがって、純一を頭のとっぺんから足の爪尖つまさきまで見卸して、「どこも開いておりません、お気の毒様」と云ったきり、くるりと背中を向けて引っ込んでしまった。

次の宿屋に行く。同じようにことわられる。三軒目も四軒目も同じ事である。インパネスを着

て、革包と膝掛とを提げた体裁は、余り立派ではないに違いない。しかし宿屋で気味を悪がって留めない程不都合な身なりだと云うでもあるまい。一人旅の客を留めないとか云う話が、いつどこで聞いたともなく、ぼんやり記憶には残っているが、そんな事が相応に繁華な土地に、今あるうとは思われない。現に東京では、なんの故障もなく留めてくれたではないか。

不思議だとは思うが、誰に問うて見ようもない。お伽話にある、魔女に姿を変えられた人のような気がしてならないのである。

純一はとうとう巡査の派出所に行つて、宿泊の世話をして貰いたいと云つた。巡査は四十ばかりの、*regnatique*な、寝惚けたような、口数を利かない男で、純一が不平らしく宿屋に拒絶せられた話をするのを聞いても、当り前だとも不当だとも云わない。縁の焦げた火鉢に、股火をして當っていたのが、不精らしく椅子を離れて、机の上に置いてあつた角燈を持って、「そんならこっちへお出でなさい」と云つて、先きに立つた。

巡査が純一を連れて行つて立ち留まつたのは、これまで純一が叩いたような、新築の宿屋と違つて、壁も柱も煤で真っ黒に染まつた家の門であつた。もう締めである戸を開けさせて、巡査が何か掛け合つた。話は直ぐに纏まつたらしい。中から頭を角刈にして、布子の下に湯帷子を重ねて着た男が出て来て、純一を迎え入れた。巡査は角燈を光らせて歸つて行つた。

純一は真っ黒な、狭い梯子を踏んで、二階に上ぼつた。上り口に手摩りが繞らしてある。二階は縁側のない、十五六畳敷の広間である。締め切つてある雨戸の外には、建具が無い。角刈の男は、行燈の中に石油ランプを嵌め込んだのを提げて案内して来て、それを古畳の上に置いて、純

一の前に膝を衝いた。

「直ぐにお休みなさいませうか。何か御用は」

純一は唯とにかく屋根の下には這入られたと思っただけで、何を考える暇もなく、茫然としていたが、その屋根の下に這入られた喜を感じると共に、報酬的に何か言い付けた方が好かろうと、問われた瞬間に思い付いた。

「何か肴があるなら酒を一本付けて来ておくれ。飯は済んだのだ」

「肴がございます」

「それで好い」

角刈の男は、形ばかりの床の間の傍の押入れを開けた。この二階にも床の間だけはあるのである。そして布団と夜着と括り枕とを出して、そこへ床を展べて置いて、降りて行った。

純一は衝つ立ったままで、暫く床を眺めていた。座布団なんと云う贅品は、この家では出さないで、帽をそこへ抛げたまま、まだ据わらずにいたのである。布団は縞が分からない程よごれている。枕に巻いてある白木綿も、油垢で鼠色に染まっている。

純一はおそるおそる敷布団の上に据わって、時計を出して見た。もう殆ど十二時である。なんとも名状し難い不愉快が、若い、弾力に富んでいる心をさえ抑え附けようとする。このきたない家に泊るのが不愉快なのではない。境遇の懐子たる純一ではあるが、優柔な *effemine* な人間にはなりたくない、平生心掛けている。折々はことさらに *Sparta* 風の生活をして見ようと思ふこともある位である。しかしそれは自分の意志から出て、進んで困厄に就くのでなくては厭だ。

他働的に、周囲から余儀なくせられて、窮屈な目に遭いたくはない。最初に旅宿をことわられてから、或る意地の悪い魔女の威力が自分の上に加わっているように、一步一步と不愉快な世界に陥って来たように思われる。それが厭でならない。

角刈の男が火鉢を持って上がって来た。藍色の、嫌に光る釉の掛かった陶器の円火鉢である。跡から十四五の袴を掛けた女の子が、詭えた酒肴を持って来た。徳利一本、猪口一つに、腥스러운切身が一皿添えてある。女の子はこの品々を載せた盆を枕許に置いて、珍らしそうに純一の蹙めた顔を覗いて見て、黙って降りて行った。男は懐から帳面を出して、矢立の筆を手に持って、「お名前を」と云った。純一は東京の宿所と名前とを言ったが、純の字が分からないので、とうとう自分で書いて遣った。

純一はどうして寝ようかと考えた。眠たくはないが、疲労と不愉快とで、頭の心が痛む。とにかく横にだけはなりたい。そこで袴を脱いで、括り枕の上にそれを巻いた。それから駱駝の膝掛を二つに折って、その二枚の間に夜着の領の処を挟むようにして被せた。こうすれば顔や手だけは不潔な物に障らずに済む。

純一は革包を枕許に持って来て置いた。それから徳利を攫んで、燗酒を一口ぐいと飲んで、インベネスを着たまま、足袋を穿いたまま、被せた膝掛のいざらないように、そっと夜着の領を持って、ごろりと寝た。暫くは顔がほてって来て、ひどく動悸がするようであったが、いつかぐっすり寐てしまった。

いくら寐たか分からない。何か物音がすると云うことを、夢現の間に覚えていた。それから話

声が聞えた。しかも男と女の話しである。そう思うと同時に純一は目が覚めた。「お名前は」男の声である。それに女が返事をする。愛知県なんとか郡なんとか村何の何兵衛の妹何と云っているのは、若い女の声である。男は降りて行った。

知らぬ女と二人で、この二階に寝るのだと思うと、純一は不思議なような心持がした。しかし間の悪いのと、気の毒なのとで、その方を見ずに、じっとしていた。暫くして女が「もしもし」と云った。慥かに自分に言ったのである。想うに女の方では自分の熟睡していたところへ来て、目を醒ました様子から、わざと女の方を見ずにいる様子まで、すっかり見て知っているのらしい。純一はなんと云って好いか分からないので、黙っていた。女はこう云った。

「あの東京へ参りますのですが、上りの一番は何時に出ますでしょうか」

純一は強情に女の方を見ずに答えた。「そうですね。僕も知らないのですが、革包の中に旅行案内があるから、起きて見て上げましょうか」

女は短い笑声を漏した。「いいえ。それでは宜しゅうございます。どうせ起して貰うように頼んで置きましたから」

こう云ったきり、女は黙ってしまった。純一はやはり強情に見ずにいる。女の寐附かれないらしい様子で、度々寝返りをする音が聞える。どんな女か見たいとも思ったが、今更見るのは弥間が悪いので見ずにいる。そのうちに純一は又寐入った。

朝になって純一が目を醒ました時には、女はもういなくなつた。こんな家で手水を使う気にもなられないので、急いで勘定をして、この家を飛び出した。角刈の男が革包を持って附いて来そう

にするのをもちとわった。この家との縁故を、少しも早く絶ちたいように思ったのである。

湯本の朝日橋まで三里の鉄道馬車に身を托して、襦袢をちぎって持て来るような朝風に、洗わずに出た顔を吹かせつつ、松林を穿ち、小田原の駅を貫いて進むうちに、悪夢に似た国府津の一夜を、純一の写象は繰り返して見て、同じ間に寝て、詞を交しながら、とうとう姿を見ずにしまった、不思議な女のあったのを、せめてもの記念だと思った。奉公に都へ出る、醜い女であったかも知れない。それはどうでも好い。どんな女とも知らずに落ち合つて、知らずに別れたのを面白く思つたのである。

鉄道馬車を降りてから、純一はわざと坂井夫人のいる福住を避けて、この柏屋に泊つた。国府津に懲りて拒絶せられはしないかと云う心配もあったが、余り歓迎しただけで、小さい部屋を一つ貸してくれた。去就の自由がまだあるのなんのと、覚束ない分疏をして見るものの、いかなる詭弁的見解を以てしても、その自由の大きさが距離の反比例に加わるとは思われない。湯を浴びて来て、少し気分が直つたので、草包の中の本や雑誌を、あれかこれかと出しては見たが、どうも真面目に読み初めようと云う落着きを得られなかった。

二十三

福住へ行こうか、行くまいか。これは純一が自分で自分を弄んでいる仮設の問題である。しかし意識の関の下では、それはもう疾く解決が附いている。肯定せられている。若しこの場合

に猶問題があるとすれば、それは時間の問題に過ぎないだろう。

そしてその時間を縮めようとしている或る物が存じている。それは小さい記念の数々で、ふと心に留まった坂井夫人の挙動や、詞と云う程でもない詞である。Un geste, un mot inattenduがある。この物は時が立っても消えない。消えないどころではない。次第に璞から玉が出来るように、記憶の中で浄められて、周囲から浮き上がって、光の強い、力の大きいものになっている。本を読んでいても、そのペエジと目との間に、この記念が投射せられて、今まで迎って来た意味の上に、破り棄てることの出来ない面紗を被せる。

この記念を忘れさせてくれる Letheの水があるならば、飲みたいとも思つて見る。そうかと思つと、又この記念位のもは、そつと棄てずに愛護して置いて、我感情の領分に、或る eleagnance要素があるようにしたつて、それがなんの煩累をなそうぞと、弁護もして見る。要するに苦惱なるが故に芟り除かんと欲し、甘き苦惱なるが故に割愛を難するのである。

純一はこう云う声が自分を嘲るのを聞かすにはいられなかつた。お前は東京からわざわざ箱根へ来たではないか。それがなんで柏屋から福住へ行くのを憚るのだ。これは純一が為めには、随分残酷な声であつた。

昨夜好く寐なかつたからと、純一は必要のない嘘を女中に言つて、午食後に床を取らせて横になつてゐるうちに、つい二時間ばかり寐てしまった。

目を醒まして見ると、一人の女中が火鉢に炭をついでいた。色の蒼白い、美しい女である。今まで飯の給仕に来たり、昼寐の床を取りに来たりした女中とはまるで違つて、着物も絹物を着て

いる。

「あの、新聞を御覧になりますなら、持って参りましょう」

俯向いた顔を挙げてちよいと見て、羞を含んだような物の言いようをする。

「ああ。持って来ておくれ」

別に読みたいとも思わずに、唯女の問うに任せて答えたのである。

女はやはり俯向いて、なまめかしい態度をして立つて行った。

純一が起きて火鉢の側へ据わったところへ、新聞を二三枚持って来たのは、今立つて行った女ではなかった。身なりも悪く、大声で物を言つて、なんの動機もなく、不遠慮に笑う、骨格の逞しい、並の女中である。純一はこの家に並の女中の外に、特別な女中の置いてあるのは、特別な用をさせる為めであるかと察したが、それを穿鑿して見ようとも思わなかった。

純一は一枚の新聞を手にとって、文芸欄を一寸見て、好くも読まずに下に置いた。大村の謂うクリクに身を置いていない純一が為めには、目蓋いを掛けたように一方に偏した評論は何の価値をも有せない。

それから夕食前に少し散歩をして来ようと思つて、ぶらりと宿屋を出た。石に触れて水の激する早川の岸を歩む。片側町に、宿屋と軒を並べた鍍匠の店がある。売っているのは名物の湯本細工である。店の上さんに、土産を買えと勧められて、何か嵩張らないものをと、楊枝入れやら、煙草箱やらを、二つ三つ選り分けていた。

その時何か話して笑いながら、店の前を通り掛かる男女の浴客があつた。その女の笑声が耳馴

れたように聞えたので、店の上さんが吊銭の勘定をしている間、おもちゃの独楽を手に取って眺めていた純一が、ふと頭を挙げて声の方角を見ると、端なく坂井夫人と目を見合せた。

夫人は紺飛白のお召縮緬の綿入れの上に、青磁色の鶉縮緬に三つ紋を縫わせた羽織を襲ねて、髪を銀杏返しに結って、真珠の根掛を掛け、黒籠甲に蝶貝を入れた櫛を挿している。純一の目には唯しつとりとした、地味な、しかも媚のある姿が映ったのである。

夫人の朗かな笑声は忽ち絶えて、ジスレニニな愛敬笑が目に湛えられた。夫人は根岸で別れてからの時間の隔たりにも、東京とこの土地との空間の隔たりにも頓着しないらしい、極めて無造作な調子で云った。

「あら。来ていらっしやるのね」

純一は「ええ」と云った積りであったが、声はいかにも均衡を失った声で、しかも殆ど我耳にさえ聞えない位低かった。

夫人は足を留めて連れの男を顧みた。四十を越した、巖乗な、肩の廉張った男である。器械刈にした頭の、筋太な、とげとげしい髪には、霜降りのように白い処が交っていて、顔だけつやつやして血色が好い。夫人はその男にこう云った。

「小泉さんと云う、文学をなさる方でございます」それから純一の方に向けて云った。「この方は画家の岡村さんですの。やはり福住に泊っていらっしやいます。あなたなぜ福住へいらっしやらなかったの。わたくしがそう申したじゃありませんか」

「つい名前を忘れたもんですから、柏屋にしました」

「まあ忘れっぽくていらっしやることね。晩にお遊びにいらっしやいました」言い棄てて、夫人が歩き出すと、それまで二王立にわうたちに立って、巨人が小人島こじんじまの人間を見るように、純一を見ていた岡村画伯は、「晩に来給え」と、飴響あまなづなのように同じ事を言っ、夫人の跡に続いた。

純一は暫く二人を見送っていた。その間店の上さんが吊銭を手に載せて、板縁いたのりに膝ひざを衝ついて待っていたのである。純一はそれに気が附いて、小さい銀貨に大きい銅貨の交まじったのを慌あわてて受け取って、鱷皮うたがひの蝦蟇まぐも口にしまつて店を出た。

対岸に茂っている木々は、Cathayaカタルパに仮装をして、脚ばかり出した群のように、いつの間にか夕霧に包まれてしまつて駅路の所々にはぼつりぼつりと、水力電氣の明りが附き始めた。

純一はぼんやりして宿屋の方へ歩いている。或る分析し難い不愉快と、忘れていたのを急に思い出したような寂しさとが、頭を一ぱいに填みめてゐる。そしてその不愉快が嫉妬しつとではないと云うことを、純一の意識は証明しようとするが、それがなかなかむずかしい。なぜと云うに、あの湯本細工の店で邂逅かいこうした時、もし坂井夫人が一人であつたなら、この不愉快はあるまいと思ふからである。純一の考はざつとこうである。とにかくあの岡村という大男の存在が、己おのれを刺戟しげきしたには相違ない。画家の岡村と云えば、四条派の画で名高い大家だということを、己も聞いている。どんな性質の人かは知らない。それを強しいて知りたくもない。唯あの二人を並べて見たとき、なんだか夫婦のようだと思つたのが、慥たかに己の感情を害した。そう思つたのは、決して僻目ひがめではない。知らぬ人の冷澹れいたんな目で見ても、同じように見えるに違ちがひない。早い話が、あの店の上さんだつて、若しあの二人に対して物を言うことになつたら、且那樣奥様と云つただらう。己は何も

あんな男を羨みなんかしない。あの男の地位に身を置きたくはない。しかし癩に障る奴だ。こんな風に岡村を憎む念が起つて、それと同時に坂井夫人に対しては暗黒な、しかも鋭い不平を感じる。不義理な、約束に背いた女だとさえ云いたい。しかし夫人は己にどんな義理があるか。夫人の守らなくてはならない約束はどんな約束であるか。この問には答うべき詞が一つもないのである。どうしてもこの感じは嫉妬にまぎらわしいようである。

そしてこの感じに寂しさが伴っている。厭な、厭な寂しさである。大村に別れた後に、東京で寂しいと思ったのなんぞは、まるで比べものにならない。小さい時、小学校で友達が数人首を集めて、何か囁き合っていて、己がひとり遠くからそれを望見したとき、稍これに似た寂しさを感じたことがある。己はあの時十四位であつた。丁度同じ学校に、一つ二つ年上で瘦ぎすの、背の高い、お勝という女生徒がいた。それが己を憎んで、動もすればこう云う境地に己を置いたのである。いつも首を集めて囁き合う群の真中には蝶々鬚だけ外の子供より高いお勝がいて、折々己の方を顧みる。何か非常な事を己に隠して遣っているらしい。その癖群に加わっている子供の一人に、跡からその時の話を聞いて見れば、なんでもない、己に聞せても差支ない事である。己はその度毎に、お勝の技術に敬服して、好くも外の子供を糾合してあんな omnibus の影を幻出すことだと思つた。今己がこの事を思い出したのは、寂しさの感じから思い出したのであるが、つくづく考えて見れば、あの時の感じも寂しさばかりではなかつたらしい。お勝は嫉妬の萌芽を己の心に植え附けたのではあるまいか。

純一はこんな事を考えながら歩いていて、あぶなく柏屋の門口を通り過ぎようとした。幸に内

から声を掛けられたので、気が附いて戸口を這入って、腰を掛けたり立ったりした二三人の男が、帳場の番頭と話をしている、物騒がしい店を通り抜けて、自分の部屋の障子を明けた。女中がひとり背後から駈け抜けて、電燈の鍵を振った。

* * *

夕食をしまつて、純一は昼間見なかつた分の新聞を取り上げて、引つ繰り返して見た。ふと「色糸」と題した六号活字の欄に、女の写真が出ているのを見ると、その首の下に横に「榮屋おちやら」と書いてあつた。印刷インクがぼつてりとにじんできて、半分隠れた顔ではあるが、確かに名刺をくれた柳橋の芸者である。

記事はこうである。「榮屋の抱えおちやら(六十)は半玉の時から男狂いの噂が高かつたが、役者は字左衛門が鼻根で性懲のない人形喰である。但し慾気のないのが取柄とは、外からの側面観で、同家のお辰姉えさんの強意見は、動ともすれば折檻賽いの手荒い仕打になるのである。まさか江戸時代の柳橋芸者の遺風を慕うのでもあるまいが、昨今松さんという絆纏着の兄いさんに熱くなつて、お辰姉えさんの大目玉を喰い、しよげ返つているとはお氣の毒」

読んでしまつて純一は覚えす微笑んだ。縦い性欲の爲めにもせよ、利を図ることを忘れることの出来る女であつたと云うのが、殆ど嘉言善行を見聞きしたような慰めを、自分に与えてくれるのである。それは人形喰いという詞が、頗る純一の自ら喜ぶ心を満足せしめるのである。若い心は弾力に富んでいる。どんな不愉快な事があつて、自己を抑圧していても、聊かの弛みが生ずる

や否や、弾力は待ち構えていたようにそれを機として、無意識に元に帰そうとする。純一はおちやらの記事を見て、少し気分を恢復した。

丁度そこへ女中が来て、福住から来た使の口上を取り次いだ。お暇ならお遊びにいらっしやいと、坂井さんが仰ったと云うのである。純一は躊躇せずに、只今伺いますと云えと答えた。思うに純一は到底この招きに応ぜずには出来ないことは出来なかつたであらう。なぜと云うに、縦しや強ねてことわって見たい情はあるとしても、卑怯らしく退嬰の態度を見せることが、残念になるに極まっているからである。しかし少しも逡巡することなしに、承諾の返事をさせたのは、色糸のおちやらが坂井夫人の為に緩頰の労を取つたのだと云つても好い。

純一は直ぐに福住へ行った。

女中に案内せられて、万翠楼の三階の下を通り抜けて、奥の平屋立ての座敷に近づくと、電燈が明るく障子に差して、内からは笑声が聞えている。口癖の嘶くような笑声である。岡村だ나と思うと同時に、このまま引き返してしまいたいような反感が本能的に起つて来る。

箱根に於ける坂井夫人。これは純一の空想に度々画き出されたものであつた。鬱蒼たる千年の老木の間に、温泉宿の離れ座敷がある。根岸の家の居間ですら、騒がしい都会の趣はないのであるが、ここは又全く人間に遠ざかつた境で、その静寂の中に Odine のような美人を見出すだらうと思つた。それに純一は今先ず Faune の笑声を聞かなくてはならないのである。

廊下に出迎えた女を見れば、根岸で見たしづ枝である。

「お待ちなざつていらっしやいますから、どうぞこちらへ」ここで客の受取り渡しがある。前哨

線が張つてあるようなものだ、純一は思った。そして何物が掩護せられてあるのか。その神聖なる場所は、岡村という男との差向いの場所ではないか。根岸で嬉しく思ったことを、ここでは直ぐに厭に思う。地を易うれば皆然りである。

次の間に入って跪いたしづ枝が、「小泉様がお出でになりました」と案内をして、徐かに隔ての障子を開けた。

「さあ、こつちへ這入り給え。奥さんがお待兼だ」声を掛けたのは岡村である。さすがに主客の行儀は好い。手あぶりは別々に置かれて、茶と菓子とが出る。しかし奥さんの傍にある置炬燵は、又純一に不快な感じを起させた。

しづ枝に茶を入れ換えることを命じて置いて、奥さんは純一の顔をじっと見た。

「あなた、いつから来ていらっしやいますの」

「まだ来たばかりです。来ると直ぐあなたにお目に掛かったのです」

「柏屋には別品があるでしょう」と、岡村が詞を挟んだ。

「どうですか。まだ来たばかりですから、僕には分かりません」

「そんな事じゃあ困るじゃないか。我輩なんぞは宿屋に着いて第一に着眼するのはそれだね」声と云い、詞と云い、大ぶ晩酌が利いているらしい。

「世間の人が皆岡村さんのようでは大変ですわね」奥さんは純一の顔を見て、庇護するように云った。

岡村はなかなか黙っていない。「いや、奥さん。そうではありませんよ。文学者なんというも

のは、画かきよりは盛んな事を遣るのです」これを冒頭に、岡村の名を知っている、若い文学者の噂が出る。近頃そろそろ出来掛かった文芸界の Bohémiens が、岡村の交際している待合のお上だの、芸者だのの目に、いかに映じているかと云うことを聞くに過ぎない。次いで話は作品の上になんぞと、「蒲団」がどうの、「煤烟」がどうのと云うことになる。意外に文学通だと思って、純一が聞いて見ると、どれも読んではいないのであった。

純一にはこの席にすることが面白くない。しかしおとなしい性なので厭な顔をしてはならないと思つて、努めて調子を合せている。その間にも純一はこう思つた。世間に起る、新しい文芸に對する非難と云うものは、大抵この岡村のような人が言い広めるのだらう。作品を自分で読んで見て、かれこれ云うのではあるまい。そうして見れば、作品そのものが社会の排斥を招くのではなくて、クリク同士の攻撃的批評に、社会は雷同するのである。発売禁止の処分だけは、役人が託いて申し立てるのだが、政府が自然主義とか個人主義とか云つて、文芸に干渉を試みるようになるのは、確かに攻撃的批評の齎した結果である。文士は自己の建築したものの下に、坑道を穿つて、基礎を危くしていると云つても好い。蒲団や煤烟には、無論事実問題も伴つていた。しかし煤烟の種になつてゐる事実こそは、稍外間へ暴露した行動を見たのであるが、蒲団やその外の実問題は、大抵皆文士の間で起したので、所謂六号文学のすっぱ抜きに根ざしてゐるのではない。

しづ枝が茶を入れ換えて、主客三人の茶碗に注いで置いて、次へ下がった跡で、奥さんが云つた。

「小泉さん。あなた余りおとなしくしていらっしやるから、岡村さんが勝手な事ばかり仰おつしまいますわ。あなたの方でも、画かきの悪口でも言ってお上げなされると好いわ」

「まあ僕は廃やしましよう」純一は笑を含んでこう云った。しかしこの席に這入はってから、動おもすれば奥さんの自分を庇護ひごしてくれるのが、次第に不愉快に感ぜられて来た。それは他人あしらいにせられると思うからである。その反面には、奥さんが岡村に対して、遠慮することを須もいえない程の親しさを示しているという意味がある。極言すれば、夫婦気取りでいるとも云いたいのである。

岡村が純一に、何か箱根で書く積りかと問うたので、純一はありのままに、そんな企ては持つていないと云った。その時奥さんが「小泉さんなんぞはまだお若いのですから、そんなにお急ぎなさらなくても」と云ったが、これも庇護の詞になったのである。純一は稍すこ反抗はんかしたいような気になって、「先生は何かおかきですか」と問い返した。そうすると奥さんが、岡村は今年の夏万翠楼ばんすいろうの襖ふすまや衝立ついでを大抵かいてしまったのだと云った。それが又岡村との親しさを示すと同時に、岡村と奥さんとが夏も福住で一しょにいたのではないかと云う問題が、端なく純一の心に浮んだ。

純一はそれを慥たしかめたいような心持がしたが、そんな問を発するのは、人に言いたくない事を言わせるに当るように思われるので、気を兼ねて詞をそらした。

「箱根は夏の方が好いでしょね」

「そうさ」と云って、岡村は無邪気に暫く考える様子であった。そして何か思い出したように、額ぬか

骨の張った大きい顔に笑を湛えて、詞を続いた。「いや。夏が好くもないね。今時分は露が一ぱい立ち籠めて、明りを覗って虫が飛んで来て為様がないからね。それ、あの兜虫のような奴さ。東京でも子供がかなぶんぶんと云って、掴まえておもちゃにするのだ。あいつが来るのだね」

奥さんが傍から云った。「それは本当に大変でございますの。障子を締めると、飛んで来て、ばたばた紙にぶっ附かるでしょう。そしておっこって、廊下をがさがさ這い廻るのを、男達が撈って、手桶の底に水を入れたのを持って来て、その中へ叩き込んで運んで行きますの」

純一は聞きながら、二人は一しよにそう云う事に出逢ったと云うのだろうか、それとも岡村も奥さんも偶然同じ箱根の夏を知っているに過ぎないのだろうか、また幾分の疑いを存じている。

岡村は少し興に乗じて来た。「随分かなぶんぶんには責められたね。しかし吾輩は復讐を考えられている。あいつの羽を切って、そいつに厚紙で拵えた車を、磐石糊という奴で張り付けて曳かせると、いつまでも生きていて曳くからね。吾輩は画かきを廃して、辻に出てかなぶんぶんの車を曳く奴を、子供に売って遣ろうかと思っている」こう云って、独りで笑った。例の嘶くように。

「磐石糊というのは、どんな物でございますの」と、奥さんが問うた。

「磐石糊ですか。町で幾らも売っていきまさあ」

「わたくしあなたが上野の広小路あたりへ立って、かなぶんぶんを売っていらっしやるところが拝見しようございますわ」

「きつと盛んに売れますよ。三越なんぞで児童博覧会だのなんのと云って、いろんなおもちゃを

陳列して見せていますが、まだ生きたおもちゃと云うのはないのですからね」

「直ぐに人が真似をいたしはしませんでしようか。戦争の跡に出来たロシア麩包シニのように」

「吾輩専売にします」

「生きた物の専売がございませうか」

「さあ、そこまでは吾輩まだ考えませんでした」岡村は又笑った。そして言い足した。「とにかくうるさい奴ですよ。大抵かがり箒かきに飛び込んで、焼け死んだ跡が、あれ程遣つて来るのですからね」

「ほんとにあの箒は美しゅうございましたわね」

純一ははつと思つた。この「美しゅうございました」と云つた過去の語法は、二人が一しよに箒を見たのだと云うことを *imperfective* に証明しているのである。情況から判断すれば、二人が夏を一しよに暮らしたと云うことは、もう疾とどくくに遺憾なくたしか定められているのであるが、純一はそれを問わないで、何等かの方法を以て、直接に知りたいと、悟性を鋭く働かせて、對話に注意していたのであつた。

純一の不快な心持は、急劇に増長して来た。そしてこの席にいる自分が車の第三輪ではあるまいかという疑いが起つて、それが間断なく自分を刺戟して、とうとう席に安んぜざらしむるに至つた。

「僕は今夜はもうお暇いとまをします」純一は激した心を声にあらわすまいと努めてこう云つて、用あげに時計を出して見ながら座を起つた。実は時計の鍼はりはどこにあるか、目にも留まらず意識にも上らなかつたのである。

二十四

福住の戸口を足早に出て来た純一は、外へ出ると歩度を緩めて、万翠楼の外囲いに沿うて廻つて、坂井夫人のいる座敷の前に立ち留まった。この棟だけ石垣を高く積み上げて、中二階のように立ててある。まだ雨戸が締めてないので、燈火の光が障子にさしている。純一は暫く障子を見詰めていたが、電燈の位置が人の据わっている処より、障子の方へ近いと見えて、人の影は映っていないかった。

暇乞をして出る時には、そんな事を考える余裕はなかったが、今になって思えば、自分が座敷を立つ時、岡村も一しよに暇乞をすべきではなかっただろうか。それとも子供のような自分なので、それ程の遠慮もしなかったのか。それとも自分を見くびる見くびらないに拘らず、岡村は夫人と遠慮なんぞをする必要の全く無い交際をしているのか。純一はこんな事を気に掛けて、明りのさしている障子を目守っている。今にも岡村の席を起つて帰る影が映りはしないかと待つのである。そして純一の為めには、それが気に掛かり、それが待たれるのが腹が立つ。恋人でもなんでもない夫人ではないか。その夫人の部屋に岡村がいつまでいようと好いではないか。それをなんで自分が気にするのか。なんと云う腑甲斐ない事だろうと思つくと、憤慨に堪えない。

純一は暫く立っていたが、誰に恥じるともなく、うしろめたいような気がして来たので、ぶらぶら歩き出した。夜に入つて一際高くなつた、早川の水の音が、純一が頭の中の乱れた情緒の伴

奏をして、昼間感じたよりは強い寂しさが、虚に乗ずるように襲って来る。

柏屋に帰った。戸口を這入る時から聞えていた三味線が、生憎純一が部屋の上で鳴っている。女中が来て、「おやかましゅうごさいましゅう」と挨拶をする。どんな客かと問えば、名古屋から折々見える人だと云う。来たのは無論並の女中である。特別な女中は定めて二階の客をもてなしているのであろう。

二階はなかなか賑やかである。わざわざ大晦日の夜を騒ぎ明かす積りで来たのかも知れない。三味線の音が絶えずする。女が笑う。年増らしい女の声で、こんな呪文のようなものを唱える。「べろべろの神さんは、正直な神さんで、おささの方へお向きやれ。どこへ盃さあしましよ。ここ等か、ここ等か」この呪文は繰り返し繰り返して唱えられる。一度唱える毎に、誰かが杯を受けるのであろう。

純一は取ってある床の中に潜り込んで、じっとしている。枕に触れて、何物をか促し立てるように、頸の動脈が響くので、それを避けようと思つて寝返りをする。その脈がどうしても響く。動悸が高まっているのであろう。それさえあるに、べろべろの神さんがしゅうねく崇つて、呪文はいよいよ高く唱えられるのである。

純一は何事をも忘れて寐ようと思つたが、とても寐附かれそうにはない。過度に緊張した神経が、どんな微細な刺戟にも異様に感応する。それを意識が丁度局外に立つて観察している人の意見のように、「こんな頭に今物を考えさせたつて駄目だ、どうにかして寐かす事だ」と云つて促している。さて意識の提議するところに依ると、純一たるものはこの際行うべき或る事を決定し

て、それを段落にして、無理にも気を落ち着けて寐るに若くはない。その或る事は巧緻でなくとも好い。頗る粗大な、脳髓に余計な要求をしない事柄で好い。却て愈々粗大だけ愈々適当であるかも知れない。

例之ば箱根を去るなんぞはどうだろう。それが好い。それなら断然たる処置であつて、その癖温存的工夫を要する今の頭を苦めなくて済む。そして種々の不愉快を伝達している幾条の電線が一時に切断せられてしまふのである。

箱根を去るのが実に名案である。これに限る。そうすれば、あの夫人に見せ附けて遣ることが出来る。己だつてそう馬鹿にせられてばかりはいないということを、見せ附けて遣ることが出来る。いやいや。そんな事は考えなくても好い。夫人がなんと思おうと構うことは無い。とにかく箱根を去る。そしてこれを機会にして、根岸との交通を断つてしまふ。あの質のようになつていゝるラシイヌの集を小包で送り返して遣る。早く谷中へ帰つて、あれを郵便に出してしまいたい。そうしたらさぞさっぱりするだろう。

こう思うと、純一の心は濁水に明礬を入れたように、思いの外早く澄んで来た。その濁りと云うものの中には、種々の籠み入つた、分析し難い物があるのを、かれこれの別なく、引きくるめて沈澱させてしまつたのである。これは夜の意識が仮初に到達した安心の境ではあるが、この境が幸に黒甜郷の近所になつていたと見えて、べろべろの神さんの相変らず跳梁しているにも拘らず、純一は頭を夜着の中に埋めて、寐入ってしまった。

翌朝純一は早く起きる積りでもいなかつたが、夜明近く物音がして、人の話声が聞えたので、

目を醒まして便所へ行つた。そうすると廊下で早立ちの客に逢つた。洋服を着た、どちらも四十恰好の二人である。荷物を玄関に運ぶ宿の男を促しながら、外套の袷の底に縮めた首を傾け合つて、忙しそうに話をしている。極めて真面目で、極めて窮屈らしい態度である。純一は、なぜゆうべのような馬鹿げた騒ぎをするのだと云つて見たい位であつた。

便所からの帰りに、ふと湯に入ろうかと思つて、共同浴室を覗いて見ると、誰か一人這入つてゐる。蒸気が立ち籠めて、好くは見えないが、湯壺の側に蹲つてゐる人の姿が女らしかった。そしてその姿が、人のけはいに驚かされて、急いで上がろうとするらしく思われた。純一は罪を犯したような気がして、そつとその場を逃げて自分の部屋に歸つた。

部屋には歸つて見たが、早立ちの客の外は、まだ寐静まつてゐる時なので、火鉢に火も入れてない。純一は又床に這入つて、強いて寐ようとも思わずに、横になつていた。

目がはつきり冴えて、もう寐られそうにもない。そしてゆうべ床に這入つてから考えた事が、糸で手練り寄せられるように、次第に細かに心に浮んで来る。

夜疲れた後に考えた事は、翌朝になつて見れば、役に立たないと云う経験は、純一もこれまでしてゐるのだが、ゆうべの決心は今頭が直つてから繰り返して見ても、やはり価値を減ぜないようである。畜に価値を減ぜないばかりでは無い。明かな目で見れば見る程、大胆で、heroiqueなところが現れてくるかとさえ思われる。今から溯つて考えて見れば、ゆうべは頭が鈍くなつていたので、左顧右眄することが少く、種々な思慮に掣肘せられずに、却つて早くあんな決心に到着したかとも推せられるのである。

純一はきょうきつと実行しようとするやうと自ら誓った。そして心の中にも体の中にも、これに邪魔をしようとする物が動き出さないのを見て、最終の勝利を勝ち得たように思った。しかしこれは一瞬の感情が力強く浮き出せば、他の感情が暫く影を斂めるのであった。後になってから、純一は幾度か似寄った誘惑に遭って、似寄った奮闘を繰り返して、生物学上の出来事が潮の差引のように往來するものだと言ふことを、次第に切実に覚知して、太田錦城と云う漢学の先生が、「天の風雨の如し」と原始的な譬喩を下したのを面白く思った。

さてきょう実行すると極めて、心が落ち着くと共に、潜っている温泉宿の布団の中へ、追憶やら感想やら希望やら過現未三つの世界から、いろいろな客が音信れて来る。国を立てて東京へ出てから、まだ二箇月余りを閲したばかりではある。しかし東京に出たら、こうしようと、国で思っていた事は、悉く泡沫の如くに消えて、積極的にはなんのし出来したわざも無い。自分だけの力では得ない事を、人にたよってしようと云うのは、おおかた空頼めになるものと見える。これに反して思い掛けなく接触した人から、種々な刺戟を受けて、蜜蜂がどの花からも、変った露を吸うように、内に何物かを蓄えた。その花から花へと飛び渡っている間、国にいた時とは違って、己は製作上の拙い試みをせずしていた。これが却て己の爲めには薬になつてはいはすまいか。今何か書いて見たら、書けるようになってくるかも知れない。国にいた時、碁を打つ友達がいた。或る会の席でその男が、打たずにいる間に棋が上がると云う経験談をすると、教員の山村さんが、それは意識の闕の下で、棋の稽古をしていたのだと云った事がある。今書いたら書けるかも知れない。そう思うとこの家で、どこかの静かな部屋を借りて、久し振に少し書き始めて見たい

ものだ。いや。そうだっけ。それでは切角のあの実行が出来ない。ええ糞。坂井の奥さんの岡村だのと云う奴が厄介だな。大村の言草ではないが、Der Teufel hole seiだ。好いわ。早く東京へ帰って書こう。

純一は夜着をはね退けて、起きて敷布団の上に胡坐を掻いて、火鉢に火のないのを忘れて、考えている。いよいよ書こうと思ひ立つと共に、現在の自分の周囲も、過去に自分の閱して来た事も、総て価値を失ってしまった、咫尺の間の福住の離れに、美しい肉の塊が横わっているのがなんだと云うような気がするのである。紅が両の頬に潮して、大きい目が輝いている。純一はこれまで物を書き出す時、興奮を感じたことは度々あったが、今のような、夕立の前の雲が電気に飽きているような、気分充実を感じたことは無い。

純一が書こうと思っている物は、現在の流行とは少し方角を異にしている。なぜと云うに、その sujet は国の亡くなったお祖母あさんが話して聞せた伝説であるからである。この伝説を書くとうと云うことは、これまでも度々企てた。形式も種々に考えて、韻文にしようしたり、散文にしようしたり、叙事的に Faubert の三つの物語の中の或る物のような体裁を学ぼうと思つたこともあり、Maeterlinck の短い脚本を藍本にしようと思つたこともある。東京へ出る少し前にした、最後の試みは二三十枚書き掛けたままで、谷中にある革包の底に這入っている。あれはその頃知らず識らずの間に、所謂自然派小説の影響を受けている最中であつたので、初めに狙つて書き出した Archaisme が、意味の上からも、詞の上からも途中で邪魔になつて来たのであつた。こん度は現代語で、現代人の微細な観察を書いて、そして古い伝説の味を傷けないようにして見

せようと、純一は工夫しているのである。

こんな事を思つて、暫く前から勝手の方でがたがた物音のしているのを、気にも留めずにいると、天井の真中に手繰り上げてある電燈が突然消えた。それと同時に、もう外は明るくなつて見えて、欄間から青白い光が幾筋かの細かい線になつてさし込んでゐる。

女中が十能を持つて這入つて来て、「おや」と云つた。どうしたわけか、綺麗な分の女中が来たのである。「つい存じませんでしたから」と云いながら、火鉢に火を付けてゐる。

ろくろく寝る隙もなかつたと思われるのに、女は綺麗に髪を撫で附けて、化粧をしている。火を活けるのが大ぶ手間が取れる。それに無口な性でもあるか、黙つてゐる。

純一は義務として何か言わなくてはならないような気がした。

「ねむたかないか」と云つて見た。

「いいえ」と女の答えた頃には、純一はまずい、*sentimental* な事を言つたように感じて、後悔している。「おやかましかつたでしょう」と、女が反問した。

「なに。好く寐られた」と、純一は努めて無造作に云つた。

障子の外では、がらがらと兩戸を繰り明ける音がし出した。女は丁度火を付けてしまつて、火鉢の縁を拭いていたが、その手を停めて云つた。

「あのお雑煮を上がりますでしようね」

「ああ、そうか。元日だったな。そんなら顔でも洗つて来よう」

純一は楊枝を使って顔を洗う間、綺麗な女中の事を思つていた。あの女はどこか柔かみのあ

る、気に入った女だ。立つ時、特別に心附けを遣ろうかしら。いや、廃たそう。そうしては、なんだか意味があるようで可笑しい。こんな事を思ったのである。

部屋に返るとき、入口で逢ったのは並の女中であった。夜具を片付けてくれたのであろう。

雑煮のお給仕も並のであった。その女中に九時八分の急行に間に合うように、国府津へ行くのだと云って勘定を言い附けると、仰山ごよさんらしく驚いて、「あら、それでは御養生にもなんにもなりませんわ」と云った。

「でも己より早く帰った人もあるじゃないか」

「それは違いますわ」

「どう違う」

「あれは騒ぎにいらっしやる方ですもの」

「なる程。騒ぐことは己には出来ないなあ」

雑煮の代りを取りに立つとき、女中は本當に立つのかと念を押した。そして純一が頷くうなずのを見て、独言ひとりごとのようにつぶやいた。

「お絹さんがきつとびっくりするわ」

「おい」と純一は呼び留めた。「お絹さんというのは誰だい」

「そら、けさこちらへお火を入れにまいったでしょう。きのうあなたがお着きになるとあれが直ぐにそう云いましたわ。あの方は本を沢山持っていらっしやったから、きつとお休みの間勉強をしにいらっしやったのだった」

こう云つて置いて、女中は通い盆を持って廊下へ出た。

純一はお絹と云う名が、自分の想像したあの女の性質に相応しているように思つて、一種の満足を覚えた。そしてそのお絹が忙しい中で自分を観察してくれたのを感謝すると同時に、自分があの女の生活を余り卑しく考えたのを悔いた。

雑煮の代りが来た。給仕の女中から、お絹の事を今少し精しく聞き出すことは、むずかしくもなさそうであつたが、純一は遠慮して問わなかつた。意味があつて問うように思われるのがつらかつたのである。

純一は取り散らしたものを革包の中に入れてながら、昨夜よりも今朝起きた時よりも、大ぶ冷かになつた心で、自己を反省し出した。東京へ帰ろうと云う決心を醸そうとは思わない。又それを醸す必要をも見出さない。帰つて書いて見ようと思ふ意志も衰えない。しかしその意志の純粹な中へ、極軽い疑惑が拔足をして来て交る。それはこれまで度々一時の発動に促されて書き出して見ても、挫折してしまつたではないかと云う囁きである。幸な事には、この囁きは意志を麻痺させようとするだけの力のあるものではない。却て製作の欲望を刺戟して、抗抵を増させるかと思われる位である。

これに反して、少しの間に余程變じたのは、坂井夫人に対する感じである。面当てをしよう、思い知らせようと云うような心持が、ゆうべから始終幾分かこの感じに交つていたが、今明るい昼の光の中で考えて見ると、それは慥かに錯つてゐる。我ながらなんと云うけちな事を考えたものだらう。まるで奴隷のような料簡だ。この様子では己はまだ大いに性格上の修養をしなくては

ならない。それにあの坂井の奥さんがなんで己が立ったと云って、悔恨や苦痛を感じるものか。八年前に死んだ詩人 Albert Samain は Xanthus と云う女人形の恋を書いていた。恋人の中には Platonique な公爵がいる。芸術家風の熱情のある青年音楽家がいる。それでもあの女人形を満足させるには、力強い銅人形がいなくてはならなかった。岡村は恐らくは坂井の奥さんの銅人形であろう。己はなんだ。青年音楽家程の熱情をも、あの奥さんに捧げてはいない。なんの取柄があるのだ。己が箱根を去ったからと云って、あの奥さんは小使を入れた蝦蟇口を落した程にも思っではいまい。そこでその奥さんに対して、己は不平がる権利がありそうにはない。一体己の不平はなんだ。あの奥さんを失う悲から出た不平ではない。自己を愛する心が傷つけられた不平に過ぎない。大村が恩もなく怨もなく別れた女の話をしたっけ。場合は違うが、己も今恩もなく怨もなく別れば好いのだ。ああ、しかしなんと思っで見ても寂しいことは寂しい。どうも自分の身の周囲に空虚が出来て来るような気がしてならない。好いわ。この寂しさの中から作品が生れないにも限らない。

帳場の男が勘定を持って来た。瀬戸の話に、湯治場やなんぞでは、書生さんと云うと、一人前の客としては扱わないと云ったが、この男は格別失敬な事も言わなかった。純一は書生社会の名誉を重んじて茶代を気張った。それからお絹に多く遣りたい為めに、外の女中にも並より多く祝儀を遣った。

宿泊料、茶代、祝儀それぞれ請取を持って来た女中が、車の支度が出来ていると知らせた。純一は革包に鏡を卸して立ち上がった。そこへお上さんが挨拶に出た。敷居の外に手を衝いて物

を言う、その態度がいかにうそやも恭しい。

純一が立って出ると、女中が革包を持って跡から来た。廊下の広い所に、女中が集まって、何か囁き合っていたのが、皆純一に暇乞いとまごをした。お絹は背後の方にしょんぼり立っていて、一人遅れて辞儀をした。

車に乗って外へ出て見ると、元日の空は晴れて、湯坂山にはも霧が掛かっている。きょうも格別寒くはない。

朝日橋に掛かる前に振り返って、坂井の奥さんの泊っている福住の座敷を見たら、障子が皆締まって、中はひっそりしていた。

注 解

(一) 磬 中国の楽器で、堅い石の板を吊り下げて鳴らす。わが国では仏具として用いられ、多く銅で作る。

(二) 毛利某 号、鷗村。モデルは鷗外自身か。

(三) 駒寄 人家の前に設ける低い垣。角材を並べ貫を通したものの。

(四) 菊細工の小屋 菊人形や菊細工を見せる小屋。

(五) 巾着切り すり。

(六) 掛流しの折 折敷や白木の膳具など。あるいは流しもの(羊羹を入れる)経木の折をいう。

(七) 廂髪 前髪を特に前方に突き出して結う束髪の種類。明治末期から大正初期にかけて女学生の間
に流行した。

(八) fanatic (英)狂信的。

(九) 地獄 淫売婦。

(一〇) attribute (英)属性。

(一一) 転瞬倏忽の間 瞬間。「転」はころぶ、「瞬」はまばたく、「倏」は「倏」の俗字、たちまち、「忽」もたちまち、の意。

(一二) 蹠口 茶室特有の小さな入口。体をにじって出入りする。幅一尺九寸五分、高さ二尺二寸五分が定法。

(一三) セガンチニ Giovanni Segantini (1858—1899) イタリアの風景画家。アルプス山麓に住み、ア

ルプスを主な画材とした。

- (一四) ミッション [mission(英)] 使命。
- (一五) タラアル [Talar(独)] 長い上衣。
- (一六) Figaro フランスの諷刺的な新聞。一八二五年創刊、一八五四年再刊、一八六六年より日刊。
- (一七) 香箱を作つて 猫が体をまるめてうずくまっているさま。「香箱」は香を入れる箱。香合。
- (一八) Romancier (仏) 小説家。
- (一九) 拊石 姓は平田。夏目漱石(1867—1916)がモデル。
- (二〇) DIDASKALIA (ギリシヤ語) 劇作家が俳優に与えた注意、脚本冒頭の解説の意。
- (二一) アイロニー [irony(英)] 皮肉。
- (二二) Autonomie (仏) 自治。自律。
- (二三) Clique (仏) 徒党。仲間。
- (二四) Bohème (仏) 放縦な生活を送る人。放浪者。
- (二五) アレゴリイ [allégorie(仏)] 比喩。寓意。
- (二六) ヴェネチア Venezia イタリア北部、ヴェネチア湾にのぞむ都市。『オセロ』の舞台になつてゐる。
- (二七) パルケット [parquet(仏)] 正しくはパルケエ。小さな囲い地。ここでは一階の座席。
- (二八) アルトリュヌスチック [altruistique(仏)] 愛他的。利他主義の。
- (二九) 檻の狼 エラと双生児のグンヒルトは、夫ボルクマンの部屋を「檻」と呼び「その中に病気になる狼が飼つてある」という。
- (三〇) Spiritisme (仏) 交霊術。

- (三二) 鵜蚌ならぬ三人に争われる。鵜しぎと蚌かきがいが争っているところに漁師が来て、一度に両方ともつかまえたということから、争う者は第三者に利益を横取りされ、自分たちは共倒れになるという戒め。「鵜蚌の争い、漁夫の利」(『戦国策』の故事)をふまえている。
- (三二) Parfum (仏)香水。ルビのバルフェウムは英語よみ。
- (三三) Buffet (仏)食堂。
- (三四) probabilité (仏)確率。
- (三五) foyer (仏)休憩室。遊歩場。
- (三六) Titanos Titanes (ラテン語)ギリシヤ神話で、天の神 Uranos と Hestia の子である巨人神。
- (三七) 閱歴がある 閱歴は経歴のこと。坂井夫人と肉体的関係をもったこと。
- (三八) 消遣策 ひまつぶしの方法。
- (三九) une direction dominante (仏)優勢な方向。
- (四〇) pro (ラテン語)ここでは賛成の意味。
- (四一) contra (ラテン語)反対の意。pro に対している。
- (四二) インテレクト [intellect (英)] 知性。
- (四三) paroxysme (仏)頂点。
- (四四) Aude ヘルギーの小説家ルモンニエエ (Camille Lemonnier, 1845—1913) の作品の人物。
- (四五) frivole (仏)軽はずみな。はずっぱな。
- (四六) aventure (仏)恋愛事件。
- (四七) vanité (仏)虚栄心。
- (四八) raffiné (仏)洗練された。

- (四九) 頸に墨を打たれた 姦通罪で入れ墨の刑に処せられること。
- (五〇) en miniature (仏)縮図的。
- (五一) 電信体 片山孤村が明治三十三年十二月、雑誌『帝国文学』の「統神経質の文学」で紹介したドイツの自然主義詩人アルノー・ホルツ (Arno Holz, 1863—1929) の口語自由詩形の作風を「電信体」といったのにもとづいている。
- (五二) 三位一体のドグマ 三位一体はキリスト教で、創造主としての父なる神と贖罪者キリストとして世に現われた子なる神と、信仰経験に顕示された聖霊なる神とが、唯一なる神の三つの神格として現われるとする説。dogma (英) はその教理のこと。
- (五三) sataniste (仏)悪魔主義者。悪魔教崇拜者。
- (五四) agresif (仏)攻撃的。侵略的。
- (五五) cercleをしてぐる 一つの集団を形づくっている。cercle (仏) は円、サークル。
- (五六) manérisme (仏)マンネリズム。惰性。
- (五七) representative (仏)代表的。典型的。
- (五八) オオトリシアン [Aurichien (仏)] オーストリア人。
- (五九) hypocrites (仏)偽善者。
- (六〇) 東京や無名通信 『無名通信』は明治四十二年四月発刊の暴露専門の月刊雑誌。『東京』は不詳だが、やはりその種のものか。
- (六一) antisociale (仏)反社会的。
- (六二) polype (仏)ヒドロ虫類の無性生殖時代の形態。体は管状で、一端に口が開き、その周囲に触手をそなえ、他端で他物に付着し固着生活をする。

- (六三) *Ivresse* (仏)酔い。
- (六四) *Dionisos* ギリシヤ神話の酒神。ローマ神話のバッカスに当る。ディオニソスは、情意的、衝動的傾向の意。後出の *Dionysos* が正しいつづり。
- (六五) *Apollon* ギリシヤ神話の神。医術、音楽、弓術、予言の神。後に太陽神と同一視された。アポロは、調和ある統一・端正な秩序を目的とする傾向。
- (六六) *coup* (仏)一擲^{てま}。
- (六七) *censure* (仏)検閲。
- (六八) 小新聞 明治前期の新聞は「大新聞」と「小新聞」とに区別されていて、「小新聞」は、やや小型で社会面を主とした総ふりがなつきの戯作文体で、娯楽的な新聞であった。『読売新聞』は、後まで残った代表的な小新聞である。
- (六九) *Corps diplomatique* (仏)外交界。
- (七〇) 盲目なる策励 ここでは性欲の衝動のこと。
- (七一) *courte-pointe* (仏)装飾用の寝台かけ。
- (七二) *jet de la draperie* (仏)衣服の垂れ具合。
- (七三) *possibilité* (仏)可能性。
- (七四) *dignité* (仏)品位。尊厳。ルビのジグニテエは英語よみ。
- (七五) シチュアション [situation(仏)]立場。状況。
- (七六) *colonnade* (仏)柱廊。
- (七七) 天外の長者屋 小杉天外(1866—1952)の長編小説(明治四十二年—四十三年)。ゾラの『金』にヒントを得て、実業界の裏面を描いたもの。

- (七八) rime de mort (仏) 死者の顔色。
- (七九) Sphinx (仏) 獅子身女頭の怪物。
- (八〇) ironiquement (仏) 皮肉に。
- (八一) Une persuasion puissante et chaleureuse (仏) 強く熱情的な説得。
- (八二) 旧主人 旧藩主。
- (八三) effet (仏) 効能。効果。
- (八四) esprit non préoccupé (仏) 先入主のない精神。
- (八五) 岡倉時代 岡倉天心 (1862-1913) が校長であった時代、明治二十三年から三十一年までのこと。岡倉天心は本名寛三。美術批評家。のちに日本美術院を創設、明治美術の父と称せられた。
- (八六) 鄧完白 (1796-1820) 中国清代の書家。名は石如。字は頑白。号は完白山。篆書では清代の第一人者で篆刻に秀でていた。
- (八七) utilitaire (仏) 功利主義者。
- (八八) écriture runique (仏) 北欧古代文字。深い皺しわのたとえ。
- (八九) tertium comparationis (ラテン語) 第三番目の引合い。
- (九〇) Antigéisme 反芸者主義。フランス風にしやれて作った語。
- (九一) ironie (仏) 反語法。皮肉。
- (九二) Cynisme (仏) 犬儒派。キニク学派。ソクラテスの門人アンティステネスを祖とする。社会的文明的所産を軽視し、できるだけ恬淡無欲な自然生活の中に個人的精神の絶対自由を確保しようとした。
- (九三) misanthrope (仏) 人間嫌い。

- (九四) 秦淮 南京にある花街。近くを淮水が流れている。
- (九五) malintentionné (仏)悪意のある。
- (九六) indifférent (仏)無関心な人。局外者。
- (九七) Atropos (ラテン語)ギリシヤ神話の運命の女神。
- (九八) calme (仏)平静、冷静。
- (九九) drue (仏)(鳥などの)成長した。ここでは一人前の芸妓となった。
- (一〇〇) Voix de fausset (仏)裏声。
- (一〇一) Facétie (仏)道化。俄一洒落・滑稽を主とした一種の茶番狂言。終末を落ちで結ぶ。
- (一〇二) grimace (仏)洗面。
- (一〇三) 青眼 人を歓迎する眼つき。白眼の反対。
- (一〇四) mécène (仏)学芸の保護者。
- (一〇五) 冤屈 無実の罪。
- (一〇六) collision (仏)衝突。
- (一〇七) triomphe (仏)誇り。勝利。
- (一〇八) 岸駒 (1749—1838)岸は氏、駒は名。江戸時代の画家。狩野派、沈南蘋の画風を学び虎の絵に秀じた。
- (一〇九) surprise (仏)驚き。
- (一一〇) chaos (英)渾沌。
- (一一一) enoens (仏)香。
- (一二三) suggestion (仏)正しくはシュセスション。暗示。

- (二三) scène (仏)場面。
- (二四) Aravisme (仏)隔世遺伝。
- (二五) L'oiseau bleu (仏)青い鳥。ベルギーの詩人、劇作家メーテルリンク (Maurice Maeterlink, 1862—1949) の代表作の1つ。
- (二六) A peine Tytyl a-t-il……ナルチルがダイヤモンドを回すと、たちまち万物に不可思議な突然の変化が起る。『青い鳥』の第一幕第一場のト書。
- (二七) 維摩経 維摩詰所説経・三卷十四品。在俗の維摩が偏狭な仏弟子を啓発し、般若の空理によって不可思議な解脱の境界に達することを、すぐれた戯曲的手法をもって説いた大乘經典。
- (二八) 大発見 鷗外の小説『大発見』(明治四十二年六月発表)。西洋人の鼻くそをほじくることを発見した話を書いてある。
- (二九) 器世界 仏教語。生命の住む世界。現世のこと。
- (三〇) 一転語 前説をがらりと変える説。
- (三一) 苦艱籠めに生を領略する 苦しみを包含したままで人生の意味をささる。
- (三二) méconnaissance (仏)認識不足。
- (三三) Institut Pasteur パストゥール研究所。伝染病の研究所。
- (三四) routiniers (仏)熟練者。
- (三五) homosexuel (仏)同性愛の。
- (三六) ruine (仏)破滅。衰え。
- (三七) Nicht doch (独)そんなことは決してない、の意。一九〇八年の小説の名。
- (三八) innocente (仏)無邪気な人。あどけない人。

- (三九) 紫の矢絰過ぎてゐる。「紫の矢絰」は当代の女学生の愛用の着物。女学生風で、新しがりすぎる。
- (四〇) Solitude (仏)孤独。
- (四一) einsam (独)孤独の。
- (四二) zweisam (独)一對の。
- (四三) インヴェネス [Inverness (英)] 外套の一種。
- (四四) fierté (仏)自尊心。誇り。
- (四五) lemmures (ラテン語)幽霊。
- (四六) femme omnisciente (仏)若ちをどこかに置き忘れたような女。
- (四七) théâtral (仏)劇的。
- (四八) 箒 たけのこ。
- (四九) tegmatique (仏)物に動じない。冷静な。
- (五〇) 境遇の懐子 運命の秘蔵っ子。
- (五一) efféminé (仏)女性的な。
- (五二) Un geste, un…… (仏)身ぶりとはではない言葉。
- (五三) Lethe (ラテン語)忘却。死者の住む国にある河。その水を飲んであらゆる過去を忘れるという。
- (五四) élégiaque (仏)挽歌風の。
- (五五) discret (仏)控え目な。慎み深い。
- (五六) complot (仏)陰謀。
- (五七) 半玉 玉代の半分の芸妓。半人前の芸妓。
- (五八) 人形喰 美貌にだけ目をつけて人を選り好みする人。

- (二兎) Ondine (仏)北歐神話に出てくる水神。水の精。
- (二五) Faune (仏)牧神。山羊の足と角とをもつローマの林野牧畜の神。Fauns (ラテン語)
- (二五) irrefutable (仏)弁駁べんぱくされない。
- (二五) 黒甜郷 熟眠の世界。
- (二五) héroïque (仏)英雄的。
- (二五) Der Teufel hole sie! (独)悪魔よ彼女を連れて行け。
- (二五) sujet (仏)主題。
- (二五) 藍本 種本。
- (二七) Archaisme (仏)正しくはアルカイスム。擬古主義。

解 説

この小説は叮嚀ていねいに、時間をかけてゆっくりと読まれることを要求している。頭の中にある何か創造的な星雲めいたものを言語的に客観化しようとして、せわしない眼つきで自分が持っている言葉の畑の中を見廻して、急いでそこらのありあう言葉を次ぎつぎと掴み取って作られるという気味のある日本の現代作家の書いた小説を読むようにして読んだのでは、この作品の言わんとするところも、その味や香かおりも、諷刺ふうしや反語も理解されまい。『青年』の作者は、日本の現代作家などとは絶対に比較出来ないほどの学殖の持主であった上に、その作風も、頭の中にある文学的なものもやを言葉の形でただ外へ投げ出すというのではなく、ここに伝うべきことがあり、かすかに豊富で正確な語彙ごいがあり、綿密な計算に基づいて、その伝えようと思うものを最も的確に伝えることの出来る言葉を選び出して、文を綴り、章を重ねて行くという性質のものであったからである。だからと言って私は、『青年』が美的・形式的に完成した、完璧な作品だと言おうとするものではない。

『青年』は明治四十三年（一九一〇年）三月一日発行の雑誌『スバル』第二巻第三号に掲載され始め、明治四十四年（一九一一年）同誌第三巻第八号（八月一日発行）に載った最終章第二十四章を以って完結した。『雁』（明治四十四年九月—大正二年（一九一三年）五月）及び『灰燼』（三田文

『明治四十四年十月—大正元年（一九一二年）十二月、未完に終る』と共に鷗外が試みた三編の長編現代小説の一つである。

鷗外は明治三十九年（一九〇六年）一月、日露戦争から凱旋して、翌年十月に陸軍軍医としては最高の陸軍軍医総監、陸軍省医務局長という地位に就き、一年置いた明治四十二年（一九〇九年）から文壇でまことに目ざましい活動を開始する。そして『青年』は鷗外の書いた長編現代小説の第一作であり、時に鷗外は四十八歳であった。こういう小説を書くことを思い立った鷗外の頭の片隅には、ひょっとすると、二年以前（明治四十一年）に発表された夏目漱石の『三四郎』の影がちらついていたのかも知れない。

『青年』を文学史的用語で性格づけるならば、これは紛れもない「教養小説」あるいは「発展小説」である。教養小説、発展小説は、小説の一ジャンルに対して、ドイツの文学史家の好んで用いる名称で、白紙に等しい青年が精神的、肉体的、世間的、人間的に一人前の人間へと成長して行く過程を描こうとするものである。ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』、二十世紀のものではトーマス・マンの『魔の山』などがそれであり、鷗外の『青年』は漱石の『三四郎』とともに日本で書かれた最初の教養・発展小説であろう。そしてこの種の小説にあっては、外面的な事件や筋よりも、主人公の内面生活の展開と動きの追尋とがより本質的である。現に第十章「純一が日記の断片」中には「そんならどうしたら好いか。／生きる。生活する。／答は簡単である。しかしその内容は簡単どころではない。／一体日本人は生きるということを知っているだろうか。小学校の門を潜ってからというものは、一しよ懸命にこの学校時代を駆け抜けよ

うとする。その先きには生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にあり附くと、その職業を為し遂げてしまおうとする。その先きには生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。／現在は過去と未来との間に劃した一線である。この線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。／そこで己は何をしている」（斜線は行の改まることを示す。なお読者は『カズイヌチカ』『明治四十四年』『妄想』『同上』を参照せられたい）とあるが、『青年』の問題は、この引用文中に尽くされていると言ってもいい。つまり「人生とは何か」「人間はいかに生きべきか」がそれである。

こういう根本的な問いに対する答えは一応出されている。「利他的個人主義はそうではない。我という城廓を堅く守って、一步も仮借しないでいて、人生のあらゆる事物を領略する。君には忠義を尽す。しかし国民としての我は、昔何もかもごちゃごちゃにしていた時代の所謂臣妾ではない。親には孝行を尽す。しかし人の子としての我は、昔子を売ることも殺すことも出来た時代の奴隸ではない。忠義も孝行も、我の領略し得た人生の価値に過ぎない。日常の生活一切も、我の領略して行く人生の価値である。そんならその我というものを棄てる事が出来るか。犠牲にすることが出来るか。それも慥に出来る。恋愛生活の最大の肯定が情死になるように、忠義生活の最大の肯定が戦死にもなる。生が万有を領略してしまえば、個人は死ぬる。個人主義が万有主義になる。遁世主義で生を否定して死ぬるのとは違う。どうだろ、君、こう云う議論は」（傍点は解説者。因みに読者は『かのように』『明治四十五年』を併せ読まれるといい）という、純一の新しい友人、大学で医学を学んでいる大村莊之助のいわゆる利他的個人主義がその一応の解答であ

る。

教養・発展小説では、普通「白紙」の主人公をめぐって、その周囲にさまざまな勢力が舞まき合あう。トーマス・マンの『魔の山』では、セテムブリーニ、ナフタ、マダム・ショーシャという三人が「白紙」の主人公ハンス・カストルプを争い合うが、『青年』では、小泉純一は二つの極の引力に牽ひかれる。精神を代表する大村莊之助と、生を代表する坂井れい子未亡人とがその二つの極である。純一は大村によって精神的世界への開眼かいかんを体験し、坂井夫人のダブによって「男」に叙せられる（「しかし己は知らざる人であったが、〔坂井夫人を訪れた〕今日知る人になったのである」第十章「純一が日記の断片」）。

ところでこの小説の初版本には、最後に「完」とあって、『灰燼』のように未完でもなく中絶もしていないが、もしこれが本来の教養・発展小説であったならば、この小説の最後にある捨てぜりふめいた言葉、「ああ、しかしなんと思っおもって見ても寂さびしいことは寂さびしい。どうも自分の身の周囲に空虚が出来て来るような気がしてならない。好いわ。この寂さびしさの中から作品が生れないにも限らない」は、まさにこの小説の出发点でこそあれ、決して終点であってはならない。ここから未来へ向って、純一の本来の生活が展開されて行いって初めてこの小説は首尾を一貫せしめ得るのであって、この作品において「完」という文字が出てくるまでの部分、すなわち現在の姿の『青年』は、書かるべくして書かれなかつた教養・発展小説『青年』のいわば序論なのであり、われわれの読後感もこのことを明瞭にわれわれに語り告げている。

しかし序論『青年』の書かれずに終った本論もないことはない。この作品以後に始まった臨外

の小説家としての、文学者としての実際の生活であり活動こそまさしくそれであった。鷗外はこの一編を書くことによって自分が作家として起つことを宣言したのである。

最後に『青年』において見逃すことのできない諸点を挙げて置く。

第一に『青年』には二重の意味での虚構性がある。文学作品は一般的に言つて虚構である。本来虚構である作品を、鷗外は意識的に虚構的に作り上げている。この作品の到るところに布置結構や設定のわざとらしさ、ぎごちなさを感じ取り、見出さない読者はあるまい。『青年』はあまりにも「作りもの」すぎるといふ感を禁じ得ない。

このことは第二に、『青年』の作者の教育的意図と深く関聯している。「給仕が大村の前にあるフライの皿を引いて、純一の前へ来て顔を覗くようにした。純一は『好いよ』と云つて、フォークを皿の中へ入れて、持つて行かせて話し続けた」という叙述などには、西洋料理を食べる作法をそれとなく読者に教えようという鷗外の意図が仄見えてさえている。こういう箇所はほかにもいくらかある。『青年』においては、普通の小説のように作者と主人公とが同じ平面に立つてはいはず、作者は教育者・父、主人公と、そして読者は生徒・子なのである。これも教養・発展小説の特異な属性の一つであらう。

第三に従つて（そしてこの「従つて」は厳密に論理的な「従つて」なのであるが）純一は美男子で客観的には紛れもない艶福家で、作中のあらゆる女性から好意を寄せられる。純一は鷗外自身、遅まきに描かれた「若き自己の願望像」なのであり、純一をどの女からも好かれる美青年としたということは、鷗外の自己愛に基づく心理的補償という意味を持つのである。こういう主

人公の設定は鷗外においては異例のことに属するのである。

第四に注目すべきは、鷗外はいついかなる場合にも冷静に、自己と描写対象との間に一定の距離を設けていて、これを絶対に崩さない。ここからまた、特に純一の日記中に見られるような極めて冷静で客観的な心理分析も可能になってきたわけである。

第五は、第四とはうらはらに鷗外の小説の中で、これほどその書かれた当時の現実社会に幾多の揶揄的、批判的、戯画的な糸で結ばれている小説はほかにはないという点である。「毛利鷗村」は鷗外の自己戯画化であらうし、「拊石」は漱石、「高島詠子」は下田歌子、「大石路花」は徳富蘆花であらう。その他の人物にもモデルがあるようである。最後に一つ、盛んにフランス語を振廻す鷗外は *dignité* に「ジグニテエ」などと誤ったルビを振っている。

『青年』は鷗外が余裕たっぷり楽しく書き進めた童話であつたらしい。こう考えれば、この作品の持つ数々の奇異な点も見事に説明されるであらう。

高橋義孝